

332
Su782 k



0020834000

2

0020834-000

332-Su782k

近世社会史

住谷亮一・著

三笠書房

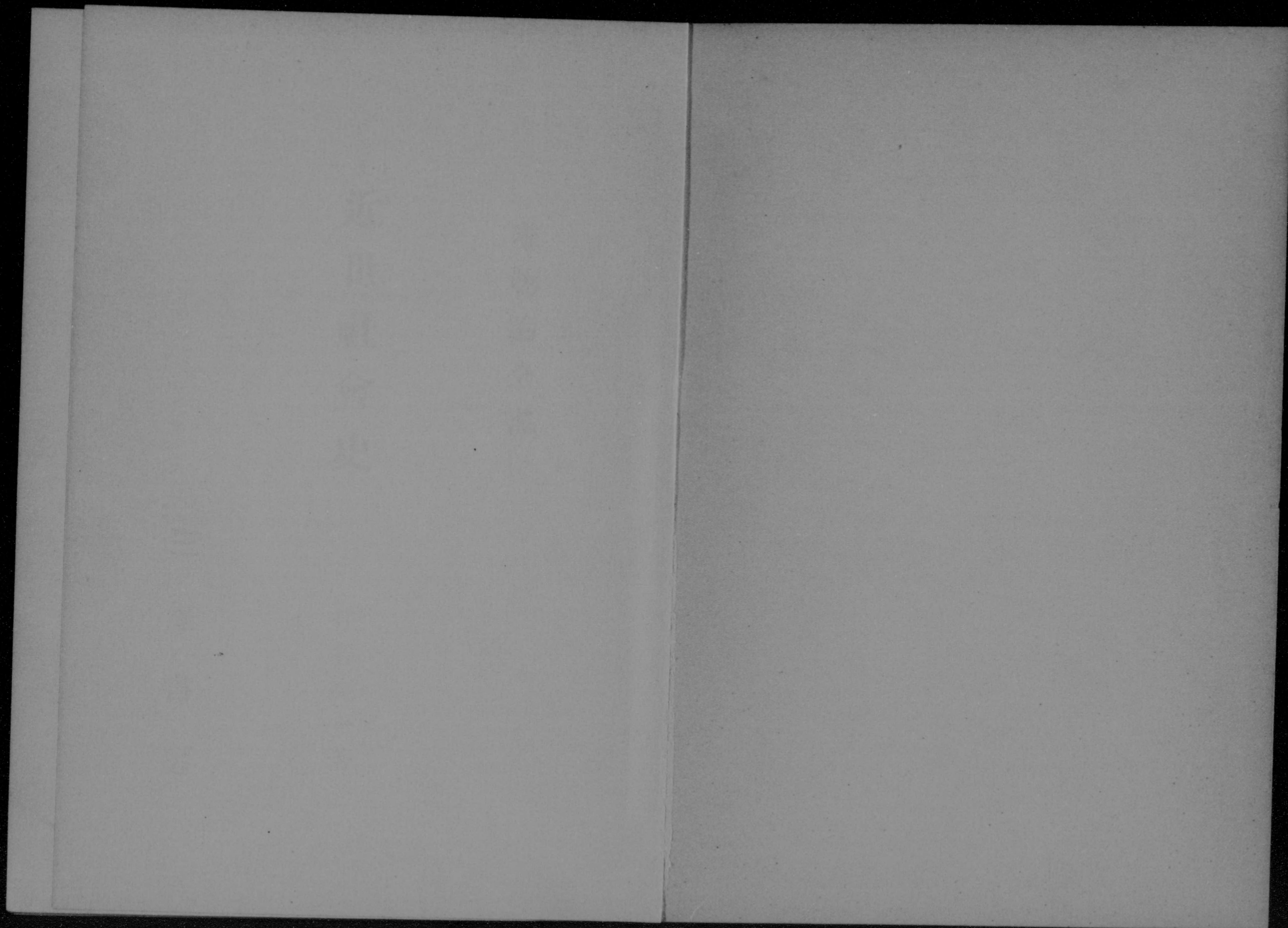
1936

ADC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

No. 270

270



唯物論全書

近世社會史

住谷亮一著

カ

三笠書房

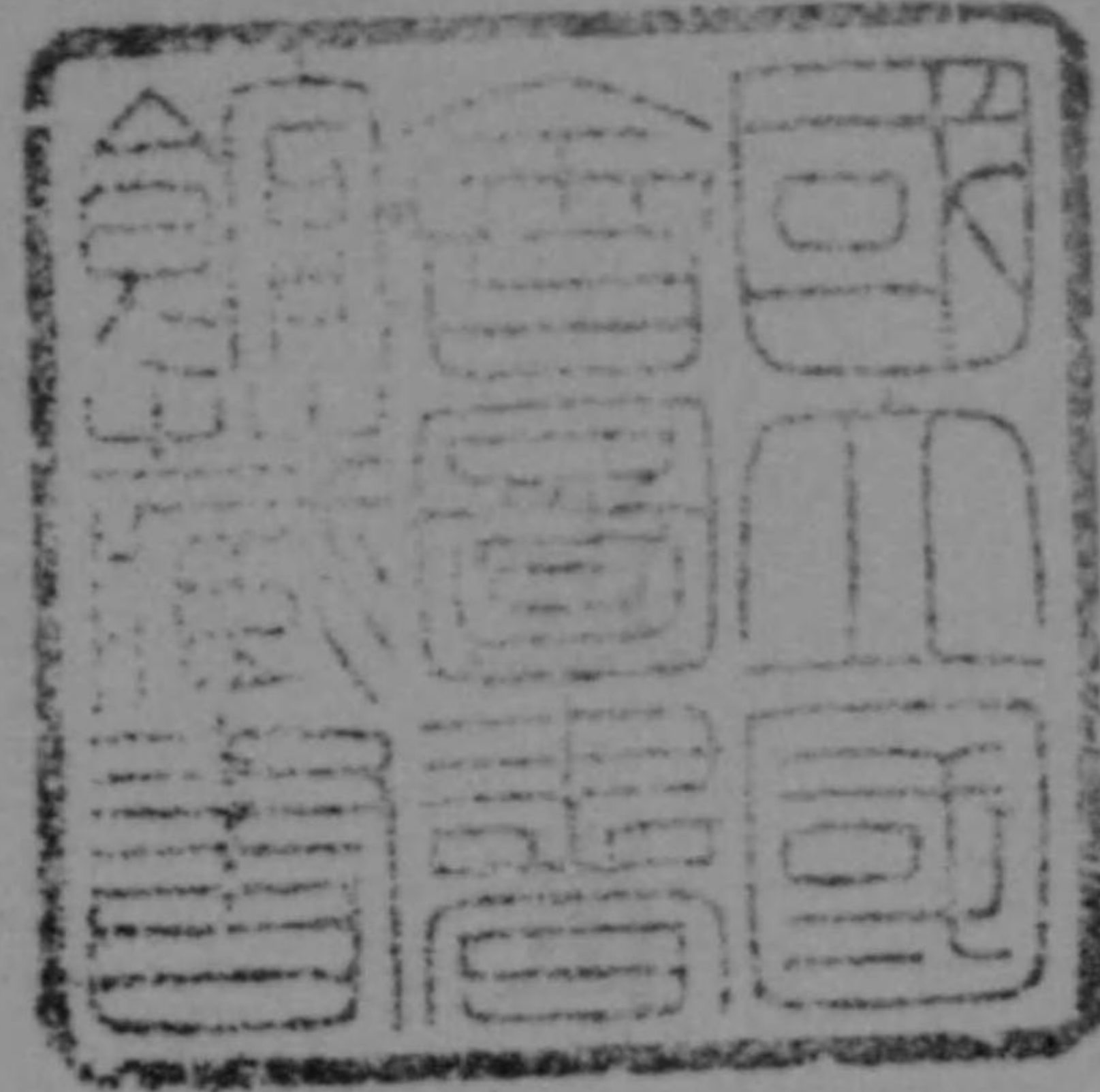
018008

332.Su782k

序

「近世社會史」として本書で取扱はんとした部分は、封建社會の胎内に育まれた一層高度な生産諸關係が將にそれ自らの固有の形態を採らんとした頃における社會的諸過程であつて、年代から言へば大體十八世紀より十九世紀にかけての時期である。

この歴史的時期こそは舊き殻をかなぐり棄てんとする力と、あくまで此の舊き殻を固執して此の中に安逸を貪らんとする力との激しき鬭争の場面が至る所に展開された時期であつた。そこには人類が經過し來つたその長き歴史において、稀に見る希望と絶望、歡喜と苦惱、緊張と裏切りとがあり、限りなき醜惡と限りなき高貴との混淆した坩堝があつた。しかも、これらすべての人間社會の諸相を通じて、その社會過程における素晴らしき一歩前進が跡づけられたところの意義深き時期であつたのである。イギリスにおいて先づ紡績機械といふ怪物の出現以後、變革された産業界と社會大衆の慘澹たる生活行進。しかもそ



239310

れは前進へのマーチであり、フランスにおける舊制度への反撃と自由・平等・友愛の叫びは、おびたゞしき高貴な生命の犠牲を支拂ひつつも、よりよき世界へ各國の人心を鼓舞した。荒涼たるシベリアの原野に咽び泣く農奴のために立つてクラスナヤ廣場の雪に消えたプガチョフやステンカ・ラーヂンの運動、新大陸の農夫ジョン・ブラウンの黒奴隷解放への闘争と刑死、封建勢力の馬蹄に散つた十八・九世紀のドイツ民衆の運動、これら凡べて近世社會史上の事件は、必然の歴史過程への人間の參與の深き意味を示すものである。かくて現在に最も近く結ぶ近世社會史の検討は、過去への回顧であると共に未來への展望であり、この現實に生きつつある過去は、未來への發展的契機を爲し、ここに歴史研究の積極的意義が把握せらるるであらう。

近世社會史に關し、不幸にして著者は淺學菲才、ただカーライルの雄勁なる「フランス革命史」、クロボトキンの詩藻あふるる「フランス革命史」、社會過程の適確なる分析に成るエンゲルスの「イギリス勞働者階級の狀態」やマルクスの「資本論」による近世社會の描出、メーリングの壯麗なる「ドイツ史」、レーニンの「ロシアにおける資本主義の發達」

史論、犀利な批判に充つるボクロフスキーの「アメリカ資本主義の發達」史等々の史的文獻の前に深く頭を垂れるのみで、これに何ら加ふるを得ず、また自ら新説を立つること能はざるを耻づる。

本書においては、複雑にして廣範圍に亘る近世社會史の要領さへ充分に盡すことは困難であるが、私はイギリスにおいては産業革命を中心に、フランスにおいては特に千七百八十九年——九九年を、ロシアにおいては農奴解放を、ドイツにおいては一八四五年を、アメリカにおいては獨立運動と奴隷解放を對象とし、封建社會より近代資本主義社會への推移過程の特質を眺めようとした。特にこの過程においては、中世封建勢力への闘争に關しブルジョアジーと協同して全力をつくして勝利を得た農民勞働者が、新興社會關係の下に如何なるものを興へられたかといふこと、世を擧げて歡喜し、夢み、希望した新社會關係にも、尙ほ依然として内在的矛盾は新しい扮装の下に育くまれつつあることの洞察を必要とする。

それから本書においては、日本・支那・フィリッピン等の東洋における近世社會過程を

盛ることの出来なかつたことを甚だ遺憾とする。終りに本書は、一學友の助力なくしては書き上げることが出来なかつたことを記してここに感謝の意を表する。

昭和十一年十月三十一日

著者

目次

序	緒論	近世社會史とその意義	一
		従來の歴史區分(二)——歴史の意義(三)——歴史學の意義(三)	
		近世社會史とその意義(七)	
第一章	イギリス	二	
第一節	産業革命前のイギリスの状態	二	
	農村の状態(二)——同業組合(三)——家内工業と商人資本(四)		
第二節	農業革命	一五	
	農民の追放(二五)——羊が人を喰ふ(二七)——墾闢法と産業豫備軍の發生(三)		
第三節	技術の革命過程	二三	

紡績機械の發明の世界史的意義(三三)——ワイアットとケイの發明(三六)——アークライトの發明と工場制度の出現(三八)——技術史上におけるヘロンとワットの蒸汽機關の意義(三〇)

第四節 産業革命後のイギリス 三四

工場制度の確立(三四)——工場制工業の社會的意義(三六)——婦人及少年労働者の激増(三八)

第五節 工業労働者の状態 四〇

近代的労働者の出現(四〇)——労働者と奴隸との區別(四四)——労働者と農奴との區別(四五)——労働者とマニユファクチュア労働者との區別(四六)——労働者の状態(四七)——トーマス・カーライルの觀察(五二)——破壊された労働者の家庭生活(五三)——少年と婦人労働者(五七)——二大陣營への分裂(五九)

第六節 産業革命とイデオロギーの變革 六二

資本主義の本質的精神(六二)——ケネーの自由放任論とスミスの思想(六三)——マルサスの罪惡・困窮不可避論(六五)——リカルドの地主辯護論(六八)——マルサスとリカルドの論争の社會史的意

義(七〇)

第七節 ブルジョアジーの政治的支配 七一

政治は經濟の集中的表現(七一)——初期イギリスの議會(七四)——マーカーンテイリズム政策とアメリカの獨立(七五)——選舉法の改正(七七)

第八節 初期無産階級思想と運動 八二

ロバート・オウエンと彼の根本思想(八二)——空想的社會主義批判(八五)——労働組合及びチャーチスト運動(八七)——チャーチズムの思想(九二)——チャーチズム批判(九三)——労働者運動の歴史的傾向(九五)

第二章 アメリカ 九六

第一節 北アメリカ合衆國の建國 九九

十八世紀初葉におけるイギリスのアメリカ植民地(九九)——アメリカ植民地の相互の接近(一〇二)——イギリス重商政策との衝突(一〇四)——獨立宣言(一〇七)——獨立戦争の對外的及對内的意義(一一一)

第二節 アメリカ憲法の特徴 二二三

憲法制定への過程 (二二三) — ダニエル・シアイスの一揆と新憲法 (二二四) — アメリカ憲法の特徴 (二二七) — ブルジョア民主主義憲法たる理由 (二二八)

第三節 南北戦争とその後の発展 二三〇

十九世紀前半における合衆國の致富 (二三〇) — 棉花・黄金・黒人奴隷 (二三二) — 南北兩部の衝突の原因 (二三五) — ジョン・ブラウン父子の刑死 (二三九) — 南北戦争の社會的意義 (二三三) — 資本主義の躍進と内在的矛盾 (二三三)

第三章 フランス 二三七

第一節 十八世紀末葉に於けるフランスの經濟状態 二四〇

フランス資本主義發達の諸前提 (二四〇) — 商業 (二四六) — 工業 (二四八) — 農業 (二五八)

第二節 十八世紀末のフランスにおける階級關係 二六五

國家組織 — アブソルウト・モナーキー (二六五) — 階級諸關係 (舊勢

の衰微・新勢力の壓力) 貴族と僧侶 (二六八) — 官僚貴族 (二七二) — ブルジョアジー (二七三) — インテリゲンチヤ (二七六) — 手工業者と労働者 (二七七) — 農民 (二八〇)

第三節 十八世紀フランスのブルジョアイデオロギ 二八三

第四節 ブルジョア貴族的秩序の時代 (二七九—二七九二年) 二九二

その前夜 — 三部會召集前の國內情勢 (二九三) — 國家財政の破綻 (二九四) — 三部會 (二九六) — パリー及び地方に於ける革命 (二九九) — 外形上の農民解放 (二九九) — 人權宣言 (三〇五) — 諸黨派 (三二三) — 宮廷の裏切、反革命 (三三四) — 宣戰布告 (三三六)

第五節 ジロンド派の権力時代 (二七九—二七九三年) 二九八

一七九二年八月十日 (二九八) — 國民協議會 (三〇〇) — ジロンド派とジャコバン派 (三〇二)

第六節 小ブルジョアジーの××的獨裁時代 (二七九—二九四年) 三三三

一七九三年五月三十一日—六月二日 (三三三) — 一七九三年のジャコバン憲法 (三三四) — ジャコバン派の農業改革 (三三五) — 革命と文

化(三三六)——ジャコバン派の内部闘争(三三七)——ジャコバン派の没落とテルミドールの反動(三三一)

第七節 ブルジョア反動の時代(一七四—一九年) 二二二

共和國第三年の憲法(三三三)——グラックス・バプーフの平等會(三三三)——ナポレオンの軍事獨裁の樹立迄(三三四)——フランス革命の世界的意義(二三六)

第四章 ロシア 二二九

第一節 近世ロシアにおける農奴制 二二九

十八世紀におけるロシア社會の階級構成(三三九)——ペートル大帝の人口調査(軍備と徴税)と農奴政策(三四一)

第二節 農奴制度の奴隸的性質 二四六

カタリナ二世の農奴迫害(二四六)——地主農奴・國有地農奴・御料地農奴(二四九)

第三節 ステンカ・ラーヂンとプガチョフの叛亂 二五三

農奴の叛亂(二五三) ステンカ・ラーヂンの叛亂(二五五)——プガチョフの叛亂(二五六)——失敗の原因と歴史的特質(二五八)

第四節 ロシアにおける資本主義の發達 二六〇

一 商業および工業の發達 二六〇
十八世紀の工業の狀態(二六〇)——十九世紀における對外貿易(二六三)——十九世紀初期の商業(二六四)——鐵道敷設と商業資本の工業資本への轉化(二六四)

二 大工業の發達 二六六

ロシア工業への西ヨーロッパの影響(二六六)——十九世紀前半の工業(二六七)——十九世紀後半大工業の發達(二六九)

第五節 農奴の解放 二七二

一 農奴解放の原因とその社會史的意義 二七二
農奴解放の原因(二七三)——改革の意義(二七三)

二 十九世紀初期の少数者の運動 二七五
デカブリストの運動(二七六)——ニヒリズム時代(二七九)

三 農奴解放とその結果 二七九

解放の前驅 (二八〇) — 農奴解放の内容 (二八二) — 解放の結果 (二八八)

第六節 社會組織の變動と社會運動 二八九

農奴解放の幻滅とテロリズム時代 (二八九) — ナロードニキ (二九二)
 ナロードナヤ・イ・ゾオリアの綱領 (二九三) — チェルニ・ペレデルの
 政策的特質 (二九四) — マルキシズムの影響と社會民主黨の結成 (二
 九四)

第五章 ドイツ 二九七

第一節 十九世紀初頭のドイツ『一八四八年』の諸前提 二九九

- 一 十九世紀初頭のドイツ經濟狀勢 二九九
 農業 (三〇一) — ドイツ土地制度の特徴 (三〇二) — 工業 (三〇三) —
 — 商業・交通 (三〇五)
 二 ドイツの基本的諸階級 三〇七
 封建貴族 (三〇七) — プルジョアジー (三〇八) — 都市小ブルジョア
 ジー (三〇九) — 労働階級 (三一〇) — 農民 (三一三)
 三 基本的諸階級のイデオロギー 三二六
 青年ドイツ派 (三二六) — ハイネ (三二六) — ヘーゲル (三二八) — フ

第二節 三月革命とその諸結果 三二四

オイエルバツハ (三二九) — マルクス・エンゲルス (三三〇) — ヴイ
 トリング (三三三) — フンド・デル・コムミュニステン (三三四)
 ウインの革命 (三三五) — ベルリン (三三六) — フランクフルト議會
 (三三七) — 労働者独自の運動 (三三九) — 反革命の勝利 (三三九) —
 一八四八年の意義 (三四四)

第六章 十九世紀における労働者の國際的運動 三三七

第一節 インターナショナルの成立事情 三三七

運動の先驅 (三三七) — 客觀的情勢 (三三八) — 一八六四年九月二十
 八日 (三四三)

緒論

近世社會史とその意義

從來の歴史區分

歴史の時代的區分及び區分せられた各時期の名稱については、從來歴史家によつて多種多様であり、議論紛々として一定したものがあるわけではない。多くは從來の歴史家が、研究上の單なる便宜のため、乃至は記憶に容易なるがために、假定しただけであつて、必然的に之を區分すべき何らの科學的根據とか理由と云つたものが存在してゐたのではなかつた。然し「繼續的に發生せる史的事實の中に、時々一世を聳動し、若しくは一新時期を劃すべき大事件を認むるを常とす。而して史家は多くは斯る大事件を以て、時代の前後を區別する」(瀨川秀雄氏「西洋全史」古代史、一五頁)。斯る見地よりして、從來一般に古代史、中古史、近古史、近世史、最近世史(現世史)といふが如く區分し、その時期をば、西洋史に之を例に採れば、(一)古代史は、Xより紀元三七五年まで即ち太古よりゲルマンの移住に至るまでとし、或は、太古より西ローマ帝國の滅亡に至るまで、

即ちXより紀元四七六年までとする。(二)中古史は(イ)紀元三七五年より一五一年、即ちゲルマンの移住より宗教改革に至るまでとする學者があり、(ロ)紀元三七五年より一四九二年、即ちゲルマンの移住よりアメリカ發見に至るまでとする學者、(ハ)紀元四七六年より一四五三年、即ち西ローマ帝國の滅亡より東ローマ帝國の滅亡に至るまでとする學者等、を見る。(三)近古史は(イ)紀元一五一七年宗教改革より一七八九年フランス革命に至るもの、(ロ)紀元一四九二年アメリカ發見より、一七八九年フランス革命に至るもの、(ハ)紀元一四五三年東ローマ帝國の滅亡より一七八九年フランス革命に至るものに分れ、(四)近世史は紀元一七八九年フランス革命より一八七八年のベルリン公會に至るまでとし、(五)最近世史は紀元一八七八年ベルリン公會より現時に及ぶとする等、これらは、單にその一例を挙げたものである。

従つて斯る史學研究の立場よりすれば、史學の分科により、例へば政治史學者により、法制史學者により、經濟史學者により、社會史學者により或は文藝史學者により、夫々その歴史的事象の價值判斷を異にし、それに基づく歴史的時期の區分は主觀的であり、甚だ

しく異なるであらう。茲に與へられた近世社會史にしても研究者によつて夫々その歴史的限界を異にすることは言ふまでもあるまい。殊に近世史の領域においては、フランス革命があり、ナポレオン一世の時代があり、保守自由兩主義の衝突時代があり、自由統一主義の成立時代があり、一世を聳し、或は一新時期を劃する歴史的な大事件は甚だ多く、その研究範圍、乃至歴史的限界に關して徒らに混迷するの外はない。かかる歴史研究の方法は、單に西洋史に限らざるものであることは、これまで東西の多くの教科書的歴史を繙くことによつて既に明かになることであらう。

歴史の意義 歴史は不斷の發展過程であり、その現實に於ては、この發展過程の永劫の過去よりの到着線であると共に、その中に未來への發展の契機を内在せしめる。永劫の過去を負うた現在の一線は、すでに成つたものであると共に無限の將來に向つて成りつつあるもの Werdlen としつ構成せられてゐるところの一つの矛盾としての現實的存在である。

歴史學の意義 歴史學はこの發展の過程を研究するものであり、これをば科學的に把握せんとするものである。従つて發展過程を把握することは、この内在的矛盾を洞察するこ

とであり、それは回顧であると同時に展望であり、観想的であると共に実践的であること、別言すれば兩者の辯證法的統一においてのみ可能である。「歴史的現實は實踐的意志と離れて存在するものでなく、常に後者に相關的なるものである。歴史は自然の如く人間の意志を離れ永久に繰返される關係に由つて成立する存在でなく、人間の實踐を通して實現せられんことを求める、未來への方向を含む所の現實である。歴史が單に有るものでなく、有ると共に作られつつあるものである、といはれる所以である。私的な主觀性から脱却して公的な主體性を實現せんとする實踐的意志と否定的に媒介統一せられた認識主觀に對してのみ、歴史的現實は成立する。其の限り歴史的に關する科學的認識は、未來への實踐的意志と相關的關係に立つのであつて、後者と全然無關係に無記で留まることは出來ない」(田邊元氏「科學政策の矛盾」昭和十一年十月改造、二八頁)。すなはち矛盾を内在せるものとしての現在の辯證法的構造そのものが、理論と實踐との辯證法的統一の基礎における把握を必要とするものである。「資本論」における立場は正にこれであつた。ここに歴史研究の手懸りを發見するのであり、近世社會史の意義も亦自らここに解明せられるのである。

「經濟學批判」の有名なる序文、それは既に現代において殆んど一般的知識となりつつあるところのものであるが、茲に引用する。

「人々は、その生活の社會的生產において、特定の、必然的な、彼等の意思に依存せざる諸關係を結び、この生產關係は、彼等の物質的生產力の特定の發展段階に應當するものである。これらの生產關係の總體は、社會の經濟的構造を形づくり、これが實在的の基礎であつて、その基礎の上に法律的及び政治的の上部構造が立ち、その基礎に相應して特定の社會意識諸形態がある。物質生活の生產方法は、社會的、政治的および精神的の生活過程一般を制約する。人々の意識が彼等の存在を決定するのではなく、寧ろ反對に、彼等の社會的存在が彼等の意識を決定するのである。彼等の發達の或る段階に至ると、社會の物質的生產力は、今まで彼等がその内部で動いて來た所のその現在の生產諸關係、若しくはその法律的表現に過ぎない所の所有諸關係と、矛盾撞着することになる。これらの關係は、生産の發展形態であつたのが今やその桎梏と變ずる。ここに社會革命の時代が始まる。

經濟的基礎の變化と共に、老大な上部構造全體が徐々にか急激にか變革される。かかる變革の考察においては、物質的な、自然科學的に忠實に確認すべきところの、經濟的生產諸條件における變革と、人々が此衝突を意識するに到つてそれを戦ひ決せんとするその法律的、政治的、宗教的、藝術的乃至哲學的の、一口に言へば觀念上の諸形態とは、常に之を區別しなければならぬ。或個人を判斷するのに、其の個人自身の考へてゐる所に基づいてはしないのと同じやうに、かやうな變革の時代を、時代の意識から判斷することは出来ない。却つて此の意識を、物質的生活の諸矛盾から、社會的生產諸力と生產諸關係との現存の衝突から、説明しなければならぬ。一つの社會構成は、そこに發展する餘地あるすべての生產諸力が發展してゐない内に破滅することは決してなく、また新しい一層高級な生產關係は、それらにとつての物質的生存條件が舊社會それ自體の胎内に孕まれないうちに出現することは決してない。さればこそ人類はいつも自分で解決し得る問題のみを提起する。蓋し、少しく正確に考へるなら、そもそも當の問題そのものが、その解決にとつての物質的諸條件が既に存在するか乃至は少くとも生成の過程にある時にのみ發生することを、常

にさとるであらうから。大づかみには、アジア的、古代的、封建的、及び近代ブルジョアの生産方法が、經濟的社會構成の前進的諸紀元として區別される。ブルジョアの生産諸關係は、社會的生產過程の最後の敵對的形態であり、敵對的とは個人的敵對の意味ではなくて諸個人の社會的生活諸條件から生じ來る敵對の意味である。だが、ブルジョア社會の胎内に發展しつつある生産諸力は、同時に、此の敵對の解決のための物質的諸條件をつくり出す。従つて、此の社會構成と共に人間社會の前史が終りを告げる」(邦譯全集、第七卷、四一五頁—四一六頁)。

近世社會史とその意義 茲に經濟的社會構成の諸紀元として掲げられたアジア的、古代的、封建的及び近代ブルジョアの四時期は、その生産方法の歴史的特質を有する點において、最も根本的なる社會發展の特殊的時期として、一般に歴史區分に關する科學的基礎となり得るものである。而して私は、近世社會史をば、中世封建社會の崩壞より近代資本主義的生產方法の發生發展への變革的過程をその研究對象とする。故にこの經濟的發展を基礎とする社會史的諸相は、國別によつて年代は必ずしも一律に律すことは不可能である。

茲に對象としたイギリス、フランス、ドイツ、ロシア、アメリカ合衆國に關しても、經濟的發展の遲速があり、從來の歴史家の如く年代を以つて劃然と近世社會史の限界を決定して叙述を進めることは出来ない。否寧ろここにこそ私の近世社會史の特殊の意味が在ると言はねばならない。本書においては主として各國における封建社會の胎内における成熟せる矛盾の解剖と把握よりして、そこに發展しつつある資本主義生産方法の萌芽と、その發展の方向を背景とせる社會・政治の諸相を指示するに止める。そこに惹起せられた諸現象は、初期における資本主義社會と結びつくもので、略十八世紀及び十九世紀前半をその樞軸とする。而してその必然的結果としての資本主義より金融資本主義時代における社會史は、この小冊子に包容し得ない。最近における資本主義の展開、金融資本主義を土臺とする社會史は、謂ゆる最近世史乃至現世史として別の機會に繼續する意圖を有するものである。茲に取扱うた近世社會史の領域は、云ふまでもなく人類の歴史における最も深刻にして、最も注目し値する變革過程であり、發展し來つた生産諸力と生産諸關係の現存的衝突より惹起せられた矛盾と撞着は、現象としての社會的混亂を來し、一面あらゆる犯罪、墮落、

貧困、飢餓、苦惱の限りをつくし、血腥き鬭争と陰慘極まる阿鼻叫喚の埒場たるの觀を呈した時代である。同時にそれは新しき生産關係の下に置かれたる社會が自らの新生命を得たる時代であり、近代的勞働者・農民とブルジョアジーとが最も勇敢なる無慈悲的な鬭争によつて歴史的使命を遂行した時代であり、歴史上稀に見る人類の苦惱と緊張を経験した時期として永久に記憶せらるべき時代である。しかもかかる社會的矛盾と動搖の現象は、それが單なる過去の事實として認識せらるべきではなくこの矛盾と動搖の積極的意味を理解するところにその意義が存在する。近世社會史に關する科學的認識の重要性は、特にこの歴史的意義を痛感するところにある。

第一章 イギリス

第一節 産業革命前のイギリスの状態

農村の状態 産業革命は一般に一七六〇年を以つて開始せられ一八三〇年に至る六十年間に完成されたと曰はれてゐる。従つて十八世紀の始めから中葉に至るまでのイギリスの農・商・工の大體の状態を考察することは産業革命の社會的意義を把握する前提として是非とも必要のことである。

十八世紀中葉までのイギリスの人口は約八百五十萬人、人口の大部分は農業に従事してゐた。しかも地味の豊かな東南部に比較的人口は稠密であつた。農業は未だ頗る原始的であり工業的性質を帯びて居らず、生産物の大部分は農夫自身に依つて消費されてゐた。交通機關の發達も幼稚な程度であり、往來に不便のため各村落は殆んど孤立状態であつた。

「土地は領主 lord 地主 squire 及び自由農民 freeholder の所有に屬してゐた。より富裕な農民は yeoman と云はれた。その他に終身若しくは永代借地人 copy holder が土地を占有してゐた——これは舊農奴の子孫である。この借地人に對して地主の利益になる様ないろいろな義務が負はされてゐた。最後に土地所有者中の最も從屬的な層はコテージ cotsager 若しくは日雇百姓で、彼らは自分の小屋 cottage の周圍にほんの少しばかりの地面を持ち、地主のところへ行つて働かねばならなかつた。尙ほ寺院や王族なども大きな土地を持つてゐた」(「世界史教程」早川氏譯、第四分冊一〇頁)。農業の形態は三圃制 three field system (耕地を三分し、毎年一耕地が休閑地として残され、他の二耕地に小麥と大麥が作られる) が主として行はれた。地主と農民とが一定の農村共同體に包容されてゐて、地主の土地は細分されて農民の土地の間に介在してゐた。かうした錯雜した土地所有の形態によりて、その經營者は一樣な方法で土地を耕作する必要があり、また農業上の仕事の配分をも一定にせねばならなかつた。收穫が終ると各人の所有地の間の境界が撤去されて、そこに放牧が行はれ、この開放された田野は、すべての所有者が使用し、草地

や森林と共に共同體の菜地とされた。農具なども、イギリス各地で使用されてゐた犁は、ローマ時代の犁と大差のない原始的なものであつた。

しかし都市における經濟の發達は次第に地方にも浸潤し、農具の改良も漸次行はれて行つた。小麥は從來連枷で穀を落してゐたが、十八世紀中葉に至つて、こいて落す様になつたし、播種には條播機を使用し、手鎌、木製の犁、荷車等の農業上の器具も利用されるやうになつた。

同業組合 商業や工業は都市に集中してゐたが、都市と云つても十七世紀の終り頃にはリヴァプール、バーミンガム、シェフィールドは各々人口四千、マンチェスターが六千に過ぎなかつた。當時は未だ強大な勢力を持つた同業組合に組織された手工業があつて、政府と同業組合とは規約を設けて凡ての生産段階や製品の數や材料の色彩や寸法等や、更に手工場における労働者數、親方 master、職人 journey man 及び徒弟 apprentice の關係を規定し、交換を統制し、商品の積出標準やその數量を決定し、同業組合は利益を獨占し、それは同時に政府との利益の分擔を意味してゐた。貨幣經濟の發達に伴つて同業組合が生産

や交換を統制しきれない様な状態が起つてきた。それは農村を中心に同業組合の壓迫外に發生してきた家内工業であり、副業的な賃銀を得る土地を持たぬ農民と必然的に結合したものであつた。農民の大部分は毛絲を紡ぐことや毛織物をつくることに従事したのであるが、この羊毛工業は餘程古くからイギリスに行はれたもので、一二二四年の法律には、すでに羊毛のことが記載されてゐると言はれてゐる。十八世紀中葉にはノリッチ、サザンプトン地方、西部イングランド、ヨークシャーで行はれた。地方に散在した當時の手工業者は、農業を行ふと共に他方で手工業を行つてゐた。

家内工業と商人資本 初期の中は、家内工業者は自分の原料を以て、自分の器具を使用し、自分の仕事場で生産し、生産したものを自ら市場に持つて行つて賣却したのであるが、時の経つに従つて、時間の餘裕がないためと自分の生産品の販路を組織する力の不足のため、家内工業者は問屋の下で働らく様になつた。ある程度に資本を持つてゐる問屋は次第に多くの生産品を買ひ集めることが容易くなり、それをば多少とも遠隔の市場に持つて行つて高い利潤で轉賣し、彼れらは商人として資本を蓄積することが出来た。これら商人

は家内工業者の仲買人として巨富を得、家内工業者の困難な状態を利用して、自らの資本を以て材料を買ひ、これを地方に散在する手工業を兼業する農夫に提供し、紡がせたり織らせたりし、それに對して一定の手數料を支拂ふことになつた。そしてこれらの生産品を集めて市場で賣却して巨利を得ることができた。次第にこれら仲買人である商人は企業家になつて行つた。そして勝手に報酬の額を定め、自分に從屬する家内工業者に仕事上利益な専門化を與へつつ生産を組織して行き、搾取を増大して大資本をかき集めた。かくして地方に散在する手工業者を經濟的に支配することの出来た商人は、次いでこれら地方の職人を一つの仕事場に集めて、そこで統一的に組織的に作用せしめることを企てたが、これがマニユファクチュア（工場手工業）なる産業形態である。

第二節 農業革命

農民の追放 イギリスの農奴制は十四世紀末に事實上消滅し、十五世紀におけるイギリスの人口の大多数は自由なる自營農民から成つてゐた。十七世紀最終の三分の一期に於い

でも、尙ほイギリスに於ける人口の五分の四は農民であつた。そして「農業上の賃銀労働者は一方には大なる領主の下に労働して閑時間を利用する所の自営農民と、他方には獨立した位置にある所の、相對的にも絶對的にも數少なき嚴密な意味の賃銀労働者の階級とから成つてゐた。この賃銀労働者も事實に於いて、自営農民を兼ねてゐた。彼等は賃銀以外に、小屋と四エーカー又はより以上の農耕地とを分與されたからである。加ふるに彼等は、嚴密の意味の自營農民と同じく共同地の用益を許されてゐた。彼等は其處で家畜に牧草を與へると同時に、また燃料たる薪や泥炭をも得てゐたのである」(「資本論」改造社版、七一頁)。ここでマルクスが言つてゐるやうに、資本主義生産方法の基礎をつくり出した革命の序曲は、十五世紀最終の三分の一期及び十六世紀初葉の十數年間に演ぜられた。それは封建的家臣團が分解され、多數のプロレタリアが労働市場に投げ出された事情を意味する。封建領主は多數の自營農民をば彼等の土地から暴力的に驅逐し、彼等の共同地を横奪することに依つて、耕地を羊牧場化したのであつた。「イギリスに於いてこれが直接の刺戟となつたものは、主としてフランダー羊毛マニユファクチュアが隆昌に赴き、それに伴つて

羊毛の價格が昂騰したといふ事實なのである」(同、七一三頁)。ベーコンはヘンリー七世史の中で「當時(一四八九年)共同地の私有化はますます頻繁に行はれ始めた。これがため、多數の人民及びその家族がなければ施肥することの出来なかつた耕地も、僅々二三の牧夫に依つて容易に監視の出来る所の牧場と化し、そしてヨーロッパ階級の多くの人々の生活の基礎となつてゐた有期小作地や終身小作地や任意小作地は領主の所有地に轉化されることになつた。その結果、人民を頽廢せしめ、延いて都市や教會や十分の一税など、いづれも頽廢の運命を免れ得なくなつたのである」と。また「多くの小作地や畜群(殊に羊)は至つて少數の人々の手に蓄積され、これがため地代は著しく昂騰して、教會や家屋は取り壊され、驚くべき多數の人々は彼等自身及び一家の生計を維持すべき手段を奪はれるに至つた」と言つてゐる。かうしたことから一五三三年の法令では、地主一人で二萬四千頭の羊を有するもののあることを嘆じ、羊の數は地主一人で二千頭を超ゆべからすと規定したほどである。

羊が人を喰ふ

大地主が農民を土地から掃蕩し、牧畜經營への移行を始めた謂ゆる農村

壊滅の初期時代のイギリスの作家、即ち十六世紀のトーマス・モリアはその著「ユートピア」の中で如何に「羊が農民をその長く住んでゐた土地から追ひ拂つてしまつたか」を記してゐる。モリアはそれを次のやうに書いてゐる。「羊が大變大食ひになり、人に逆ふ様になつて、人々を食物にし、田畑や家や町から人間の姿を失くし、それを空っぽにしてしまつた。そして王公貴族が地上から家や村全體を追ひ拂つてしまつて、残つてゐるのは、ただお寺だけになつた。だがこのお寺のなかにも羊小屋ができてゐる」と皮肉たつぷりの叙述である。モリアが書いたこの「羊が人間を食ひ盡す」所の奇怪な國とはイギリスのことであることは言ふまでもない。（「ユートピア」一八六九年、四一頁）。

人民の限りなき怨嗟も、またヘンリー七世以來百五十年間に亘つて持續した小規模の小作農業者や自營農民に對する收奪を禁じた立法も、何ら顧られる所がなかつた。この農民追放はエンクロジユア（塙で圍ひ込むの意、土地の私有化）と呼ばれ、地主にとつて、當時その所有とされてゐる土地から、そこに住んでゐる前述のコッピールグーやコテジヤーを追ひ拂ふことは容易いことであつた。しかしフリーホールグーや農民（所有者）につ

いては事情は複雑であつたが、地主の利害を代表する議會が地主を援助することによつて、別言すれば法律によつて議會の決定があれば土地改革をすることが可能であつた。（塙圍法 enclosure act）そのためには改革さるべき土地の地主の四分の一の署名を持つ法律案が議會に提出されればいのであつたから、塙圍を行ふ多くの法律が議會を通過した。一七〇〇年から一七六〇年までに八十一萬二千エーカー以上の廣さの各教區の全體的或は部分的の塙圍をやる二百八の法律が議會を通過し、一七六〇年から一八〇一年までには二千の法律が發布され、一八〇一年から一八三一年までその効力によつて三百五十一萬一千七百七十七エーカー以上の土地が圍ひ込まれてしまつた。「十八世紀の進歩とは、要するに法律それ自身が共同地盜掠の機關となつたといふ事實に存してゐる」（「資本論」同上、七一八頁）と云はれてゐるやうに共同地（國有地とは異つてゐる）も暴力的横奪と云ふ形で耕地の牧場化となつた。この横奪の議會的形態が「共同地私有化法案」と稱するものであつた。

かうした土地圍ひ込み（私有化）の全結果について觀るならば、「下級民の位置は凡ゆる

る點を通じて悪化した、彼等は小地主及び小作農民たる位置から日傭労働者又は雇人の位置に引き下げられてしまひ、而して斯る状態の下に、彼等の生活は従前に比して更らに困難となつたのである」(同上、七二一頁)。議會を通じて地主は僅か三十年間に三百五十一萬一千七百七十エーカーの共同地を手にしたが農民はこれが代償として總一文でも與へられず、そののみか農民に對する最終の大掛りな土地收奪たる所有地解放によつて既述の如く羊の食ふべき一人の獨立農民も存在しなくなつてしまつた。十九世紀初頭に行はれたスザーランド女公のなした「解放」によつて十分にその状態を窺ふことが出来よう。即ち女公は位に即くや直ちに、既に一萬五千に縮小してゐた全州をば、羊牧場に轉化せしめようと決心した。一八一四年から一八二〇年に至る間、この一萬五千の人口(約三千家族)は、組織的に驅逐し剿絶された。彼等の村は破壊され焼き拂はれ、彼等の田畑は悉く牧場に轉化された。イギリスの兵士はこれが執行を命ぜられ、住民と戦を交へるに至つた。或る老女の如きは小屋を去ることを拒み火焰に包まれて焼死した。斯くしてこの高貴なるスザーランド女公は、何時とも知れぬ時代から氏族の所有に屬してゐた七十九萬四千エーカーの

土地を占有してしまつたのである。驅逐した住民のため、女王は約六千エーカーの土地(一家族二エーカー)を當てがつた。この土地は當時に至るまで荒蕪のままに放置されてゐたもので、所有者に何等の所得をも齎らさなかつたものである。この海濱に驅逐された住民は、漁獵に依つて生活しようとした。彼らは兩棲動物となり、半分は陸地、半分は水中に生活したが、而も雙方を合して半分しか生活しなかつたと言はれてゐる。

墻圍法と産業豫備軍の發生　かくて土地はそれを耕作する人々の數が減少したにも拘らず今や前と同じか或はそれ以上の生産物をもたらした。といふのは、餘地が増大し、市場に莫大な農業生産物を出す全くの資本主義的企業になつたからである。一方では農業賃銀労働者は強度のより激しい労働をしなければならず、他方では彼等が自分のために働く生産領域が益々縮小したから、彼らは以前の生活手段を失つたことになり、これらの生活手段は今や可變資本の物質的要素となつた。天地の間に介在してゐた農民はそれらの生活手段の價値を自分の新しい主人——産業資本家から賃銀の形態で購買しなければならなくなつた。かくてイギリスの地主はブルジョアの土地所有者になり、剩餘生産物や剩餘價値をつ

くり出す階級の抵抗を經濟外強制の方法で壓迫し、農業生産者を執拗に土地から掃蕩し、賃銀労働者の豫備軍を増加した。

「寺領の奪取や、國有地の詐欺的割譲や、共同地の盜掠や、封建的並びに民族的所有を横奪し、顧慮する所なき威嚇主義を以つてこれを近世的の私有に轉化せしめたといふ事實や、此等の事實は夫々に、本來的蓄積の牧歌的方法なのであつた。これに依つて、資本制農業は活動の部面を興へられ、土地は資本に併合せしめられ、都市的産業のためには、放れたプロレタリアの必要な供給が造り出されることになつたのである」〔「資本論」改造社版、第一卷七二九頁〕。

かうした農業革命の結果、尨大な土地が大地主の所有に移り、またこれらの土地が、合理的な經營組織に適する大資本を擁する資本家に貸與された。これら大資本の所有者の多くは投機や外國貿易や殖民地の掠奪で資本を蓄積した商人達であり、同時に新耕作の擔當者であり、農業聚約化の主張者であり、畜舎内の畜産業の經營者であり、謂ゆる品種の佳良で名聲を高めたイギリス家畜業の先驅者たる者であつた。それはまた財産と生産手段を

失つたプロレタリア化した農民は、大部分都市に出掛けて發達した工業に安價な労働力を豊富に供給し、資本の尨大蓄積と原料の貯藏と廣大な販賣市場および國內の好都合な自然的條件と相待つて、イギリス産業界における劃期的な大變化、謂ゆる産業革命のための基礎的前提をつくり出したのであつた。

第三節 技術の革命過程

紡績機械の發明の世界史的意義 エンゲルスは、「イギリスにおける労働者階級の狀態」(一八四五年)の卷頭に次の如く述べてゐる。「イギリスに於ける労働者階級の歴史は、前世紀の後半即ち蒸汽機關及び紡績機械の發明と共に始まる。此等の發明は、周知の如く、産業革命、即ち同時に全ブルジョア社會を變革し、而して其世界史的意義が今日に至つて、初めて認識せられ始めてゐるところの革命、に動因を興へたのであつた。イギリスは此變革——靜かに行はれた丈けそれだけ愈々偉大であつたところの——古典地なのである」。

〔「マル・エン全集」改造社版、第三卷、三五頁〕。この變革の典型的な地であるとされるイギリ

スの産業革命について、その直接の原因である機械の發明過程についてその跡を辿つてみよう。

イギリスに於ける機械の發明は、そのはじめ、纖維工業の範圍内に起つた。十八世紀初頭においては、ヨーロッパ一般の織物と云へば毛織物であつたが、イギリスにおいては、牧羊が國民的産業であり、従つて毛織物は主要輸出品として輸出價格の三分の二を占めてゐたほどである。しかるに當時羊毛の外、絹、麻、木綿の織物も行はれ出し、殊に綿織物はイギリスのみならず忽ち全ヨーロッパに廣く普及した。その原料はインド又はアメリカから輸入し、その工業はランカシャー地方に行はれた。木綿マニユファクチュアの急激の發生、更紗木綿の激しい普及は、舊來の絨毛工業を驅逐し、羅紗製造人の騒動を惹き起した。毛織物職人は街で更紗木綿の運搬を妨害し或はそれを焼き拂ひ、更紗木綿を着てゐる人々は水を浴びせられた。しかし綿織物は素晴らしく安いので大衆の間に用ひられどしどし市場を占領した。手工業生産では市場の老大な要求を満足させるに足りなかつた。

當時の木綿紡績は頗る簡單で、例へば棉花から棉實を取り捨て、纖維を針金刷毛で眞直

ぐに延ばし、絲車で紡ぎ、機も木製の手機で梭を使用するといふ有様で、甚だしい時間と勞力を費しても僅かな効果しか納めることは出来なかつた。かうした簡單な道具を使用してゐる頃は、その原料の紡織、加工すべて都會附近の田舎の家屋内で行はれた。妻及び娘達は撚絲を紡ぎ、夫がそれを織つた、或は家夫が自らそれを加工しない場合には彼等はそれを賣却し、相當によく暮しを立てることができた。蓋し「當時は尙國內市場が財貨の需要に對して決定的地位にあり、殆んど唯一の市場であつた、そして外國市場の獲得、及び貿易の發展と共にものと後に侵入してくる優勢なる競争力が尙ほ未だ著るしく勞働賃銀を壓迫しなかつたからである」(「マル・エン全集」第三卷、三五頁)。それ故、「當時の勞働者は頗る愉快に生長し、極めて信心深く且つ正直に方正且つ平靜な生涯を送つた、彼等の物質的地位はその後繼者のそれよりも遙かに良好であつた、彼等はその園圃や田野に於て健康に役立つ勞働をする餘暇を持つて居つた、此の勞働は彼等にとつてはそれ自身保養になつたが、其外に尙彼等はその隣人の保養や遊戯に参加することが出来た、而して此等凡ての遊戯、即ちクリケット、フットボール等は彼等の健康を保持し、體軀を剛健にする上に

與つて力があつた。彼等は大抵強壯な、體格の良い人々であつて、その體格に於ては、近隣の農夫に比して殆んど、否全く相違を見出すことが出来なかつた。彼等の子供達は自由な田舎の空氣の中で生長した、そしてその両親の労働を手傳ふことが出来たにしても、それは只時々しか行はれなかつた、そして一日八時間乃至十二時間労働など言ふ事は全然存在しなかつた」(三六頁)。

ワイアットとケイの發明　しかし機械の發明によつてかかる牧歌的な從來の労働者の生活状態も市場の關係も一變してしまつた。マルクスは「大機械工業が始めて資本主義的農業に對して鞏固な地盤をあたへた。そして農業人口の大多數を徹底的に收奪し、農業的家内工業、紡績と機械の根を斷つて、農業と農業的家内工業の分化を完成させた。従つてこの大機械工業が始めて工業資本のために全國內市場を獲得したのである」と云つてゐる。かく生産過程を促進し、イギリス労働者の從來の状態に急激な變化を與へた發明はジョン・ワイアットのローラー紡績機(卷軸紡績機)で、マルクスはワイアットが一七三五年に提供した紡績機を以つて十八世紀産業革命の端が開かれたと云つてゐるほどである(「資本論」

改造社版、第一卷、三五二頁)。これによつて兒童も婦人も絲を紡ぐことを容易に爲し得たため、紡ぐ能力は、その紡いだ絲を織る能力より數等すぐれる有様となつた。そこで織工程をより急速ならしむる機械に對する需要が高まり、一七三八年に時計職人ジョン・ケイの飛梭が發明されるに至つた。飛梭の織物業への應用はその製造を二倍にした。この新方法の實施は紡績方面に對して大きな需要を捲き起し、今度は織物マニユファクチュアにとつて原料の不足を激しく感じさせる様になつた。一七六四年に至つてブラックバインの織物職工ハーグリーブスがジェニー紡績機(多軸紡績機)を發明して七十年に特許を得た。これは普通の手紡車と異り一つの紡錘に代ふるに紡錘を十六乃至十八を有し、それが僅か一人の労働者に依つて全部動かされた。これにより從來に比して約二百倍といふ著しく多量の撚絲を生産する事が出来た。以前一人の織業が三人の紡績女工を使ふ時分には絲の方が不足したものであつた。そのため織工は絲の出来上るのを待つて居らねばならなかつたが、それからは就業してゐる労働者によつて織られる以上の絲が出来、新機械の應用で生産費は低減され、製品の價格が低廉になつたため、織物の需要は一層盛になつた。従つて多數の

織業が必要となり、織賃は騰貴した。織工は織機仕事の方が儲高が多いために漸次農業を廢めた。そして農業を副業に營んで居る織工階級は全く消滅し去り、單純なる織工の新興階級に變じ、單に勞働賃銀に依つてのみ生活し、何等の財産も有せぬプロレタリアに變つた。一家全體はジェニー紡績機で生活し、時代遅れの手紡車を放棄した。この機械は瞬く間にイギリスにおいて二萬臺も用ひらるるに至つたといふ。ジェニーを購入する資力のない場合は一家全體が父の織賃に依つてのみ生活せざるを得なかつた。かくて後の工業上に無限の發達を見せた分業は先づ紡績と機業とに始まつたのであつた。エンゲルスは「イギリスの勞働者の從來の状態に徹底的な變化を齎らした最初の發明は一七六四年ノース・ランカシアのブラックバーン附近のスタンドヒルの一織匠ゼームス・ハーグリーブスの多軸紡機であつた」(前掲、三七頁)とさへ云つてゐる。

アークライトの發明と工場制度の出現 ジェニー紡績機の改良は絶えず行はれ、以前の機械は時代遅れとして廢棄されるか變更されざるを得なかつた。一七六八年に至りノース・ランカシャーのプレストンの一理髮師リチャード・アークライトが水車紡績機を

發明した。これは水力を以て運轉するもので、四對のローラーが水車からの調帶ベルトで廻轉する大規模のものであつた。従つて個人の住宅では備へられず、別に工場を設けて機械を据ゑ付け、數百人の勞働者を働かして一時に多量の綿絲を造り出すことが出來た。工場制度はアークライトの機械に始まると云つてよい。個々の資本家はこの高價な機械を買入れ、そのための特別な大きな建物を設けて多量の綿絲を低廉に生産して販賣し出した。彼自らも工場をクロムフォードに建設し、梳綿、連條、ロービング等の新機械を發明し、特許を得て益々紡績機の改良に努めた。一七七九年紡績業者サムエル・クロムプトンはハーグリーブスの機械とアークライトの機械とを折衷改造し走錘紡績機「ミュール・ジェニー」(混合機)をつくつた。この機械は非常に紡績速度が早く且つ太絲用にも細絲用にも役立つた。今や織物の方が追ひつかなくなつた。十九世紀の初頭にはイギリスにおいてその使用は五萬錘に上り、木綿紡績の仕事は農家より工場へ移り、工場は水流に沿うて相繼いで設けられた。

一七八五年にランカシャーの牧師エドモンド・カートライトが力織機——蒸汽力に依つ

て運轉する織布機械を發明し、同時に織布業も亦農村より工場に移つてしまつた。この新機械は斷たれた絲を結ぶために少女に番をさせて置きさへすれば、四人の手織職工に相當する仕事を爲し得た。彼は工業上の功績によつて一八〇九年イギリス議會より一萬磅の賞與金を與へられた。アークライトも一七八六年その功勞のためナイトの稱號をうけた。一七九二年にはアメリカのイリー・ホイットネーは綿繰機械を發明したが、これは棉花より綿實を抜き取るのに優に五十人の黒奴以上の能率を上げ得たので、發達した紡績機、織機の需要に應ずるだけの棉原料を供給しうる様になつた。その他一八一三年にはホロックスの整理機、一八三〇年にはスロツスル機、一八三二年にはロバートの自動ミュール機、一八四一年にはバローの改良力織機、リング紡績機等が次々に發明されたため、紡績業界、織物業界は全く一變してしまつた。

技術史上におけるヘロンとワットの蒸氣機關の意義 次に最も重要なものは蒸氣機關の發明であるが、蒸氣の力を利用するといふ考へは古るくから行はれてゐたもので、ギリシヤ人で西曆二世紀前に蒸氣の動力を利用した器具エオリピルを發明したアレキサンドリ

イ・ヘロンといふ天才的才能を有つた人物が居つた。しかしヘロンの技術史における役割はジェームス・ワットの役割と比較して眞にとるに足らぬものである。自然科学の未發達なギリシヤ時代を想ひ合はせてヘロンの偉大な才能に驚異するとしても、レーニンの批評するが如くエオリピルは結局面白い玩具たるにとどまつたが、ワットの發明は社會にとつて必要であつたのである。蒸氣機關が始めて實用的に使用されたのは一六九八年で、トーマス・サーヴァリーは鑛坑の水を吸上げるポンプに蒸氣機關を裝置したと言はれてゐる。しかしジェームス・ワットが彼の蒸氣機關を炭坑用ポンプに應用したとき、はじめてそれが社會的に實際に役立つたのであつた。彼はグラスゴー大學の物理機械職工として、當時特許を得たトマス・ニューコーメンの蒸氣機關の標本の修繕を依頼された時、その不完全な點を改良して一七八六年に新らしく特許を得たのである。彼の機關はニューコーメンに比較して四分の三の石炭が節約されるもので、それはやがてアークライトの機械に應用され、更らに鐵工場にも應用せらるるに至つた。かくてノッティンガムシヤ、マンチェスター、グラスゴー等の各種の工場に順次に設置され、企業家は商業の中心地に蒸氣の動力を利用

する様になり、かくて生産品の運搬に利便なる都市が工業の中心地となつた。ライメスによれば、「ワットが機械の動力として蒸汽力を使用することを知つたときに、始めて本格的に近代資本主義の時代が始まつた。ワットによつて、経済的發展に於ける他のもの發明より、より速かなる變革が呼び起こされた。それと共に現代が始まり、巨大なる富が作られ、各大陸が相互に結びついた」のである。「水力のかわりに蒸汽の力を用ひることによつて初めて工場は蒸汽の生産に必要な水と石炭さへあれば、至るところの都市やその他の場所に集中されることが出来るやうになつたのである。蒸汽機關は工業の母である。」（『世界史教程』第四分冊、二九頁）。ワットは、この外、一七八三年には一分間に三百回も打つ七百五十斤の蒸汽槌を造り、爲めに鍛鐵の能率が上つたが、十九世紀後半にはヘンリー・ベセマーの製鋼の技術の大發明となり、蒸汽機關は汽車、汽船、印刷機等に應用され、短時日の間に世界の産業に深刻な影響を及ぼすやうになつた。

一八〇八年にはリチャード・トレビシックはロンドンに鐵道を建設し一時間に十五哩乃至二十哩の速力で世界最初の汽車を走らせた。ジョージ・ステイブンスンは更らに改良を

加へて一八二五年に、一時間十二哩乃至十五哩の速力で九十噸を積載する汽關車を作り、これに應じてリバプール、マンチェスター間には鐵道が開通し次第に延長された。一八二五年にストックトン、ダーリントン二地の間に敷設された旅客用の鐵道は、世界最初の旅客車であつた。これは馬車鐵道であつたが、一八三〇年には蒸汽力によつて運轉された。一七八八年にはヨークシャに最初の鐵橋がトマス・ペインによつて架せられた。それは一七八〇年以來コークスによる溶鑛法の發明の結果であつた。一七九〇年にはハッツマンが鋼鐵鑄法を發明した。鐵に對する需要は、機械の鐵製支柱の需要や、ガス燈の發明や、鐵道の發明などのために、以前の何十倍も増大した。ワットの發明による蒸汽槌と共に機械の製造は急速に發展し、鐵の加工機械はより形を大きくし、より強力なものになり、改良は急速なテムポで行はれて行つた。一八二八年にはグラスゴウのジェームス・ネイルソンは冷風爐鑛法の代りに熱風法を發明し、石炭の經濟をもたらしした。かかる幾多の發明と改良による製鐵法の發達は、鐵の生産をますます増大せしめ、一七四〇年から一八三九年までに、ホブソンによれば、溶鑛爐數五九より三七八、總生産量一七、三五〇トンより一、

三四七、七九〇トンに増大したのである（『近代資本主義發達史論』弘文堂版、八七頁）。

蒸汽機關が印刷機に應用さるるに及んで、從來手動印刷機によつて一日二千枚刷るところを、蒸汽印刷機によると僅かに二時間で爲し得た故、書籍、新聞は非常な影響を蒙つた。このほか、靴下編機によつて靴下製造業が刺戟せられ、レース製造業もレース機械の發明された一七七七年以來、重大なる種類の工業となつた。殊にリンドレーはポイント・ネット機械を發明し、一八〇九年にヒースコートはポツピンネット機械を發明したので、レース製造は著しく簡單化された。また漂白業は化學的漂白法において、捺染業は巧妙なる機械の發明によつて一層發展した。かくの如く技術の改良、諸動力の發明による産業界は全く一變し、工場工業制度の發生、資本主義の展開、プロレタリアの出現と階級對立の深刻化といふ新しき社會状態を生むに至つたのである。

第四節 産業革命後のイギリス

工場制度の確立 産業革命は、前段階たる中世封建制度の諸關係を打破し、新しい社會

段階たる資本主義的社會を成立せしめ、イギリスの全生活に深い影響をあたへたのである。即ちそれは紡績、織物、製鐵製鋼等の部面における機械と動力の發明による生産手段の變革であり、かうした生産手段の變革は、必然的に生産方法および生産關係の變革をもたらしたわけである。そこでは十五世紀の末葉からイギリス織物業において起り、十六・七世紀において最も榮えた家内工業的、並びに工場手工業的（マニユファクチュア）生産方法を崩壊せしめたのであつた。

家内工業は手工業的生產形態に代つて現はれた一つの新しき生産形態であつた。そこでは（一）各工業が自己の生産手段、自己の材料をもつて、自己の仕事場で自らの方針に基づいて生産物を作り出し、それをば商店にて直接販賣し或は自ら荷車に積んで遠隔の地にある市場に行つて販賣する方法と、（二）企業家的商人より材料や生産手段の一部を供給され、自己の工場に於いて生産し、その生産物の販賣はその企業家的商人にまかせる方法との二種がある。前者は純粹なる意味の家内工業であり、後者は前貸制度或は委託制度と稱せられてゐる。そこではいづれも生産者が散在的であつた。

生産力の發達、需要の増加に従つて、家内工業におけるよりも、より合理的に、より能率的に生産を行ふことの出来る工場手工業と稱するマニファクチュアが行はれたが、この經營方法は散在してゐた生産者を一つの工場に集合せしめて労働させるのであるが、未だ手工業を基礎とするものであるから、發達せる機械、蒸氣機關を中心とするのではなく、不完全なる機械と風力、水力、馬力等の動力を使用してゐたに過ぎない。イギリスにおいて産業革命以前には、かうした家内工業とマニファクチュア及び簡単な工場が一般的な企業形態として行はれてゐたのであるが、産業革命による工場制度は、かかる企業形態を崩壊せしめてしまつたのである。工場制度においては、機械及び非自然的の動力を使用し、それを中心として労働者を一つの工場に集合統一し、有機的に労働せしめ、分業及び協業による生産が大規模に集中的に行はれるのである。かうした工業形態を工場制工業と呼ぶのであるが、工場制工業には新しい社會的意義が包含されてゐるのである。

工場制工業の社會的意義 工場制工業においては多數の労働者が一つの場所で一定の計畫に従つて集中的に労働し一つの商品を作るために協力するといふ特殊の現象が起るもの

で、これを協業と言つてゐる。この協業によつて、個々の労働者の力の單なる總和以上の或る力——別言すれば一つの社會的生産力が生ずるのである。そして協業は同時に他の一面は分業である。工場制工業では一つの商品を生産する過程がいくつかの部分に分割され、個々の労働者はさういふ部分的の仕事に従事し、それが統合されて初めて一つの完全な商品が出來上る。従つて労働者の各部分的の仕事が統合される方面から見れば協業であり、部分労働に分割されて居る方面から見れば分業である、従つて協業および分業が行はれることは個々の労働者が相互に極めて密接な關係に入り込んだといふ一つの新しい社會的現象である。個々の労働者についてみれば、大きな一つの機械の一部分としての意味しか有たぬわけである。

この工場制工業をその前段階たる家内工業制度と比較して社會的相違を擧げるならば、生産用具として道具或は機械を所有してゐる企業家と賃銀を受けて生産する労働者とが存在することは兩制度とも同じであり、労働者は單に企業者の從屬者としてその指揮命令の下に働くだけであるが、家内工業制度においては、個々の労働者は一個の完全な人間として

一人で一個の商品を作り上げることができた。兎も角自ら商品をつくり上げるといふ意味で尙ほ獨立人であつたわけである。しかし工場制工業においては労働者はただ一つの商品の一部分のみ作る能力しか有たず、互に他の労働者の労働の必要なる前提条件であり、機械として見ればその一部分の如き地位に立ち、その意味で不完全な人間となつてしまつた。労働者は企業家に隷屬すると共に相互に隷屬することになつたといふ状態が生じたのである。しかも企業家は各自利潤の追及のために工場を經營し、他の企業家と競争するものであるから、生産界は無秩序になり、産業界は社會的に觀て無政府状態になつてしまつた。この點は資本主義社會の特質として後述するが如くである。

婦人及び少年労働者の激增 次に工場制工業の出現と共に著しい社會的現象は、婦人及び幼年労働者が増加したことであつて、殊に紡績及び紡織工業において甚だしい。そこでは力を必要とする仕事は機械を使用するから、労働者は機械を掃除し、油を差し、切れた糸をつなぐといふ仕事さへすればよいわけであるから、婦人及び少年で充分に出来るのみか、婦人や少年の賃銀は安價であることからして、婦人や少年が多數工場へ傭はれる様になつた。

なつた。

更に工場制度成立と共に忘れてならぬ社會的現象は、人口の都市集中の傾向である。以前には廣く地方に散在してゐた小屋工業が、工場制工業の發達に伴つて、殆んどすべてがランカシャー及びヨークシャーに集中した。しかも農民の土地逐放と相俟つて男女老若を問はず、多くの人達が、都市に集中し、何ら道徳的に統制もなく、何ら健康の維持についての設備もなき工場に集められるに至つたのである。かくて農村の人口は「蠟のやうに溶け去り」都市の人口は驚くべき速さで増加し、農民の土地逐放の大體完了した十八世紀末には、マンチエスター、リーズ、ボルトンおよびバーミンガムの如き都市の人口は忽ちの間に三倍乃至三倍半に増加したのである。産業革命の完成した十九世紀中葉における新興都市の人口増加は略次の如くである。

	一八〇一年	一八二一年	一八四一年
ロンドン	九五九、〇〇〇	一、三七九、〇〇〇	一、九五〇、〇〇〇
リヴァプール	八二、〇〇〇	一三八、〇〇〇	二八六、〇〇〇

マンチスター	七七、〇〇〇	一二九、〇〇〇	二四三、〇〇〇
バーミンガム	七一、〇〇〇	一〇二、〇〇〇	一八三、〇〇〇
リーヅ	五三、〇〇〇	八四、〇〇〇	一五二、〇〇〇
シェフィールド	四六、〇〇〇	八五、〇〇〇	一二五、〇〇〇
ニューカッスル	三三、〇〇〇	—	七〇、〇〇〇
ノッティンガム	二九、〇〇〇	四〇、〇〇〇	五二、〇〇〇
ブラットフォード	一三、〇〇〇	二六、〇〇〇	六七、〇〇〇

これら工業都市のすべてが産業革命によつて発生したわけではないが、少くとも斯くの如く急速に人口が都市に集中し増加したことは、主として産業革命の結果であつたと言はねばなるまい。

第五節 工業労働者の状態

近代的労働者の出現 産業の直接の運用者であり、富の直接の生産者である労働者階級は如何なる状態にあつたらうか。近世における最大政治家の一人たるグラッドストーンは

曰く「人民の消費力が減少して、労働階級の苦痛及び窮乏が増進しつつあるとき、上流階級の富は不斷に蓄積され、彼らの習慣的奢侈と享樂資料とがますます増大しつつあるといふ、この疑ひを容れざる事實は、我國社會状態に於ける最も悲しむべき特色の一たるものである」(一八四三年二月十三日下院に於けるグラッドストーンの演説「資本論」第一卷第七篇第二十三章改造社版六四一頁)。

(註) ————もちろんグラッドストーンは、一八六三年四月における下院の演説において「富と權力との斯かる麻酔的増殖は……労働民にとつて間接に有利なものとなるに違ひない。これがため、一般消費の資料の價が安くなるからである。富者はますます富み、而して貧者はますます貧の程度を減じて来たのである。だが貧の極限が變じたか否かについては、私は敢へて斷言しないのである」と述べたため、マルクスによつて、その曖昧誤謬を『資本論』の中において指摘され批判されてゐる。マルクスは言ふ。「何といふ跋な文意漸墜だらう！ 労働者階級が依然貧困であつて、ただ有産階級のため『富と權力の麻酔的増殖』を造り出すに比例して『貧の程度を減じた』に過ぎないとすれば、彼等の貧困は相對的には變化する所がなかつた譯である。貧の極限は、若し減退しなかつたとすれば増進したことになる。富の極限が増進したからである。

生活資料が低廉になつたといふ主張については、政府の統計（例へばロンドン孤兒院の報告に示される如き）は一八六〇年から一八六二年に至る三年間に生活必需品の價格が、一八五一年乃至一八五三年に比して寧ろ騰貴したことを示してゐる。その後の三年についていへば（即ち一八六三年に至る間）、食肉、バター、ミルク、砂糖、鹽、石炭、その他幾多の生活必需品はますます價が高くなつた」（「資本論」同上、六四一頁―六四二頁）と。嚴密なる意味においてグラッドストーンの觀察は誤謬ではあるが、彼の如き當時の政治家が尙ほ勞働者狀態の貧困を問題としたといふことをここに問題としたのである。

當時「イギリスにおける最も悲しむべき特色の一つたるもの」であつた近代勞働者、即ち工業勞働者は、全く産業革命後發生したもので、エンゲルスが「近代的勞働者（プロレタリアート）は第十八世紀の後半に先づ、イギリスに起り、續いて世界中の文明國において繰り返された産業革命の結果出來たのである」と述べてゐる通りである。如何なる時代においても、勞働する階級は存在してゐたのであるが、われわれは、近代社會における勞働者、謂ゆるプロレタリアートの歴史的、社會的意義と特質とを明かに理解する必要がある。彼らの狀態を觀察するに當つて、その特質について一言觸れて置かねばならぬ。即ち

工業制勞働者は工場制工業における生産の要素であるが、自ら生産要具を有せず、自己及び自己の家族の生活を支ふるに足る財産を有してゐない。生活の唯一の道は自らの勞働力を企業家に提供してその代りに賃銀を受け取ることであり、その全生活の浮沈はただ企業家の掌中に握られてゐるのである。勞働者のこの從屬的地位についてマルクスは次の如く述べてゐる。

「自由勞働者は自分自身を賣る。而もそれを切賣りにする。彼は自分の生活の中、八時間、十時間、十二時間、十五時間を、一日づつ、最高價の提供者に、原料、勞働要具及び生活資料の所有者に、即ち資本家に競賣する。勞働者はいづれの所有者にも屬せず、又土地にも屬さないけれど、彼れの日々の生活の、八時間、十時間、十二時間、十五時間が、それを買ふ人に屬する。勞働者は、自分の好き次第、幾度でも、自分の雇はれてゐる資本家の下を去る。そして資本家も亦、自分の都合次第、幾度でも——もはや勞働者から何等の利益、或は豫期の利益を引き出し得ないとなれば——すぐに彼を解雇する。然し勞働者は勞働力の賣却を唯一なる収入の源泉とするのだから、自分の生存に見切りをつけない限

り、その買手の全階級、即ち資本階級と縁を切るわけには行かない。彼は甲とか乙とかいふ有産者にこそ隷屬して居ないが、有産者階級に隷屬してゐる。そこで何處かに自分を賣りつける事、即ちブルジョア階級の中に一人の買手を見つけ出す事が、彼れの仕事となる」〔賃銀労働と資本〕マル・エン全集、第四卷、六七三頁―六七四頁。

労働者と奴隷との區別　かくの如く労働者は一人の資本家に隷屬してゐるわけではないが、常にいづれかの資本家の隷屬者であると言はねばならぬ。そして近代工場制度の下に於ける労働者の社會的地位の歴史的特質は、これを古代の奴隷、中世の農奴及び近世の手工業者の社會的・歴史的地位と比較するとき、明確に認識せられるのである。エンゲルスによれば労働者と奴隷との區別は、先づ「奴隷は一度賣られるのみである。之に反して労働者はその日その日毎に、又毎時間ごとに、自分を賣らなければならぬ。一人の主人の所有物となつて居る箇々の奴隷は、單に主人の利益と云ふ點からも、兎に角保證された生存——それはいかに貧しいものであらうが——を與へられて居る。處が個々の労働者は云はば全有産者階級の所有物であり、その労働を必要とする人がある場合にのみ労働を買

つて貰ふのであつて、生存して行く上の保證は少しも與へられて居ない。この生存はただ労働者階級全體としてのみ保證されて居るのである。奴隷は競争とは無關係であるが、労働者は其の競争の中にあつて、其一切の動搖にも影響を受ける。奴隷は一つの物品であつて有産者社會の一員とは認められない。労働者は一個の人間として、有産者社會の一員として認められて居る。それ故奴隷は労働者よりはよりよい生存を與へられることがありうるが、併し労働者は奴隷よりはより進歩した社會の發展段階に屬して居り、それ自身も亦奴隷よりはより高い程度のものである。奴隷が自分を解放するには、凡ての私有財産關係の中で奴隷關係のみを廢止し、その結果先づ自ら労働者となればよい。併し労働者は×××全體を廢滅せしめなければ自己を解放する事は出来ないのである。

労働者と農奴との區別　次に労働者と農奴とは何によつて區別せられるか。農奴は生産要具と幾らかの土地とを自分の物として、之を使ふ事が出来る。そして其の代りに收穫の一部を主人に納めるとか主人の爲に勞役に服するとか云ふ負擔をおはされて居る。ところが労働者が働く時使ふ生産要具は他人の物であつて、その他人の計算に於て働くのである。

そしてその代りに生産物の一部分を受取るのである。農奴は與へる方で労働者は與へられる方である。農奴は生存の保證を受けて居る。労働者は受けて居ない。農奴は競争の圏外にあり労働者はその中にある。

労働者とマニユファクチュリア労働者との區別 ではマニユファクチュリア労働者と近代的労働者との區別は何によつて決せられるであらうか。十七・八世紀のマニユファクチュリア労働者は殆んど常に自分自身の持物として生産要具をもつて居た。又自身の機も持つて居たし、家族の爲には紡ぎ車も持つてゐた。その上更に少しばかりの畑地さへも持つて居て、仕事の合間々々にはそれを耕して居たのである。然るに労働者はこんなものは一つだつて持つては居ない。かのマニユファクチュリア労働者は殆んど常に田舎に住んで居て、自分の主人や雇主に對する關係は多少の差こそあれ、兎に角家長對家族の關係を存して居たのである。然るに労働者は多く大都會に住まひ、その雇主との關係は全く金錢的のものである。マニユファクチュリアの労働者——手工業における職人はその雇主（親方）と同じ社會階級に屬し、風習も同じくして居たが、労働者と雇主即ち資本家的企業家との

間には社會全體に亘つてゐる階級的差別によつて社會的に分たれて居り、この兩者は生活の環境も生活の様式も全然異り、その抱く人生觀までも異つてゐるのである。

かくて、茲に産業革命後、重大なる社會史的意義を有つ労働者階級が出現したのであるが、それは古代の奴隸、中世の農奴、近世の手工業労働者と本質的に異つた特殊の社會現象であることは既述の如くである。

労働者の状態

グラッドストーンをして、イギリス社會における最も悲しむべき状態の一つと叫ばしめた労働者階級の状態について更に觀察するならば、彼らの貧乏と生活の不安定といふことである。エンゲルスは、その著「イギリスにおける労働者階級の状態」（一八四五年）の中で産業革命の後、即ちイギリスにおける資本主義初期の労働者階級の状態を幾多の例證を擧げつゝ、克明に叙述してゐるのである。「労働者は貧乏であり、生活は彼にとつて何等の刺戟をも有せず、殆んど一切の享樂は彼に拒絶されてゐる。法律の刑罰と雖も最早彼にとつては少しも恐るべきものではない——かくして彼はその強烈なる欲望の遂行に何の躊躇する必要があらう、何が故に富者の財貨の一部を自ら獲得することなし

に富者をしてその享樂の儘に放任して置かなければならぬであらうか？ プロレタリアは盗まない如何なる理由があるか？『財産の神聖』と云ふ言葉は一體非常に美しく、ブルジョアの耳には如何にも快よく響くのである——けれども、何等財産を持たない者にとつては、財産の神聖なんてものは自らおしまひである。金は現世の神である。ブルジョアはプロレタリアからその金を奪ひ取り、かくして彼を實際の無神論者たらしめる。それ故に、プロレタリアがその無神論の眞なることを認めて、現世の神の神聖と力とを最早尊敬しないのは何等不思議ではないのである。而してプロレタリアの貧困が上進して生活必需品の實際の缺乏となり、窮迫と失業とにまで至れば、一切の社會秩序の無視の刺戟が尙一層高まる。このことはブルジョアの大部分の者も亦自ら之れを知つてゐる。……困窮の結果労働者は、徐々に餓死し、急激に自殺するか、それともその必要とする物を見つけ次第我がものとする、はつきり云へば盗む、かの何れかを選ぶより外はない。そこで大抵の者が餓死又は自殺より竊盜の方を擇んでも我々は之れを怪しむ譯にはゆくまい。勿論労働者の間にも亦、極端な貧窮に陥つた時ですら盗みをしなない程に充分道德的な者も若干はゐるが、

此連中は餓死したり、自殺したりするのである。嘗ては上流階級の羨むべき特權であつた自殺がイギリスに於てはプロレタリアの間に於ても亦流行になつた、そして多數の貧民は貧困から逃れんがために自殺する——それ以外に自己を救済する方法を知らないのである」(「マル・エン全集」改造社版、第三卷、一四二頁—一四三頁)。

更らにエンゲルスは、労働者の貧困のみでなく、同時に彼らの生活の不安定について次の如く描寫してゐる。「けれどもイギリスの労働者に對して貧困よりも尙遙かに墮落的の影響を與へるのは、生活状態の不安定、賃銀によつてその日暮しをしなければならぬ必然性、之れを要するに、彼等が無産者たらしめるもの、之れである。ドイツの小農も大部分は又貧乏であり、屢々缺乏に悩んでゐる、けれども彼等はそれ程偶然に従屬することはなく、少なくとも或確實なものを持つてゐる。然るにプロレタリアは、その二本の腕以外には何物をも所有せず、昨日得たものは今日食ひ盡して了ひ、凡ゆる可能なる偶然に左右され、その生活必需品獲得の能力に對しては聊かの保證をも有しない——凡ゆる恐慌、その雇主の氣紛れが彼を失業者たらしめ得る——かかるプロレタリアのみは己れ自身の外に頼

るものではなく、而も同時に自己の力を頼りにし得るやうな風にその力を使ふことも出来なくされてゐるのである。プロレタリアが彼の地位を改善するために爲し得る凡てのことは、彼が負ふところの、そしてそれを如何ともすることのできぬ所の運命の變轉に比較すれば、まことに大海の一滴に等しい。彼は凡ゆる可能なる事情の結合の儘に動かされる客體であつて、僅かの間でもそのかつかつの生活を維持し得る場合にはそれを幸福にさへ思はねばならぬのである。そしてこれは自明のことであるが、彼の性格も生活方法も亦これ等の境遇によつて決定される。彼は此渦卷の中に浮び上り、その人間性を救ひ出さんとする。而してこのことは彼を無慈悲にも搾取し、そして後には彼を運命の前に投げ出し、また彼を人間にふさはしからざる状態の中に止め置くべく強制する所の階級即ちブルジョア階級に對する叛逆によつてのみ果し得る所である。然し又彼等は或時には自分の境遇のための闘争を無益なりとして中止し、最も好都合なる瞬間に能ふ限り大なる享樂をしやうと努力する。彼にとつては貯蓄することは無益である、けだし彼は高々二、三週間食つて行くのに必要なだけ溜め得るに過ぎない——しかも一度失業すれば二、三週間とはもたないから

である。引き続き財産を獲得すると云ふことは彼には出来ない。假りに出来るとすれば、そうゆう場合には彼は労働者ではなくなるに相違なく、そして他の労働者が彼に代つて來るのであらう。従つて彼にして良い賃銀を得る場合には、それで贅澤に暮すと云ふより以上にヨリよき何を爲すことが出来ようか。イギリスのブルジョアは賃銀の高い期間に於ける労働者の贅澤な生活に極度に驚き且つ罵るのである、けれども彼等がそれを貯へても何の役にも立たぬ所の、そして結局は蠹魚シメや錆に即ちブルジョアに喰はれてしまふ所の財産を貯へる代りに生を享樂し得る場合に充分にそれを享樂することは當然のことであり、また彼らにとつて賢い仕方であると言はねばならぬ」(同上、一四五頁)。

トーマス・カーライルの觀察 エンゲルスは茲でトーマス・カーライルの描寫した當時のイギリスの労働者の悲惨なる生活状態を引用してゐるが、いつたい労働者の悲惨な生活状態は、一般に社會主義者の故意に誇張したものであると信じてゐる者もあるので、カーライルのやうな文明批評家の言葉の引用は甚だ有力であると思ふ。彼の「過去と現在」の中の一節を茲に擧げてみよう。「此の富裕なる英國の労働者階級は既に悲境に沈み若しく

は今沈みつつある。……ストックポートの巡廻裁判において……或る母親と父親とが我兒三人を毒殺せりとの廉で告發せられ有罪の判決を受けた。此れは子供一人死する毎に受くべき約三磅八志を『埋葬協會』より詐取するためであつた。人の囁くを聞けば官憲はかかる例は恐らく單獨なるまじく、恐らく斯かる方面の事情は此上詮索せざるを宜しからむと諷示したと云ふことである。此れは一八四一年の秋の事、犯罪そのものは前年若しくは前季のものである。(中略)ブリテンの土地において、生ける人間なる母と父とそれも白色の皮膚を有し基督教徒を以て任ずる者がこの事を爲したのである。(中略)かかる例は視界に現はれたる最も高き山の嶺の如きものにて其の下には未だ現はれざる全體の山地平野が横つて居るのである。攻圍せられて飢餓に迫れる都市において、又神の怒の下に落ちたる古のエルサレムの壊敗その極に達したる時に於て下の如く豫言せられた。「情愛深き婦女等さへも手づから己の子を煮て食となせり」と。嚴冷なるヘブライ人の想像もこれより暗黒なる悲慘の深みを考へることができなかつた。それが墮落して神に罰せられたる人間の行詰りであつた。さうしてあらゆる種類の物質が充溢し、眼に見えぬ呪縛にもあらずば

何物にも包圍せられぬこの近代の英國にある我等が、今その状態に近づきつつあるのであらうか」と。更らに又「私は敢て信じたいと思ふ。社會が初まつてから如何なる時代においても其等の無限な幾百萬の労働者の運命が今日に於ける程全然堪へ得られぬものとなつたことはない。人をして不愉快ならしむる所のものとは死ぬことではない。餓死することですらないのである。古來多くの人々は死んだ。凡ての人は死ななければならぬのである。(中略)。我等を不愉快ならしむることは、何故とも知らず悲惨な生活をし、苦しい眼を見て働いて而も何物をも得ず、心苦しみ困憊してゐるのに孤獨で寄邊とはなく、冷酷な人間の世の無頓着に取り圍まれて居ることなのである。(中略)呼べど叫べど答ふるものもなく無限の非理の中に幽せられて徐々と死んで行くことなのである。之は凡て神が作つた人間には堪へ得られないものなのである。永遠に亘つて堪へ得られないものなのである。佛蘭西革命、チャーチズム、三日騒動が不思議であらうか」(同書、石田憲次氏譯、三四九頁)。

破壊された労働者の家庭生活 産業革命による労働者の貧窮化、その生活の不安定と悲惨については既に記述した通りであるが、尙ほ、憂ふべき状態は労働者の家庭生活の頹廢、

精神的・道徳的墮落の有様である。エンゲルスの記述（上掲書）を左に二三摘記してその一斑を窺ふこととする。

「労働者は疲勞し切つて、ぐたぐたになつて仕事から家に歸つて来る。彼は家らしい親しみの缺けてゐる家——じめじめした温みのない、不潔極まる巢を見出す。そこで彼は無茶苦茶に慰安を必要とする。彼は彼につらい翌日の夢を堪へ忍ばせて呉れる或物を得なければならぬ。彼の弛緩し切つた、不快極まる憂鬱の氣分と身體とは、彼の生活状態、彼の不確實なる生存等のために堪へ難き状態にされる。悪るい空氣と粗末な食物とのために虚弱になつた彼の肉體はただ外部よりの刺戟を要求してやまない。彼の社交的欲望は、僅かにただ酒亭に於てのみ充され得るに過ぎない。彼はその友人に會ひ得るやうな場所を外には全然持たないのである——かくて、尙ほ労働者は飲酒癖への最強の誘惑を感じてはならないであらうか。飲酒の誘惑に抵抗することが出来なければならぬだらうか。その反對にかかる事情の下に於ては大多數の労働者が飲酒に陥るに相違ないところの道徳的及び肉體的必然性が存在するのである。」（一三〇頁）。

「婦人が工場で働く結果は必然的に家庭生活を破壊することになる、そしてこの破壊は家族を基礎とする社會の現状においては夫婦にとつてもまた子供にとつても道徳墮落的な影響を及ぼす。子供の面倒を見るだけの餘裕を有たぬ所の、また生れたばかりの子供に慈しみを與へることの出来ぬ一人の母は、又その子供を見る機會さへも多く有たぬ、一人の母は、その子供にとつては決して眞實の母ではあり得ない、彼女は必然的に子供に對して冷淡とならざるを得ない、恰も他人の小供に對するが如く愛情を以て對しなくなるのである。又かくの如き關係の中で成人した子供は、後には家庭生活に對して全く荒廢的な氣持を抱く、そして自分自身が作つた家庭に於ても家庭的な感じを有ち得なくなる。けだし彼等は自身が孤獨の生活を送つて來たものだからである。したがつて彼等は労働者の間における家庭生活を一般に解體せしむるためにのみ役立たざるを得ないのである。これと同様な家庭生活の破壊は子供の労働によつても齎らされる。若しも彼等が衣食住の負擔を兩親に負はす以上の所得を手に入れ得るほどに成長すれば、彼等は、兩親に食料と間代の一定額を與へ、殘額は自身のために勝手に使ひ始める。此事は往々十四乃至十五歳にして起る。

一言を以てすれば子供達は自身を解放し兩親の家を彼等は下宿屋の如く考へ、それが彼等に氣に入らなければ、他の下宿屋へ轉居することさへも敢て辭しなくなるのである」(同上、一六九頁—一七〇頁)。

「家と云へば住むに堪へないやうな不潔なもので、殆んど夜の宿りにも充分でなく、家具の備付けは悪く、屢々雨漏りの虞れあり、暖房設備はなく、人間のウヨウヨ充滿してゐる室内の濕つた空氣のせいで居心地の悪いこと夥しい、夫は恐らく妻や上の方の子供等も亦、終日皆違つた場所で労働し、顔を合はすのは朝と晩だけである、——その上常に飲酒への誘惑がある、かくして家庭生活はどこに存在し得ようか。それでも労働者は家庭から逃れ去ることは出來ず、家庭の中に生活しなければならぬ、而もその結果は絶えざる家庭の紊亂と家内喧嘩とであり、それが夫婦並に特に子供達に極度の墮落的影響を與へるのである。總ての家庭的義務を等閑に附すること、特に子供達の注意を怠ることは非常に屢々イギリス労働者の間に見られるところであるが、これは主として現在社會制度の産物である。而して子供達はこんな具合に粗野に、非常に屢々その兩親自身も屬してゐる最も墮

落的な環境の裡に生長するのであるから、彼等が後に至つて尙立派に道德的になる筈があらうか。自己満足的なブルジョアが労働者にいろんな要求を提出するのは實際餘りにオメデタ過ぎるのである」(同上、一五六頁—一五七頁)。

少年と婦人労働者 既に述べたやうに機械の使用による工場制度の發達は小兒及婦人労働の増加を來し、イギリス工場の初期には、労働者に對する需要の激増のために、感化院から多くの小兒が工場の中に送り込まれた事實がある。それでも尙ほ不充分であつたために小兒募集の廣告が毎日新聞紙上に掲載せられてゐたと言はれてゐる。また親達は自分の娘を工場へ送ることを嫌つて居つたし、工場娘 *Factory Girl* と云ふ呼び名は若い娘達には最も侮辱的の言葉でさへあつたが、労働者の生活の窮迫は子供や妻を工場で働らかせざるを得なくなつた。ギブンスの「イギリス産業史」の記する所によれば、恰もアメリカ市場に於ける奴隷販賣人の様に、小兒等の體格検査をした後に、彼らは工場に送られ、非人道的に、冷酷に取扱はれた。小兒等は屢々一日に十六時間労働させられた。日曜日でさへも機械を掃除すべき好時機として使用された。またサミュエル・キッドの「工場運動史」

によれば、悪臭の中に、蒸暑い部屋の中で、多くの車輪の断えまなき廻轉の真中で、小さい足や小さい指を、絶えざる活動をつづけ、無慈悲な監督者の重い手と足に鞭打たれ、またいつまで経つても満足されない我利の鋭い才能によつて發明された刑罰具による肉體的苦痛の罰によつて脅かされて、不自然なる活動を強制されたと言ふ。

小兒達は粗末な廉い食物を與へられ、生活の雰圍氣は病氣と貧窮と悪徳と傳染病であつた。「哀れな小兒達は脱出しやうとした。その脱出を防ぐために、その疑ある小兒は、大腿部に達する長い鎖をつけられ、足首の上に鐵を釘で打ちつけられ、これらの鎖に縛られたままで労働させられ睡眠させられた。若い娘や小兒たちはその取扱ひに苦しみ、多くの小兒は死んだ。そして夜人里離れた所に秘密に葬られた。」かかる小兒労働者の慘澹たる状態は、當時いくらでも數へられたし、工場法が發布されて十三歳以下の小兒の労働が禁止された後にも尙ほ秘かに不法なる虐使が行はれたと言はれてゐる。エンゲルスは言つてゐる。「工場主は徹夜業といふ耻づべき制度を導き入れた。夜間の休憩を不斷に奪ふことが特に幼少年又成年者の肉體に及ぼす影響が如何なるものであるかは容易に考へられるこ

とである。全身の一般的弛緩と衰弱とに伴ふ神経系統の刺戟がその必然的なる結果であつた。そのために飲酒、耽溺、放縱なる性行の増進と鼓舞、或る製造家は、彼の工場で夜業が爲された二ヶ年間に於いて私生兒の數が二倍したと證言した」(一七五頁)。エンゲルスは「製造家の工場は同時に閨房である」(一七五頁)とまで極言してゐるのである。かくの如く労働者の酷使、労働時間の延長、夜業の制度の導き入れ等は、労働者殊に婦人及び少年労働者に驚くべき悪結果をもたらしたのであつた。

二大陣營への分裂 産業革命の諸結果については既に述べたやうに、機械技術による生産の極度の擴大、商品の安價の生産、家内工業に對する工場制生産の壓倒的勝利、労働者階級の發生、機械への労働者の隷屬、労働者の肉體及び精神に與へた諸影響、小兒及婦人労働者の悲惨なる生活等が考へられるが、殊に近代的労働者の増大と勞資兩階級への分裂はその後における資本主義社會史の基本的内容を成すものであつた。エンゲルスは産業革命の結果を次の如く叙述した。

「工業の急激なる發展は労働者を必要とし、労働賃銀は昂騰した。而してその結果労働

者は群を爲して農業地方から都會に移動し、人口は急激に増加した。而して此の増加は殆んど全くプロレタリアートの増加となつた。のみならずアイルランドにおいては十八世紀の初め以來、漸く秩序立つた状態が到來して居つた。この地にもまた、以前の騷擾に際してイギリスの蠻行によつて十人に一人以上も殺戮された人々は急激に増加したが、特に其の後、工業が發展してアイルランド人をイングランドに引き寄せた。かくして大ブリテン帝國の大都市及び商業都市が發生したが、その人口の少くとも四分の三は勞働者階級に屬し、而して小ブルジョア階級を構成する者は小賣商人及び極少數の手工業者のみである。

新工業は道具を機械に、仕事場を工場に變じ、かくの如くして、中間階級の勞働分子を勞働するプロレタリアートに、從來の大商人を工場主に變じた。さらにそれは小ブルジョアジーを驅逐し凡ての人口を二つの對立する陣營——勞働者と資本家——に分けた。近代社會のこれら二つの基本的な階級——プロレタリアートとブルジョアジー——の鬭争こそこれから先一切の歴史的内容である。尙ほブルジョア階級及びプロレタリア階級の成立發展については、マルクス「哲學の窮乏」やマニフェストに雄勁卓拔なる叙述が見出されるのである。

第六節 産業革命とイデオロギイの變革

資本主義の本質的精神 産業革命は、中世の封建的生産關係を變革して、資本主義的生産關係を發生せしめた。イギリスの商工階級は十八世紀の終りには、既に急速に經濟界における支配的地位を獲得したが、そこには必然的にこの資本主義的生産關係における商工階級の活動に適應する觀念をもたらししたのである。即ち生産關係の變革は當然に社會の觀念的世界にその變革をもたらししたので、ここではブルジョアジーは、潑刺たる自由競争のもとに一人は富み、他の者は敗北し、しかもそれによつて社會の進歩は實現され、富は創造されるであらうといふ確信を抱くに至つたのである。云ふまでもなくこれは資本家的精神であり企業家的精神であり、現在の謂ゆる資本主義的精神である。この資本主義的精神は、資本主義經濟の發展過程において、強力なる拍車となつて著るしき作用を及ぼしたことは事實であるが、決してこの資本主義的精神なる觀念的要素が資本主義的制度なる經濟

組織を作つた原動力となつたのではなくして、現實における産業革命後の經濟的制度的出現が資本主義的精神そのものを發生活躍せしめたのである。

資本主義的精神は個人主義・營利主義・自由主義を根本的基礎とするもので、そこでは個人の十分なる自由の状態において經濟的合理主義に基き、不斷に營利の追求をなすことが原則として認められる。ブルジョアのこの理想は、イギリスにおいては經濟學の父と言はれるアダム・スミスの大著「諸國民の富」の中に最も明確に述べられてある。謂ゆる自由放任主義と呼ばれてゐるものであるが、この思想は、始めフランスのケネーによつて述べられ、フイジオクラットの經濟思想として、近代經濟思想史の卷頭を飾るものである。

ケネーの自由放任論とスミスの思想 ケネーの思想體系は自然法哲學の上に基礎を置くもので、十七、八世紀におけるフランスの自然法哲學、天賦人權論等の啓蒙思想の影響の下に立つてゐる。彼によれば、萬象間には普遍的に神意を以て支配せられ、一大法則たる自然的秩序があり、別に現存せる政府の拘束的なる人爲的・現實的秩序があつてそれと對峙する。而してこの理想乃至當爲である自然的秩序の一般的構成を發現するに最も接近せ

る法律、すなはち人爲的秩序を以て法とする國家こそ最善の政治が行はれるものであるとする。人間は最善・完美なる神の與へたこの法則に従ふ筈のものである。しかし人間には自由意思があるから神の法則に従ふと否とは各人の自由に委せる外はないが、従はぬ場合に如何なる不幸が來つてもその責任は全然その個人に歸着すべきものである、と云ふ。すなはち此の自由權が經濟上においては營利の追求權となるのであつて、フイジオクラットの經濟思想は經濟的個人主義である。乃ち個人は凡ゆるものから全く自由に自らの經濟上の利己心によつて行爲すべきものであり、そこでは當然、人格の自由、職業の自由、契約の自由が認められる。かくてフイジオクラット學派のグールネの言つた「爲すがままに放任せよ、その行くべきところに就かしめよ」*Laissez faire et laissez passer* がその信條となり、國家の全ての干渉、監督を排除して、各人の自由に放任すべきものと爲されたのである。

このフイジオクラットの自由放任主義の思想的影響を受け、イギリスの現實に發展し初めた資本主義經濟を觀察したスミスはその經濟的自由主義を次の如く強調した。

「保護又は干渉の總ての制度が斯様にして全然取り去られるならば、自然的自由といふ明白にして且つ簡單なる制度が獨りでに樹立せられる。各個人は、その者が正義の法を侵害せざる限り自分の思ふがままに自分自身の利益を追求し、さうして他の如何なる人の又は如何なる人々の組合の、事業及び資本たるを問はず、自分の事業及び資本を以て之と競争することにつき、全然其の自由に放任せらるるであらう。かくて世の主權者は、若し之を行はんとすれば、必ず幾多の妄想に陥るを免れ難く、且つ人間の智慧又は知識を以てしては、之を適當に實行することの到底不十分なるを免れざるところの任務から、即ち私人の産業を監督し、之をして社會の利益に最も適合せる方面に指導すると云ふ任務から、全く免れ得ることになる。自然的自由の制度の下に於いては、主權者の爲すべき任務は只だ三つあるだけである。此の三つのものは、何れも極めて重要なものではあるけれども、しかし簡單で何人にも理解し得らるるものである。即ち其の一は、一國をして他國の暴力及び侵入を蒙らしめざるやう之を保護するの任務である。其の二は、出來得る限り、社會の各員をば、社會の他の人々の不正又は壓制から保護するの任務、言ひ換ふれば、正確なる

正義の支配を樹立せしむるの任務である。其の三は、個人又は少數なる個人の事業としては、到底收支相償はざるが如き或種の公共事業及び公共の營造物を創設し、且つ維持し行くの任務である。蓋し此等の事業は、個人又は少數個人の事業としては、その利潤が到底之が費用を償ふに足らぬとしても、社會と云ふ大團體の仕事としては、屢々收支相償ふて猶ほ餘りある場合が在り得るからである。」（「諸國民の富」四篇九章）。

スミスの主張せる經濟政策は、斯くの如く自由放任主義で、國家公權力の干渉は能ふ限り排除し、之に干渉し、之を束縛することは自由放任の原則に對する特別の例外として必ず法令の規定を俟つべきものであるとするのである。従つて斯る特別の規定の無き限り、労働、生産、消費、すべて法律上において全く個人の自由であり、それこそ近代の個人主義的社會の特徴とせられるのである。

マルサスの罪惡・困窮不可避論 マルサス及びリカルドに至つて、この自由放任の原理は更に發展せられた。現實社會においては、資本主義の發達は農民及び労働者大衆の未曾有の貧困化及び失業者の増大を伴ひ、それは重大なる社會問題となつた。マルサスは「人

口論」を著して、人類社會における斯の如き罪惡及び貧窮は不可避免的のものであることを論じた。曰く、人間の生きて行くのには食物が必要である。また人間の兩性間の情慾は必然的のものであつて、殆んど現在のままの状態である。然るに人口は若し制限を加へられない時には等比級數的割合を以て増加するに反し生活資料の方は僅かに等差級數的割合を以て増加するに過ぎない。人間が生きて行くためには此の二つの相等しからざるもの間に何等かの方法による平衡が保たなければならない。茲に困窮及び罪惡の現象が起るが、これによつて人類の人口増殖の制限が加へられるわけであり、人類の大多數は、要するに永遠にその生活資料の不足の恐怖から脱することは出来ないのである。即ち人類の社會に困窮の存在して居ることは、かかる不可避的な人口法則の結果であつて、それは人類の理性の發達が不充分であるとか、或は社會制度に缺陷があるからではない。といふので、これが「人口論」第一版（一七九八年）の論旨である。

すなはち、當時社會の問題となつた労働者の窮乏も、貧民の餓死も、ただこれを放任して置くの外はないと云ふマルサスの自由放任論は、當時の社會組織の是認論として、正に

新興ブルジョア階級とそれの政治的表現たる政府との待ち望んでゐた理論であつた。彼は人口論第二版を一八〇三年に公けにして甚だしく改訂増補し、殊に道徳的に性慾を抑制する事によつて人類は人口の増加を避けうるといふ謂ゆる道徳的抑制論の一項を加へたことは、第一版の主張を理論的に否定した事になつたが、しかし他の論述は第一版の主旨と變更はなかつた。要するにマルサスの人口理論は資本主義的社會組織の肯定論であり、新興有産者・イデオロギーの表現として、アダム・スミスの自由放任論を發展せしめたものである。

マルクス及びエンゲルスは、マルサスの人口法則を以つて抽象的人口法則と爲し、我々が一度、人類社會に對する人口法則について考慮するとき、動植物界を支配する抽象的人口法則と區別さるべき歴史的人口法則の存することを知ると云ふ。「特殊なる歴史的生産方法は各々その特殊なる歴史的に妥當する人口法則を有する。（中略）一つの抽象的なる人口法則は、人類が歴史的に干與しない限り、植物と動物に對してのみ存在するにすぎない」（「資本論」第一卷）とし、ブルジョア人口理論を論駁した。彼によれば労働者の貧困は

資本主義の所産であり、貧困の原因は、労働者の労働の生産物が労働者のものとならず、資本家によつて所有せられ、資本家はこの生産物中から只一部分だけ、労働賃銀だけを労働者にあたへて、残りの部分を剰餘價值として收得してしまふことに存すると云ふこと、また資本主義に必然的現象たる産業恐慌が失業者の大衆を増大し、彼らの貧困を増大するものであることを社會科學的に證明したので、「資本論」の中にその克明なる研究が展開されてゐるのである。

リカルドの地主辯護論 リカルドも亦極端なる自由放任論者であつた。その「經濟學之原理」における地代論は有産者階級の階級意識乃至階級道德の表現と觀ることができ、彼の地代論の前提を爲すところのものは、第一に優良なる土地には限りがあり、位置、性質に差異があるといふこと、第二には土地には收穫遞減の法則が行はれつつあるといふことの二つの事實であつて、それはマルサスの人口論の前提におけるが如く一つの自然的事實であり、人爲の如何ともすることのできぬものである。そして人口は益々増加するに従つて農産物の需要もまた増加し、土地に收穫遞減の法則が行はれる爲に、次第に劣等地を

耕作する様になるは自然の勢ひであり、その限界土地の農産物の生産に費す労働量が増加すると共に、その交換價值の騰貴——價格の騰貴と云ふ結果を齎す。従つて優良なる土地の地主がこの場合生じたる差額を地代として受け取ることは自然の法則に基づく當然の事實であつて、決して人爲の結果ではないと云ふ。従つて一般消費者にとつて農産物の價格が高くなつても、それは地主が地代を受け取つてゐるがために、その負擔が懸つてゐるのではない。何故ならば「たとひ地主が彼らの地代を全部受けとらぬとしても」穀物の價格が限界土地の耕作の結果高騰したのであるから「地主の地代放棄のために穀物の價格が下落すべきものではない」。單にそれは耕作者の餘分の利得となり「彼等をして紳士の如く生活するを得しむるのみであらう」(リカルド「原論」五二頁)。と云つてゐる。故に一般消費者は地主が地代を受けとりつつあることのために、別に不利益を蒙つてゐるのではないから、地主に對して何ら不平を言ふべき根據はなく、地主もまた社會上何ら不當の理由で地代を得てゐるのでなく、全く自然法則の齎す當然の結果を享受してゐるに過ぎないのである。かくの如くリカルドが自然法則に基づいて地主の地代收得を辯護したのは恰もマル

サスが人口の法則により一般に貧困の必然性を説いたのと、その根本的態度は同一であると云つて差支へない。

マルサスとリカルドの論争の社會史的意義 リカルドは自由貿易論者として穀物關稅の廢止を主張し、その反對論者たるマルサスと論争したことは周知の事實である。若しマルサスの主張に従つて穀物關稅を維持すれば、當然穀物の價格が騰貴し、引いて地代は騰貴して地主の増收を齎す。従てマルサスは地主の利益を代辯する。また穀物の騰貴は、勞働の自然價格の騰貴を來し、資本家の利潤を減じ、その不利益を結果する。此點においてマルサスは地主の利益において資本家の不利益を主張することになる。しかるにリカルドはマルサスと反對の見解に立つが故に、それは却つて地主階級の不利益において資本家階級の利益を主張するに至る。しかし兩學者の學說が共に有産者階級の意識的表現であることに變りはない。そしてかかる學說の據つて來るところは、當時の有産者階級の内部の自由競争に基く矛盾——現實の利害の分裂といふ事實であり、同時に勞働者階級の利益に對するブルジョアジの鬭争を物語るものである。

リカルドの學說において地代論が、一面地主階級の地代收得の辯護といふ形で地主階級の利益の代辯となり、他方穀物關稅の廢止論における資本家階級の擁護論が却つて地主階級の不利益を意味するに至つた矛盾は、當時における有産者全階級の勞働者階級への宣戰と、その階級的性質を示すものであり、且つ自由競争による有産者階級の内部的分裂といふ歴史的特質を如實に表現してゐるのである。

第七節 ブルジョアジの政治的支配

政治は經濟の集中的表現 産業革命によつてイギリスの社會がブルジョアとプロレタリアの二大階級に分裂し、ブルジョアジが確固たる政治的勢力を把握したのは著るしい社會史的現象であつた。「政治は經濟の集中的表現である」といふ名言は、凡ゆる他の諸國に妥當すると同時にイギリスにおいて亦妥當するものである。エンゲルスは、産業革命後におけるイギリスのブルジョア階級の政治的權力の獲得について次の如く叙述した。

「産業革命の結果として擧げるべきは、マニユファクチュアが倒れて大工業が之に代つ

た處では一つ残らずブルジョアジーが——即ちその富と力とが——極度に發達して行つて、その國での第一階級に成り上つた事である。其の爲めに、こんな結果を生じた所では例外なしにブルジョアジーが政權を握り、從來の支配階級であつた貴族とギルド組合及び、此の二つの者の代表者たる專制××に代る事になつた。こんな具合にブルジョアジーが貴族の勢力を滅ぼしてしまつたのは、全く長子相續權とか、所領地賣却禁止とか其他の貴族の持つてゐた特權をまき上げてしまつたからなのであり、また同じくギルド組合員の勢力を打ち碎くに至つたのは、ブルジョアジーがギルドとか手工特權とか云ふ様な、彼等のこれまで與へられて居た特權を全部撤廢して了つたからなのである。そして此の貴族とギルド組合員との特權をまき上げた代りとしてブルジョアジーが齎らしたものは自由競争なのであつた。云ひかへれば凡そ人間である以上どんな産業部門に携つて仕事をしようとする自分の勝手である。そして其の事業を經營するに當つて、それに必要な資本が充分でないと云ふ事程障碍となるものはないと云ふ様に社會状態を變へたのである。それ故に自由競争を導入する以上は、今から後は社會の全員は凡ての點に於て平等であるが、ただその各々の手にある

資本に大小があるといふ範圍に於てだけはなほ平等でないといふ事や、更に又資本こそは決定的の力であり、資本家即ちブルジョアが社會の第一階級に成り上る事が出来たのも一に此の資本の力の御蔭にあるのだと云ふ事、この二つの事を公々然と宣言して居るのと同じなのである。併し乍ら大工業をはじめの爲には自由競争が必要缺くべからざるものであると云ふのは、自由競争なる社會状態あつてこそ初めて大工業が成長して行くことが出来るからなのである。ブルジョアジーはかくして貴族とギルド組合員との社會的勢力を亡ぼしてしまつた後に、彼等の政治上の勢力をまで亡ぼしてしまつた。そして社會での第一階級に成り上つたと同じ様に政治的の形式の上にも亦自ら第一階級たる事を宣言したのである。彼等ブルジョアジーが此の目的を達する爲にとつた手段は代議制度を導き入れる事であつたが、この代議制度は、法律の前に於けるブルジョアの平等と云ふ事即ち自由競争を法律的に認知するといふことの事柄を基礎としてゐるものであつて、ヨーロッパ諸國に於ては立憲君主制の形態の下に採擇せられたのである。これらの立憲君主國に於いては、一定の資本を持つた者、従つてブルジョアのみが選舉人たる資格をもつて居り、之等のブルジョア

選舉人が代議士を選び、そのブルジョア代議士が租税拒否の権利を通してブルジョア政府を勝手にきめるのである」(「マル・エン全集」第三卷、四一二頁—四一三頁)。

初期イギリスの議會 エンゲルスの觀察したイギリスにおける政治上の改革、即ち代議制度の發展について尙ほ具體的に觀察してみよう。代議制度はジョルジ一世(一七一四年—一七二七年)及びジョルジ二世(一七二七年—一七六〇年)の治世に於て履行せられた。

イギリスに於ける諸制は元來成文憲法に據らず多くは慣習法に基いてゐた。而して政府なるものは世襲國王と世襲貴族を以て組織する上院と代議士を以て組織する下院との三者より組織せられ、上下兩院より成れる議會は法律を制定し、豫算を可決した。國王は議會に於て多數を有する政黨の首領を首相に任命し、彼に内閣の全權を委任するが故に、事實上、實權は下院の掌中に把握せられたのであつた。

第十八世紀には、商人の著るしい經濟的進出があり、彼らは自らの勢力を利用して、自己階級に都合の良い様に政治を左右しようと努めた。マーカンティリズム政策即ち重商主義的經濟政策における國家の保護、乃至補助による商業及び貿易の奨励の如きは、商人勢

力の政治への現はれであつた。産業革命の結果として出現した工場工業制度、機械及び動力の使用による大規模の大量生産は、從來のマーカンティリズム的諸政策によつて決して保護されるものでなく、却つてこの政策は新興資本主義的大企業による自由なる産業的活動の桎梏となつたもので、アダム・スミスの「諸國民の富」における重商主義政策の鋭い駁撃は新興資本家階級の意圖を理論的に代辯したものに外ならなかつた。

マーカンティリズム政策とアメリカの獨立 イギリスにおいては、名譽革命後漸次代議制度が發達したため、民衆は國政に參與する機會を得たから、マーカンティリズム政策を採用してもフランスに比すればその弊害は甚しくはなかつた。しかしマーカンティリズム經濟政策があくまで國家支配階級の軍事上の優勢を主とし、國民自身の經濟的繁榮は従たる地位に置かれて考慮されたため、政府の專斷的意圖により、政府の保護のために利益を蒙る會社の集團と、その保護のため却つて損失を蒙る集團との相互の確執と、それによる鬭争を招致することが尠くなかつた。例へば毛織物業者と綿織物業者と互にその製品の販路に就て競争を見た。農民は牧畜する關係上、毛織物業者に加擔したため、競争は毛織物業

者の有利となり、長い間、例へばキヤラコに消費税が賦課されてゐたが如きはその一例である。或はまた一七五〇年に鐵を植民地より輸入することを許可せんとする法案が議會に提出せられた際に對して、もし鐵を輸入すればイギリスの製鐵業が衰微し、従つて木炭の使用が減じ、木材の相場が下落するに相違ないと云ふので、イギリスの森林所有者は、その立場より法案に反對したため、職業者間に利害の衝突が喚起され、徒らに政治的紛糾を醸したのもその一例である。

特にマーカンテリズム政策の弊害の大なるものは、その政策を新興植民地たるアメリカに適用したことで、(一)植民地は母國に對して母國に生産せられぬ貨物を供給せねばならぬ、(二)植民地は母國の競争者たる他の商業國を富ませるとか、または植民地に工業を起して母國の工業と競争することを禁止する、(三)植民地は母國の政治および陸海軍の費用を負擔せねばならぬ、等は對アメリカ植民地政策の要點であり、植民地民衆を憤激せしめたものであつた。新らしく勃興しつつあつたアメリカの産業はこのマーカンテリズム政策によつて甚だしく拘束せられ、ために植民地民衆はこの産業に對する壓迫より

脱し自由なる活動をせんがために遂に一七七六年七月四日の有名なる獨立宣言を公示し、アメリカは本國より獨立するに至つたが、これはイギリスのマーカンテリズム政策の失敗であるが、それは既に政策そのものが、生産力の増大と産業の自由なる實際的發達に對して不要なる桎梏となつた證據である。

イギリスの穀物條例の如き亦著しく新興産業の發展を阻碍したもので、例へば、この條例の存在するがために、生活必需品たるパンの價格が高騰し、従つて商品としての勞働力の價格を高めることになり、また、この條例違反に對する國家の干渉は、自由なる貿易の發展を阻碍したマンチェスター及びリバプールを中心とした新興企業家、商人等は、かくの如きマーカンテリズム政策の撤廢に努め、一八二三年における關稅引下げに成功し、更に航海條例の廢止を斷行せしむるに至つた。一八二三年より一八二八年に至る數年間にその改良が實現したのであつた。而して地主の利益の代表者はトーリー黨であり、工業ブルジョアジの代表者はウィッグ黨であつた。

選舉法の改正 當時イギリス議會における代議士の配當は極めて不平均であつて、總員

六百五十八名の中、アイルランドは一百名を、スコットランドは四十五名、ウェールズは二十一名を出し、其の残餘の四百九十二名はイギリス本部より選出する制であり、これを市部地方部に區別する時は、地方は總人口の大部分を占有するに拘らず百八十六名を選出し、市部は四百六十七名の多數を選出してゐた。しかもこれは十四世紀に規定した選舉區であり、その後の社會の發展は、人口の増減、變動を來したが、殊に産業革命後は、石炭産出地方における大工場の設置に伴ふ人口の増大は、寂寞たる寒村をして數年間に人口密集せる大都會たらしめた。他方嘗ての都市で荒涼たる一孤村と化したるものもあるに拘らず選舉區の改正は行はれず、僅か二戸の村落より代議士二名を出し、マンチェスター、バーミンガム、リーズ、シェフィールド等の如き既に十二萬以上の人口を有するに至つた新興都市よりは一名の代議士をも出さぬ有様であつた。しかも貴族、地主等は新興商工業者の進出のために既得權を奪はるることを恐れ、選舉區改正、議會革新に反抗を試みてゐた。一八三〇年保守黨首領ウェリントン公去り、グレー卿を總理とする自由黨内閣が組織されてより選舉法改正案、議會革新案は、幾多の波瀾を経て一八三二年上下兩院を通過し、法

律となり新興ブルジョアジーは漸次政治的方面に進出する機會を得るに至つたのである。同案においては腐敗選舉區五十六を削除し、その部分の議席百四十三名のうち六十五名を従來代議士を出さざる四十三都市より選出し、更に選舉に關する財産資格も低減し、選人は地方に於て二十四萬七千人より三十七萬人に増加し、市部にて十八萬八千人より二十八萬六千人に増加し、斯くして従來の貴族、地主の勢力は新工商階級の代表者に壓倒せられるに至つた。

一八三五年には地方自治制度の改正が行はれ、新興商工階級も自治制の上に参加し或は監督する權利を得ることが出來た。一八四九年には穀物條例を撤廢したが、この條例は十五世紀の頃、植民地から安價に輸入される穀物に對して關稅の障壁を設け、かくして自國の穀物の値下りを防止せんための政策であり、數世紀の間施行せられてゐたものである。當時イギリスの國民經濟が農本主義であり従つて農業保護制度に據つた歴史的事實を示すものであるが、新興商工業階級は地主とは逆に低廉な穀物を要求したため、地主貴族の利害と衝突しても穀物條令の撤廢を必要としたのであつた。ユブテン及びブライイト等自由貿易

主義者の反穀物條例同盟は多数の新興ブルジョアを擁して猛烈なる運動をなし、遂にその主張を貫徹することが出来た。更に一八五三年にはブルジョア階級の政治的勢力を代表する新政黨自由黨を指導したグラッドストーンは、保護輸入税の撤廃及びフランスとの自由通商を唱道し、自由主義の旗幟を闡明に掲げかくして新興ブルジョア階級の政治的活動は、その巨大なる富力を以つて権力を表現し、イギリス政治界を支配するに至つたのである。資本主義に内在する必然的矛盾の現はれとして勞資兩階級の分裂と、之に伴ふ勞働者階級の擡頭による勞働黨の政治的活動の起るまで、自由黨はイギリス・ブルジョア階級の政治的勢力としてイギリス政界を支配しつづけたのであつた。選舉資格改正にまた議會改革に、ブルジョア階級と協力して政治闘争を行つたプロレタリアートは、しかし乍ら選舉權を與へられなかつた。ただ選舉權を受けたものは有産者と十ポンドを下らざる家賃を拂ひ得る借家人とであつた。

第八節 初期無産階級の思想と運動

ロバート・オウエンと彼の根本思想 十九世紀初頭における最大な社會主義者の一人であるロバート・オウエンの人物についてマクス・ベーアは次の如く述べた。「彼は産業革命の勃興及び發展、社會的運動、政治的及び經濟的權力を目標とする勞働者階級の闘争を單に目撃したばかりでなくそれに自ら參加した。この時期の諸運動に對する彼の影響は目ざましきものがあり、その影響は今日までも残つて居る。彼の強力にして單純な智能、常に理性の統制の下にあつたその完全なる肉體的健康と熱情は、不斷の熱心な直進的な決意となつて、また自己の信頼と果斷となつて現はれ、それが彼に人類の指導者たるの地位を與へた。これ等の諸特性は、大部分は遺傳と天賦とに基づくものであるが、またオウエンが早くから人間の性格なるものは、人がその中に生れその中に生活する所の環境によつて構成されるといふ確信を獲て居たことにも因る。彼はこの眞理に到達するや否や——この眞理は彼の二三の嚮導原理の一つであつたが——彼の心は、頗る簡單に諸思想を整理すること

ができ、従つて次第に沈着冷靜となり、憤怒や悪意は彼から消え去つた。けれども彼は彼と同じ意見を有つて居た所の合理主義者たる彼の兄弟の多くが、この簡單なる推理に到達し、心情の純清を保ち、指導者たるの地位につき、社會改革運動に携はらぬのは何故であるかを説明することはできなかつた」と。また「オウエンの冷靜な論理の甲冑の下には勞働貧民に對する同情の念に燃ゆる心臓と社會的幻想によつて培はれた想像力があつた。彼はその一身に實業家の俊敏慧眼と豫言者の感激と忘我とを兼ね備へて居たものである」また「彼の無限の慈愛心と人類愛とは、幾多の缺陷を償ふて餘りがある。また新しき發明の意味についての彼の洞見、幼年者教育、工場立法及び勞働者階級の協同組合運動に對して爲した彼の貢獻は、社會主義の歴史における最も重要な地位の一を彼に確保したものである」(ペーア、「社會主義史」、第一卷、一六〇頁——一六二頁、波多野鼎氏の譯文)

オウエンの根本思想はジェレミー・ベントムの功利主義の影響の下に立つ謂ゆる最大多數の最大幸福を理想としたものであつた。そして彼は人間の性格が善良に圓滿に發達した場合に、その人は最も幸福であると信じた。彼によれば人間の性格の善悪はその中に生活

してゐる周圍の事情、即ち環境の良否に依るとする、特に經濟的環境の良否に依存するものであるとした。しかも經濟的環境は支配的權力者の意思によつて如何やうにも變革し得るものであるから、最大多數の最大幸福は、支配的權力者が、斯る眞理を明かに理解することによつて實現される可能性がある。然るに世の支配階級者は自己の性格は自己が創造するかの如く考へてゐることよりして、社會における窮乏も罪惡も不幸も即ち無智と貧乏とがその跡を絶たない。従つて最大幸福の實現は社會の權力者を啓發し、彼等を反省自覺せしめ善き經濟的環境を創造するために社會改革に努力せしめることに存すると信じたのである。約言すれば社會の無智と貧乏の退治のために、豊富な生活資料と善き教育とを與へねばならぬといふのである。

オウエンは、この理想の實現のために一生涯を傾倒したのであるが、彼の思想の發展の上より觀てこれは三期に分つことが出来る。第一期は一八一七年頃までで謂ゆる濫情主義者人道主義者、勞資協調主義者としてニューラナークに自ら經營する大紡績工場を模範的に改善し、勞働者の子弟を教育し、彼らの物質的生活の幸福のために種々施設すると同時

に、政府に對して工場法の制定を勧告し、法律の力を以て労働者の無智と貧乏とを驅逐しようとする時代である。第二期は空想的社會主義者として、労働貨幣を案出し、或は十五萬弗を投じてアメリカのインディアナ州に三萬エーカーの土地を買取り「統一協同の村」を作り「ニュー・ハーモニー平和村」と呼び社會主義の實驗を行つた時代で、一八一八年から一八三二年までのことである。第三期はそれらの凡てに失敗した後、當時イギリスに活動したチャーチスト運動にも關係したが意見を異にするために運動より退いて餘生を送つた時期である。

彼は正しいと信じた場合は直ちに之を實行した點にその著るしい性格的特徴を有したのであるが、彼が理想社會の構想を實驗に移した動機は、一八一五年ナポレオンの没落後におけるイギリスの經濟における恐慌及び之に伴ふ工場閉鎖、失業者續出、貧困と罪惡の増加といふ慘狀であつた。これを見た彼は、消費と生産の調和を理想社會の原理とすべきを思ひ、その基礎に立つ共同の生産と共同の消費と個人的不平等を無くした完全なる共產主義の社會を建設しようと試みたのであるが、理想社會が單なる意思や情熱によつて一氣に

實現し得るものでないことを、その結果において證明したわけである。この實驗に失敗した後、彼は更に同じ原理に立つ國民衡平労働交換所を建設した。彼は價値の標準が貨幣であることが、社會の病弊であるが故に貨幣制度を廢止し、新たな交換の媒介物として、労働時間を表示する労働切手を考案し、中間商人を排除して労働切手の媒介による生産物の交換を、正義に従つて行ふことにした。しかし不正直の人間も増し、必要な品物も不足し、不必要な品物が倉庫に充満し、しかも尨大なる資本主義社會の貨幣制度は依然として周圍をとりまいてゐることのためにこの實驗も失敗に歸した。最後にロンドンの貧民窟に入り、チャーチスト運動に關係したがオウエンはプロレタリアートが獨立的に自己を解放する能力があることを信ずることが出來ず、チャーチスト運動の方針と意見を異にして脱退したのであつた。

オウエンはこれらの實驗に失敗したが、その思想は生産組合及び消費組合の思想となつて復活してゐるのである。

空想的社會主義批判 オウエンは、フリーリエ及びサン・シモンと共に十九世紀における

社會主義者——空想的社會主義者と呼ばれてゐるが、この謂ゆる合理的社會主義乃至實驗的社會主義思想は、それ自體社會的必然の所産であり、單に「空想的」といふことよりして何等非難に値すべきものではない。その後についた科學的社會主義の立場よりせる批判によつて、われわれはその正しき歴史的意義を理解しうるのである。「眞實の社會主義的及び共產主義的諸體系、即ちサン・シモン、フーリエ、オウエンの體系は、すでに吾々が記述した所の無産階級と有産階級との鬭争の未發達なる第一期に現はれたものである」。

「これ等の體系の發明者は、階級の對立、並に現代社會それ自體における崩壞的要素の活動を見るには見た。しかし乍ら彼らは無産階級の立場において、その歴史的自己活動、彼に固有なる政治的運動を認めて居ない」

「階級對立の發展は工業の發展とその步調を共にするものであるから、彼等はまだ無産階級解放の物質的條件には直面して居ない。それ故に彼等はこの條件を構成するために社會科學、社會的法則を探し求めたのである」

「社會主義者及び共產主義者は無産階級の理論家である。無産者がそれ自身を階級として構成する程に、従つてまた資本家と無産者との鬭争が政治的性質を有つ程に、充分に發展しない間は、また生産力が資本家の胎内において充分に發展せず、無産者の解放及び新しき社會の構成のために必要不可欠なる物質的諸條件が現はれない間は、これ等の理論家は被壓迫階級の欲望を救済するために組織を考案し、改造の新科學を探し求める空想家である。（中略）彼等が科學を探し求め、組織のみを考案して居る限り、また彼等が鬭争の初期に住んでゐた限り、彼等は貧困の中にただ貧困を認めただけである。そして古き社會を崩壞せしめるであらうところの革命的方面を、その貧困の中に認めないのである」。

従つてロバート・オウエンは、彼がその時代において「自分の解決し得る問題のみを問題として提起し」、その解決のために全生涯を傾倒したのであるが「一つの社會構成は、そこに發展する餘地あるすべての生産諸力が發展してゐない内に破滅することは決してなく」、個人としての偉大さも活動もその高き理想を實現し得ず、歴史的埒内に制約せられざるを得なかつたところの歴史的な存在であつた。

勞働組合及びチャーチスト運動 産業革命後イギリスの勞働者の陥つた悲惨なる状態は、

一八二五年に始つた恐慌によつて殊に堪へ難いものとなつた。その地位の低下と機械への隷屬と生活の窮乏とは最早單なる職工組合では、その窮状より脱出し得られるものでないことが氣づかれた。そして賃銀労働者は全國的團體に結合することを理想とし、一八二九年かかる組合は織物工及び建築工によつて企てられた。それも同年マンチェスター附近における六ヶ月に亘る慘澹たる同盟罷業の後、地方組合の不利を痛感し、ジョン・ドハアティを盟主としてランカシャーの紡績工が組織したもので、「合同王國一般大組合」と稱した。一八三〇年には更に二十個の職業團體が参加し「全國労働者保護協會」を結成し、一時十萬の會員を擁したが二年にして壊滅した。次で三三年に建築工組合は全國的團結を企て、これを破壊せんとする雇主と激烈なる闘争をつづけたが、これはロバート・オウエンの影響は大なるものであつた。しかし間もなくリバプール及びマンチェスターの大罷業の後に崩壊してしまつた。しかし更にオウエンの計畫によつて組織された一八三四年の「全國合同労働組合」は多數の職工組合、労働者クラブ、婦人労働者等を包擁し、七十萬餘の組合員を有し全國に亘り活動し、罷業も頻發したので狼狽した資本家階級は政府と共に苛酷な

る彈壓を加へた。同組合員は他の五大組合と聯合して反政府運動を起しロンドンで一大示威運動を行つたがその際における参加者は十萬と稱せられ、イギリス最初の労働者の示威運動であると云はれたが、引き続き彈壓とストライキの敗北のために、僅かの組合を残して四分五裂してしまつた。

チャーチスト運動 これより先き労働者は議會に代表者を送ることにより、自らの状態を改善し得ると考へ、議會改革、選挙資格改正に関する工業ブルジョアジの闘争に加はり、一八三二年に議會改革を一應成就せしめたが、それはブルジョアジの廣汎なる層にのみ代議士の扉が開かれたに過ぎなかつた。もちろん労働者の屢々起した同盟罷業及び組合運動により三十年代より労働保護のための工場法の基礎が出来、工場監督の制度が設けられ、児童及び未成年者の夜業が廢止され、晝間の労働も少年は八時間、未成年者は十二時間に制限された。しかし屢々繰返される恐慌によつて労働者の状態は益々悪化するのみで失業と飢餓とは事實街頭に溢れた。一八三六年ロンドンに「ロンドン労働者協會」が結成され首領はオウエンの門下生の一人ラヴェットであり、目的は「凡ゆる法律上の手段を

用ひて社會の全ての階級のために權利を獲得すること」にあるとし、法律上の手段とは、議會に提出する請願書及び労働者間における宣傳とした。一八三七年ロンドンの労働者は請願書——「人民憲章」 Charter の採擇を議會に要求する決議をし、對議會運動を開始したが、勿ち全イギリスが此の運動に捲き込まれた。ラヴェットの要求した請願書は次の六ヶ條の基本條項を含む。(一)一切の成年男子に對する普通選舉權、(二)各選舉人が同時に被選舉人であり得るために財産資格の撤廢、(三)均等な代表制を保證する爲に選舉區の平等、(四)ブルジョア側の買収と脅迫を防ぐための選舉の無記名投票、(五)議會の毎年の改選、(六)議員に對する俸給の支給(それなくしては労働者は議會に参加し得ない)。

エンゲルスは云ふ、「このプロレタリアートの提案にかゝる法律は人民の憲章であり形式から云へば純然たる政治的のものであつて下院に對して民主的立場を要求したものである。チャーチズムはブルジョア側に對する反抗の結晶體である。組合や罷業に於ては、反抗は常に個々に止まり、個々のブルジョアと戦つたものは個々の労働者乃至個々の勞

働者の團體であつた。(中略)チャーチズムに於ては、ブルジョア側に反抗し、就中ブルジョア階級を取り巻く法律の城壁を攻撃するものは全労働者階級であつた」(マル・エン全集改造社版、第三卷、二四六頁)。

チャーチズムの思想 チャーチズムは思想的には一面に中産階級思想としてのラディカリズムの系統を引いてゐた他面には、オウエニズムの系統を引いてゐたが、しかしその何れでもない労働階級の思想を以つて基調としてゐた。普選を要求したのは單に參政權の獲得が目的ではなく、議會によつて政權を掌握し、平等の權利と義務の實現、あらゆる階級の撤廢が目的であつた。もちろんラヴェット、ヘザリントン、クレイヴ、ワトソン、オブレイエン等何れもオウエンの門弟であつたが、オウエン式中産階級的ユートピアを越えて階級思想が基調を爲してゐたのである。しかし闘争の現實においては「出來得べくんば平和の裡に、止むを得ずんば強力に依つて」*Peasably if we may, forcibly if we must.* をモットウとしてゐた。

運動は一八三六年より九年までは準備・宣傳の時期、四二年までは運動の最高潮、四三

年以後衰退期に入り一八五八年に消滅したのであるが、一八三九年二月のロンドンにおける人民議會の開催によつて運動の高潮へ向つた。同時に政府の壓迫と逮捕も激しくなり、労働者も暴動化しブルジョアジーの邸宅の破壊、焼き拂ひが行はれ、フロストを中心とした炭坑夫數千人の襲撃事件もあり、従つて投獄と死刑が宣せられた。三十九年から四十年にチャーチストの指導者がイングランドで三百八十人、ウェールズで六十二人、其他合計四百四十二人の逮捕者を出し、中心的指導者悉く下獄して運動は一時鎮壓された。四十年以後は組織の必要を痛感し、ナショナル・チャーター・アソシエーションといふ團體を結成し、大請願書を提出することとし、四十二年には會員五萬、署名者三百萬人に及んだ。出獄後の指導者オツコンナアは煽動家として、ラヴェットは教育運動家として、兩者の意見は對立したが、四十二年五月に至つて三百三十一萬五千七百五十二人の署名を連ねた大請願書は、巻物六哩の長さでこれを三十人が擔いで幾千の黨員の示威運動を伴ひつつ議會に運び込まれた。議會では四十九票對二百八十七票にて請願書は否決されたので再び労働者の同盟罷業が行はれるに至つた。都市は罷業労働者の掠奪、放火、破壊の擾亂の巷、ラ

ンカシャア、マンチエスター、バーミンガム等の工場の蒸氣機關は冷却し、熔鑛爐の火は消え、炭坑は荒廢した。しかし労働組合の組織と連絡が薄弱のため罷業も不成功に終り、その後、擾亂も鎮壓され、四四年よりの好景氣は各般の事業の擴張、鐵道の敷設、炭坑の開発によつて失業者は減じ、労働賃銀は増進し、工場状態も漸次改善したので階級闘争も緩和されて行つた。

チャーチズム批判 その後五六年間はオツコンナアがチャーチスト運動の指導者として、機關紙「ノーザン・スター」に據り、新にトーマス・クーパーやアーネスト・ジョーンズが協力し、衰退しかけた運動の挽回に努めた。一八四八年にはマルクスとエンゲルスの「マニフェスト」も宣布され、フランスには二月革命も起つたので、直接關係はなくともチャーチスト運動は活氣を呈し、集會と示威運動が全国に行はれ、人民議會が召集され、ウエストミンスター議事堂へ示威運動を爲し、請願が容れられるまで人民議會を解散せぬと決議し、運動は、革命的色彩を帯びて來た。ウエリントン公は十七萬人の警官を以て市内を警戒し、要所に軍隊を派した。四月の請願書は三臺の馬車を以て運ばれたが署名は百九十七

萬五千四百六十九人に過ぎず、十五ヶ月の後十七對二百二十二で葬り去られ、一八五八年には運動も衰退枯死の状態に陥つた。しかし之に代つて暴風雨的運動は平和的労働組合運動となり、合同機械工組合、綿糸紡績組合、指物師組合等次々に起り、新しく協同組合が勃興し、英國労働運動の特徴としての組合運動の時代に入つた。ローザ・ルクセンブルグが述べたやうに社會平和が必要となり、企業家側の戦略に變化を生ぜしめた。即ち労働者との闘争は、力の問題より協議、一致、讓歩といふ商取引の對象となつた。労働運動にもこれが亦重要な變化を起し、二十年代から四十年代の様な政治的、社會主義的、闘争的氣風は消えて社會主義的闘争の代りに、現制度の上に立つて出来るだけ有利な労働條件を得るといふだけが目的となつたのである。(「改良主義論」一七三頁——一七六頁)

ではチャーチスト運動は全然失敗の歴史を残したのであらうか。一應は失敗であつたことを承認せねばならぬが、その後數年ならずして自由黨政府もチャーチストの取上げた問題を取扱ひ、グラッドストーンも、保守黨のディズレーリさまへも選挙權の擴張の必要を認めためたのである。一八八四年の法律によつて、獨立の生計を基礎とする普通選挙が行はれ、

一九一七年には成年男子の普選權、婦人の選挙權の容認となつたのであるから、チャーチストの要望は漸次實現したものと見てよいであらう。尙ほ、労働者の意識的闘争への教育、宣傳といふ點におけるチャーチスト運動の意義が認められてゐるが、組織が不備であり、思想、目的が不統一で明確を缺いたといふ點においてこの運動は缺陷を暴露したものであると言へよう。

労働者運動の歴史的傾向 労働者運動の歴史に關する詳述は到底ここに不可能であるがその歴史的傾向につきエンゲルスは「イギリスにおける労働者階級の狀態」の中に明確な叙述を爲してゐる。曰く「ブルジョアジーに對する労働者の反抗は、産業的發展の後、間もなく開始され、種々の局面を經過した。」(中略)「この反抗の最初にして、最も粗野な且つ最も効果の擧らない形式は犯罪であつた。労働者は貧困と缺乏の裡に生活し而して他人々は彼よりも安樂に暮してゐるのを目撃した。富裕な怠惰者よりも社會に多く貢獻をなしてゐる労働者が何故かかる境遇のために苦しまねばならぬかと云ふことが理解出来なかつた。のみならず、貧困は財産に對する傳統尊敬を征服した——彼は窃盜を働らいた。

吾々は工業の發展に伴つて犯罪が増加し、拘留者の年々の數が消費さるる木綿の相の數と一定の比率を保つてゐるのを見た。

併し労働者は間もなくこの手段が何等の效果もないことを覺つた。犯罪は單に個々のみに、單に個人として、その窃盜によつて社會秩序に對する反抗をしたに過ぎない。社會の凡ての力は、凡ゆる個人に向けられ、驚くべき優越力を以て彼等を壓迫した。且また窃盜は反抗の最も無智な、最も無自覺な形式であつたし、従つて假令労働者がそれを暗黙の中に是認してゐたとしても、彼等の輿論の一般的表現ではなかつたのである。労働者階級が最初にブルジョアジーに反抗したのは機械の採用に對してであつて、それは産業運動の當初に起つたことである。最初の發明家アークライト其他はこの方法で迫害され、その機械は破壊された。その後機械に對する多くの暴動が勃發した。その狀況は一八四四年のボヘミアに於ける印刷工の騷擾と殆んど同一であつた、工場は破壊され、機械は粉碎された。反抗の形式も單に個々のためであり、一定の地方に局限され、現在の狀態の單なる一方面のみに向けられたに過ぎなかつた。(マル・エン全集、改造社版、二三三頁——二三四頁)然るに勞

働者の間には次第に團結の氣運が動いて來たと同時に一八二四年に労働者が自由團結權を獲得したので、労働者の同盟は迅速にイギリス全土に擴がつて有力なものとなつた。凡ての労働部門に於て労働者をブルジョアジーに對して擁護するといふ公然の意圖を有する組合、労働組合が組織された。「その目的とするところは賃銀を確定し、全體的な力として雇主に交渉すること、賃銀を雇主の利潤に應じて規整すること、機械があればその引上げを行ふこと、到る所の各種手工業に於て同一程度の賃銀を維持すること等であつた。」(同上、二三五頁)。かくて賃銀の團體交渉が初まるとともに、その手段として同盟罷業が行はるるに至つて第三の形態に入る。

かくの如く労働者が團結することは、それによつて相互の競争を廢除せんとする最初の試みであつたところに意義あるが、しかし、ブルジョア階級間の競争は、商業恐慌を惹起し、労働者に苦痛を與へることよりして、彼らは、競争の一部分でなしに競争一般を廢除することの必要なることを認識した。かくて労働者は「市民社會の原理そのもの」に對して敵對的態度を採らざるを得なくなり、鬭争領域は從來の經濟的部面のみでなく政治的部

面に移るに至つた。エンゲルスは前述の如く、その萌芽をチャーチスト運動の中に認め、チャーチズムはブルジョア階級に對する反抗の結晶體であるとし、全労働者階級がブルジョア階級に對して戦ふもの、しかもブルジョア階級の政治的權力を彼らがその周圍に築いてゐる法律の城壁を攻撃すると爲したのである。

即ちこの労働者階級の運動及びその發展の段階を要約すれば、第一段階は組織形態は一工場的・地方的であり、その闘争形態は破壊的であり消極的である。而して意識形態は職業意識を脱してゐない。第二段階は組織形態は全國的となり産業的であり、闘争形態は主として労働條件の維持改善、賃銀値上げ等の經濟的のものであり、その要求は何れも資本主義組織の埒内に於て容られるところの一面的、部分的のものであるのを特徴とする。而して意識形態は階級感情とも言ふべきもので階級意識が明確にされてゐるわけではない。第三段階は組織形態は階級的・世界的であり、闘争形態は政治的であつて、第二段階より第三段階への發展過程において機關として独自の政黨——無産階級政黨が發展する。そして此の要求は積極的・全體的解放を目標とし、意識形態は明らかに階級意識を有つに至る。

第二章 アメリカ

第一節 北アメリカ合衆國の建國

十八世紀初葉におけるイギリスのアメリカ植民地 イギリスの潑刺たる商業資本主義が十七世紀のはじめから大西洋を越えて世界の各地に市場の獲得に乗出したとき、すでにアメリカ沿岸の目星しい地方はすべて占領しつくされて居つた。メキシコ灣の全沿岸と中部アメリカの全部および南アメリカの大部分はスペインとポルトガルの手に歸して居り、北アメリカの沿岸も多くはフランス、スウェーデンが先取してゐたので、イギリスは北アメリカの未占領の沿岸に足を下ろしても、その發展のためには西と南と北の三方を繞ぐる他國の領土を押しつけて進まねばならなかつた。イギリスのアメリカ植民史はかくて絶えざる戦争を以て開始された。

最初の植民者はイギリス本國の政治的或は宗教的被壓迫者であり、彼らは自由の天地を求めて北アメリカに來り、そこで溫和な氣候、廣漠たる草原、斧鉞を知らぬ處女林、舟航に便利な河川、水量の豊かなミシシッピやセントローレンス等の河川及び北部の多くの湖水を發見した。そして、そこには半遊牧民インデアンが先住してゐた。イギリス人は、キリスト教文化を彼等にも普及させるといふ「平和な方法」で植民を開始したと言はれてゐる。しかし、ポクロフスキーによれば「土着民族に對するイギリスの撲滅策がスペインの政策と異なるのは、ただそれが部分的に行はれて二世紀に亘つたことと、清教徒的な偽善を伴つたことだけである。宗教上や政治上の迫害からヨーロッパを逃れてきた移民たちは、アメリカでは、彼等自身が故郷で受けたのと丁度同じ慘酷さを以て、インデアンを迫害したのである」。(「アメリカにおける資本主義の發達」、廣島定吉氏譯、一四頁)。

インデアンの住む新しい世界への開拓は、はじめ探險隊が組織されたが、これは主として裕福な企業家や商事會社によつて敢行され、一六〇七年にはかかる商事會社の一つの得た廣大な地域には、一生處女で終つたエリザヴェス女王を記念するために、ヴァージニア

即ち處女といふ名前をつけた。一六二〇年にはヘッツ將軍はカロライナを貰ひ受け、バルチモア卿は一六三二年メーリーランドを獲得し、一六六四年ヨークスキーク公はニューアムステルダムの地域をオランダより奪取してニュー・ヨークと名づけ、一六八二年資本家ベンはペンシルヴァニア地方を獲得した。従つて北アメリカ植民地の最初の主人公たりし者は既に裕福な地主であつた。彼等は何れもイギリス名門貴族と非常に近い親族關係にあつた人々であり、やがてはアメリカの地主貴族やアメリカ上流階級の紳士の前身となつたものである。

彼等は廣大な土地の開墾のために本國に向つて盛んに移住者を勧誘した、すべての職人——鍛冶屋、大工、桶屋、船大工、指物師、庭師、酒釀造家、養禽家、漁夫、石屋、鯉屋、金物屋、農夫、織工、靴屋、樵夫、紡績工、その他男女の勞働者等、新土地開拓のために必要な人々を誘惑的言辭を以て呼び寄せた。勿論アメリカが直ちに「自由の天地」でなかつたことは言ふまでもなかつたが、續いて自由移民の増加と共に植民地は着々と發展し始めた。商業企業はインデアンに焼酎を賣りつけ、毛皮と交換し、或は糖蜜、ラム酒、ニ

グローの賣買密輸等々で大膽な、活氣に満ちたブルジョアジーが出現した。同時に手工業プロレタリアートも農業プロレタリアートも發生し、階級對立は決して鋭いものではなかつたが、それでも全權力を握つてゐた商人や、裕福な製造業者や、金貨に對する反感は處處で暴動や蜂起となつて爆發したのである。従つて「自由の天地」にもその初期から僅かながら階級的特徴があり、歴史が進展すると共にそれは明確にされて行つたのである。何れにせよ、自然的富源を利用し、農業や商業が發展し、相互に獨立した若干の植民がつくられた。ニューヨーク、マサチュセツツ、ヴァージニア、ペンシルヴァニア、南北のカロリナ、ジョルジャ等はその主なるものである。

十八世紀中葉までは、北アメリカ各植民地間の連絡はただ海岸傳ひに辛うじて行はれ、各植民地はロンドンと直接往來し、ロンドンには植民地を統治する皇帝直屬の特別會議があり、各植民地は自分の利益を擁護するために、ロンドンに全權委員を派遣してゐたのである。そして一七五〇年ごろ、植民地人口は百五十萬に達し、イギリス政府も、最初のうちは、これら植民地の内政問題には殆んど干渉しなかつた。ただ政府の任命した總督が統

治してはゐたが、總督の權力は國民代表の意見によつて制限されてゐたのである。

アメリカ植民地の相互の接近

各植民地の人口は當時の計算によると毎二十年目毎に倍加したと言ふほどであるが、地域の擴大と共にインディアンと衝突し、フランス植民地人と戦ひ、これによつてイギリス植民地相互の接近は促進されて行つた。インディアンに對する清教徒的偽善を伴つた撲滅策は、絶えずインディアンの猛烈な反撃に遇ひ、農民の捕虜、殺害、頭皮の剥ぎ取り等は繰返されたし、インディアンの背後にはフランス及びスペインの援助、武器の供給があつた。イギリス本國の正規兵だけでは植民者たちは對抗することが出來ず、進んで自らの國民兵の建設を必要とした。農夫は同時に軍人となり、片手に鋤、片手に小銃を持ち、植民地自身が一つの軍事勢力となつた。對インディアン、對フランス人の戦ひで自然と經驗のある勇敢なる指導者を輩出せしめた。ジョージ・ワシントンもその植民者の息子であり、奴隸所有者であり、土地の仲買人であり、勇敢なる植民地農民兵の指導者であつた。かくて十八世紀中葉において現在の合衆國の東岸一帯の地方には、十三州の植民地ニューハンプシャー、バーモント、マサチュウセツツ、コネチカット、ロ

ードアイランド、ニュージシアシー、デラウェア、ペンシルヴァニア、メリーランド、ヴァージニア、北カロライナ、南カロライナ、ジョルジア——が作られ、人口も一七一四年に三十七萬六千人程のものが一七五六年において百三十萬人餘に達してゐた。

イギリス重商政策との衝突 はじめ植民地人はイギリスとの分離獨立などといふ思想は有して居らなかつたことと言ふまでもなかつた。殊に支配的階級は、十八世紀を通じて自ら皇帝の忠良なる臣民と考へてゐたが、しかし植民地が一つの勢力となると共に、イギリス政府の植民政策——その理論的表現は重商主義制度であるが——は、自己の發展への最大の桎梏と化した。産業革命を過程しつつあつたイギリス産業資本主義は、植民地より安價な原料品を本國に供給し、本國の既成品を賣出すことを必要とした。これはイギリスのブルジョアジーの資本蓄積のための必然的な有利な政策であつたことと言ふまでもない。イギリスの政權を握つてゐたトーリー黨は植民地をイギリス支配階級の世襲財産と見做し、自らの利益のためには植民地産業の發達を阻害しても顧みなかつた。(一) 植民地は母國イギリスに對して母國に生産せられぬ貨物のみ供給せねばならぬ、(二) 植民地は母國の

競争者たる他の競争者を富ませるとか、または植民地に工業を起して母國の工業と競争することを禁止する、(三) 植民地は母國の政治および陸海軍の費用を負担せねばならぬ、とされた。従つて植民地は必要な商品を母國からのみ、イギリス船を通じてのみ輸入せねばならず、アメリカの鐵は鑄鐵か條鐵として輸出することが出来ただけで、既成品として輸出することは出来なかつた。植民地では製鐵所や鑄鐵工場を設立することも出来ず、鑄鐵工場や鋼鐵工場を建てることも絶対に禁止された。植民地では帽子一つ、釘一本でも製造し得ず、甘蔗を栽培し、糖液は採取し得ても砂糖を精製することは禁じられた。

かくて商人の九割九分までは密賣買の生活をした。移民たちは租税の支拂を拒絶し、官吏を放逐し、イギリス商品のボイコットを敢行した。その上、一七五六年七年戦争の終結と共に武備を植民地もフランスに備へる必要はなく、茲にイギリスより分離する遠因を生じた。イギリスは七年戦争のために財政窮乏し植民地に輸入する茶、紙、ガラス、銅、繪具等に課税せんとして植民地人の反對を招き、茶以外の課税は撤去したが、一七七三年ボストンで、イギリス産でない茶に課した關税に憤慨した移住民は、イギリス茶のボイコット

トを宣し、十二月十六日夜陰に乗じて九十餘人の青年は、インデアンに扮装し、イギリス所屬東印度會社の茶船三艘に侵入し、搭載せる茶箱三百四十二個を海中に投じた。イギリス政府は直ちにポストン^の封鎖を命じ、ヴァージニア國會は之に對して抗議書を發した。これを機會として北部の商人や製造家と南部の奴隸使用せる植民地地主とは提携することになった。

南部の主要な問題は奴隸賣買の問題であつた。奴隸貿易は一七一三年にアンナ女王の特權なりとまで宣言され、王政の最も利益ある商賣であつたが、イギリス船による奴隸の輸入はアメリカの船主やヴァージニアの植民者の利益を侵害した。ヴァージニアでは他の植民地に賣るために自ら奴隸を飼育してゐたのであるが、イギリス政府の奨励したニグロの輸入は、奴隸の値段を引下げ、ヴァージニアの損害を結果した。「このやうに、アメリカの植民地とイギリス本國との不和の源となつたものは、經濟的原因であつた。しかし、反英煽動の正面に現はれたものは、政治上およびイデオロギー上の動機であつた」(ボク
ロフスキー、前掲、二五頁—二六頁)

獨立宣言

ポストン港封鎖と共に植民地人民は一七七四年九月第一回大陸大會をファイラデルフィアに開きジョルジア州外十二州の代表者五十三名出席して善後策を講じ、イギリス本國との通商を中止した。翌年には市民軍はイギリス軍と衝突したので開戦は必至となつた。五月に第二回大陸大會を開き、獨立開戦を決し、植民地政府組織を改新し、ワシントン^を總督として聯邦軍隊を組織し、ジェツフアソンは、獨立はアメリカのブルジョアジーが、アメリカの植民地における私有財産を守るために當然採らざるを得ぬ唯一の手段であることをイギリス政府に通告した。そして密使をヨーロッパ諸國に派遣して其の援助を乞ひ、一七七六年七月四日、獨立宣言書を天下に公にし、永久に本國より分離して十三の植民地が各完全なる主權を有する獨立國たるべきことを宣言した。宣言原案はジェツフアソンが起草し、アダムス及びフランクリン等の修正添削を経たるものである。

「(一) 人類は總て其出生に於ては平等であること (二) 總ての人類は天賦の不可讓の權利を有すること (三) 生命自由及び幸福の追求は此の種の權利中に屬すること (四) 政府は人類の此等の權利を確保するが爲に組織せらるるものであること (五) 政府の正當なる

権力は唯其の被治者の同意に依つてのみ成立するものであること（六）政府にして若し此等の目的に反するならば人民は其の政府を倒し若くは變更して最も能く其の安全と幸福とに適すべき所なる政府を組織する権利を有すること、而してこれ等は總て自明の眞理であること」（美濃部達吉氏「米國憲法の由來及特質」五頁—六頁）。「ここで政府は被治者たる人民の同意に基いてのみ正當の存在を有するものであるとし、悪政府は人民が之を倒すの権利あるものとし、所謂革命權を認めてゐるのは、固より英本國に對する獨立運動の正當なることを主張するが爲にしたるものではあるが、決して單なる口實ではなく、疑ひもなく當時の人々の確固たる信念から出たもので（中略）ある。その思想は敢て獨立宣言に依つて始めて發表せられたものではなく、米國殖民地の最初より常に抱かれて居た所の思想である」（美濃部氏同上、六頁）。かくて、一七七七年殖民地十三州は永久合衆國として結合すべきことを誓ひ、同年六月その國旗を制定した。

これより一七八三年まで續いた獨立戰爭が開始されたのであるが、彼らは、にわか作りの兵隊を用ひて訓練のある戰爭に慣れたイギリス軍を防禦せねばならなかつたので極度の

困難を感じた。指揮官の多くはブルジョアジイで、裕富な植民者や造船業者や西ヨーロッパの商人から募集され、軍隊は農民によつて構成されてゐた。「軍艦を持たなかつたことは、植民地の最大の弱點であつた。戰爭の晩年になつて、巡洋艦型の快走船を持つやうになつたが、この快走船もイギリスのフリゲト艦にはかなはなかつた。もしフランス艦隊の援助がなかつたら、戰爭はもつと長引いたであらう。アメリカのブルジョアジイは先へ行けば行くほど、戦時中のすべての負擔を全部農民に背負はせようとするやうになつた。各植民地——既に州と稱してゐた——は軍事費を少しも喜んで出さうとせず、紙幣は濫發され、勞働者の状態は悪化した。ワシントンは、飢ゑや給料不拂などのために、自分の軍隊内に起つた暴動をたびたび静めねばならなかつた」（ボクロフスキー、前掲書、三二頁）。戰爭は徐々に進展しなかつたが、外交關係は植民地に有利であつた。アメリカのブルジョアジイの最も優れた活動家の一人フランクリンはフランスに派遣され、フランスでは一般社會から支持を受けた。貴族ラファイエットはアメリカ軍に加つて戰功を立て、フランス將校連も志願兵となつてアメリカの軍隊に加つた。プロシアのストイベン及びポーランドの

コシューシコ等志士軍人の武装して支援に来るものが多く、フランス政府も一七七八年二月、公然とその獨立を認めて同盟し、艦隊を派遣してイギリスに宣戦した。スペインおよびオランダも之に加入し軍資金や將卒を送つて援助した。

植民地軍隊は軍事技術を直接戦場で學びつつ意氣を示し、優秀な指揮者も出来るやうになり、經驗も積まれ、指揮者は人望を得てきた。特にワシントンの軍隊指揮統轄は宜しきを得、一七八一年、イギリス軍のコンウォーリス將軍をヨークタウンに降服せしめて以來、軍氣旺盛となり各地にイギリス軍を撃破することが出来た。ロシアの女帝カタリナ二世は列國と武装中立同盟を提議し、スウェーデン、プロシア、オーストリア、ポルトガル、スペイン等之に参加し、合衆國の獨立を承認したので、イギリスも戰意を失ふに至つた。かくて一七八三年九月三日ベルサイユに於て平和會議を開き關係諸國の間に和議を締結し、イギリスは合衆國の獨立を承認し、兩國の國境を確定したが、北アメリカでイギリスの手に残つたものはカナダだけであつた。獨立戰爭は合衆國の輝かしい勝利を以て終りを告げた。

獨立戰爭の對外的及び對内的意義

アメリカの歴史家たちはこの獨立戰爭を、南北戰爭（一八六一年から一八六五年の間の内亂的戰爭）と區別して革命と稱してゐるが、しかし果して如何なる意味で革命と稱し得るであらうか。レーニンは書いてゐる。「近代の文明國アメリカの歴史は、あの偉大な、眞に解放的な、眞に革命的な戰爭の一つを以て始まつてゐるが、この戰爭も國民の大多數の間では、横取した土地や、盗んだ利潤の分配が元で、地主や資本家の間に行はれる摺み合から起つた掠奪戰爭であつた。これは、今日尙ほこれらの文明吸血鬼が、印度で、エジプトで、世界のあらゆる隅々で、數千萬の人々を壓迫し、植民地奴隸となしてゐるやうに、アメリカを壓迫し、植民地奴隸の地位に置いた強盜イギリス人に對するアメリカ國民の戰爭であつた」（「アメリカ労働者に與ふる手紙」一九一八年、ポクロフスキー、三六頁）。またマルクスは「資本論」第一卷序文の中で、十九世紀のアメリカ南北戰爭はヨーロッパ労働者階級に對する警鐘となつたこと、そして「十八世紀のアメリカ獨立戰爭は、ヨーロッパの中等階級に對する警鐘であつた」ことを書いてゐる。ポクロフスキーは「アメリカの農民と労働者とは、この獨立戰爭において、君主國政府か

ら彼等自身を解放するために戦ひ、共和制の理想のために戦つたのであつた」と言ひ、また「合衆國の宣言書は、ブルジョア民主主義的自由の原則、市民平等の原則、封建的特權の廢止等々を宣言した。アメリカの革命はヨーロッパにおけるブルジョア革命の警鐘であつた。(中略)この獨立戦争の経験は、後のフランスの革命戦争に少からず貢獻した、そして、イギリス政府の敗北は、支配的地主貴族には打撃であつた」(上掲、三七頁)と述べ、何れも獨立戦争の深き意義を高調してゐるのである。

更に合衆國社會自身の内部關係において考察すべき重要な問題が存在するのである。即ち、既にボクロフスキーが鋭く指摘してゐる所であるが、この解放的な獨立戦争によつて、合衆國内部における階級關係は何ら變化せられなかつたことである。北部の商人・製造家、中部の農民、南部の地主等は同一行動を執つて戦つたけれど、農民の社會的地位に特別な變化はなく、北部と中部における商工業ブルジョアジーの對内的權力は依然として強固であり、南部の地主貴族の支配も、植民地大土地所有關係も牢固として從來のままであつた。従つて自由の土地アメリカ合衆國においても、當時から、たとひ尖鋭な形態を

採つてゐなくとも、階級的な對立が存在してゐなかつたとは言へないのである。既に述べたやうに農民たちは戦争の繼續中、屢々ブルジョアジーの處置に不満を表明し、飢餓や給料不拂ひのためにワシントンの軍隊内で反亂を惹き起しさへしたのである。七ヶ年の戦争を戦つた後に、失業者は出で、農民は飢ゑ、生きて行くためには都市の高利貸から借金しなければならなかつた。貨幣制度は破壊され、物價は紙幣價值の下落に相應じて騰貴したのである。かくてイギリスの武力をアメリカの海岸より放逐すると共に、合衆國內には新に階級對立が實際に展開し始めてゐたのであつた。

第二節 アメリカ憲法の特質

憲法制定への過程 一七七六年に十三州の植民地がイギリスより分離することを決して獨立宣言を發し、戦争を開始した翌年即ち一七七七年に十三州は互に聯合規約を締結した。これによつて十三州の法律上の聯合が成立したわけでありアメリカ合衆國 United States of America と云ふ名稱はこの條約によつて始めて認められたのであつた。

しかし乍らこれは今日の合衆國の如く全體が一國として完全に統制されたものではなく、十三ヶ國は殆んど自治的國家を成し、徒らに散漫たる聯邦を組織したに過ぎなかつた。従つてその間に統轄なく、財政を整理し、貿易を保護し、海陸軍を監督するの方途も存在せず、同盟の機關としてはただ聯合會議があるばかりで其の他には行政機關もなければ裁判所もない有様であつた。各州は法律上一應は聯合會議の決議に拘束せられるわけであるが、若し何等かの理由を以て各州が之に従はなければ、聯合會議は之を強制すべき手段は全然無い。しかも戦争繼續中、戦費の不足について、之を直接人民に課税することは全く出来ず、ただ各州からの分擔金に依つて支辨するだけであつたから、費の徴收は甚だしく困難であつた。

殊に戦争による經濟的疲弊のため、勤勞階級の不滿に對し、聯邦の經濟的負債を權力によつて農民より取立てることは困難であつたが、止むを得ずしてかかる處置もせざるを得なかつた。しかしかかる試みは反亂や武裝的衝突を招いたものである。

ダニエル・シアアスの一揆と新憲法 一七八六年、マサチュセッツ州内では、獨立戰

争の功勞者グニエル・シアアスは武裝農民を率ひて二三の都市を占領した。到る處で借用證書や抵當證書が焼き棄てられ、一揆農民は、富の一切の特權を憲法上廢止し、勞働者の生活状態を改善することを要求した。この暴動によつて聯邦憲法を制定する必要を痛感し、一七八七年フィラデルフィアに聯邦會議を開き、ワシントンを議長とし議事に取りかかつたがこれが今日の合衆國憲法を作つた有名なる憲法會議である。五十五人の代表者のうちハミルトン、ジョンソン、マヂソン、ウィルソン、フランクリン等も参加したが、獨立宣言の起草者ジェツファアソンは當時フランスに赴いて居て出席し得なかつた。討議の後、ランドルフの意見を採用し、修正を加へて新憲法を制定することが出來た。討議のこれによつてアメリカ政治組織の根本は確立されたのであるが、各州は任意の憲法を定め、政府および議會を設けて州内の行政を掌り、別に中央政府を組織し各州を總監する。特質は嚴格なる行政、立法、司法の三權分立主義を採用したることである。

一、行政部は大統領によつて總監され、其下に副大統領があり、任期は共に四年にして複選舉法によつてこれを選挙する。大統領は自ら國政の責任を擔當し、權限は重且大で、

政府の官吏を任免し海陸軍の總督を兼ねて兵政の大權を一身に集める。副大統領は大統領に事故があつて空席の場合に之に代る。

二、立法部は聯邦議會で、二院制を採る。元老院と代議院とより成る。元老院は各州より選出する二名宛の議員を以て組織し、任期は六ヶ年にして二ヶ年毎に全員の三分の一宛改選し、副大統領が議長となる。代議院は各州一定の資格を有する人により人口に比例して議員を選出する。即ち人口三萬人につき一人の割合にて全州より選出したる代議士を以て組織し、人員は元老院の如く一定してゐない。兩院共に毎年十二月第一月曜日を以て開院し、各種の法令を規定する權力を有するが、この場合大統領の承認を要す。聯邦議會は二年を以て一期としてゐる。

三、司法部は高等法院（最高裁判所）によりて一切の事務を處理せらるる。院長は終身官にして大統領によりて任命せられ、議會の決議と各州政府の決議とが衝突したる場合に、その事項に對して裁決を與ふる大權を有する。（謂ゆる司法權の優越は三權分立主義と硬性成文憲法を有する政治組織の下に生れたるアメリカ憲政の一大特色である）。

この新憲法に基き、一七八九年第一回の議會をニューヨークに開き、ワシントンに其の大統領に選舉し一七九一年都をワシントンに定め、ここに民主々義の新國家が樹立せられたのである。

アメリカ憲法の特質 アメリカ憲法の特質としては一般に、世界史上に始めて完全なる民主的の民族國家を現出せしめたとされる點に求めるのである。ことに「アメリカ獨立によつて實現せられた新なる政治上の思想で後の諸國の憲法に著しい影響を與へたものは、

(一) 國民主權主義、(二) 自由平等主義、(三) 權力分立主義、(四) 成文憲法主義の四を擧ぐることが出来る。此の外聯邦制度も亦、アメリカ憲法に依つて始めて歴史上に見られたものである」（美濃部達吉氏「日本憲法」、三五九頁）。しかも博士の述べられる如くこれが必ずしも理想に基いたのではなく、ただ十三州が各々獨立の歴史を有つて發達したもので、完全にこれを統一することが不可能であるため、實際の必要上已むを得ず作られたものであるところに意義があるとせねばならぬ。かかる政治組織は十九世紀、二十世紀に入つて後も、他の多くの諸國の倣ふところとなつたことは歴史上の事實が示すところである。

ブルジョア民主主義憲法たる理由　しかし、アメリカ憲法は嚴密なる意味においてはブルジョア民主主義に則つたもので、成立當時すでに下層の反亂者の意志に反して新しい條項で飾られたのであつた。農民たちは北部諸州のブルジョアジーを以て、涙のない債權者の住む城砦と考へてゐた。ボクロフスキーによれば、合衆國の憲法の父ジェツファーンソンは大地主で、數百のニグローを所有してゐたが、しかし、全市民の平等だの、アメリカにおける民主主義の勝利などといふ麗はしい言葉を使つてゐたのである。(ボクロフスキー、前掲書、四一頁)。

「憲法制定にはイギリスの政治制度の原則が基礎となつた。各州はイギリスの貴族院に倣つて第二院即ち上院を採用した。この上院には高い財産資格のある者のみが出席し、その選舉權は財産家のみが有してゐた。州の執行權の行使者、即ち長官になるには、さらに高い資格が必要であつた。裕福な地主か資本家でなければこの職に就くことも、その職權を得ることも出来なかつた。(中略)大統領の全權は、他のヨーロッパ諸國の君主の權力よりも廣汎である。大統領は完全に彼に従屬する政府を任命し、議會に對しては責任を負は

ないのである。これらの憲法の根本法を補足するために大ブルジョアジーの終身代表者から成るところの、大した全權を持つた最高裁判所が作られた。戰爭の一切の負擔を擔つた合衆國の勤勞階級は、權力の参加から除外された。ブルジョアジーはあらゆる勝利の實果を専ら自分のために利用した。憲法が確定してから後、選舉權を有する者は聯邦を通じて十萬人餘であつた。勞働者は完全に選舉權を奪はれてゐたのである。農民のうちで權力に参加することを許されたのは半農半地主の最も裕福な人々だけであつた」(前掲、四二頁)。

ボクロフスキーの指摘したこの本質は、アメリカ共和國の實踐においても明瞭にされたのであつた。かのフランス革命の時、ヨーロッパの君主國のすべてが、共和制のために戦つた革命フランスに對して攻守同盟を締結した、その時、將に自國の大革命を完成したばかりの、太洋の潑刺たる民主主義共和國は、遠くからそれを拱手傍觀し、自分の中立を守り、ボクロフスキーの辛辣な皮肉によるなら、「この若き共和國が、密かにその中立を犯したとすれば、それは戰爭の最中に戰時禁制品で一儲けするためにすぎなかつた」(同、五〇頁)のである。

第三節 南北戦争とその後の發展

十九世紀前半における合衆國の致富 十八世紀の末葉から十九世紀の始めにかけてヨーロッパでは革命と戦亂の時代であつた。イギリス及びフランスの二大商業國は大動亂の渦中にあり、他の諸國もこの動亂に巻き込まれてゐた。ただ合衆國だけは此の圏外に立ち、専らその形勢を商業的に開拓して行き、交戦國の兩方と通商を行ひ、封鎖の當時に莫大な量にのぼる戦時禁制品を供給し、資本主義的蓄積の最初の源泉たる奴隷賣買以上の巨額の利益を収めた。十九世紀初頭、一八一〇年におけるアメリカの國際貿易は非常な繁榮を遂げ、商船噸數は百五十萬噸に上り、合衆國の汽船は東洋や印度まであらゆる港に見受けられ、世界貿易の殆んど三分の一を手に入れた。

南部諸州も米、砂糖、煙草、棉花をヨーロッパ全體に供給し莫大な利益をあげ、工業も急速に發展した。一八〇五年には四千五百錘を有する紡績工場は全國に四個しかなく、一八一五年にはニューイングランドだけでも紡績總數は十三萬個になつた。織物業は

一八一一年に合衆國の織物工業労働者は四千人であつたが、一八一五年には五萬人を突破し、二千七百萬ポンドの紡糸を製造した。

領土は著しく擴大し、十八世紀にアラチャ山脈以西の内地に殆んど入らなかつたアメリカ人は北アメリカの南部および西部に幾多の新しい州をつくつた。耕地は擴大と新しい領土の耕作と工業の成長による對内的且つ對外的商品の流通は甚だしく増大した。フランスよりルイジアナを購求し、スペインよりフロリダを買収し、テクサスの合併を行ひ、上部カルフォルニアを割取し、太平太西兩洋に亙る廣漠たる領域の上に經濟的發展を築くに至り、アメリカ大陸における最大の強國となつた。しかもこれが一八二三年に外交政策の大綱を提げて國會に臨んだ大統領モンローにより、謂ゆる「モンロー主義」の名によつてアメリカ人のためのアメリカといふ有名な原則に保護せられた。

棉花・黄金・黒人奴隷 一七九三年にカネチカットのエリー・ワイトネイが綿繰機械を發明したが、従來一人のニグロが一日に棉花一ポンドしか梳くことが出来なかつたものを、これを使用すれば未經驗のニグロ女でも一日に百ポンド以上を梳き得るやうになつ

た。かくて棉花の收穫も七年間に百倍に増加し、アメリカの紡績業は急速に發展し、安價な綿織物は驚くほど急速に羊毛と亞麻とを驅逐した。

イギリスの紡績業に對して獨占的に棉花を供給したものはアメリカ南部地方であり、イギリス紡績業の繁榮もロンドンの取引所の運命もアメリカにおける棉花の收穫と密接の關聯を有ち、またイギリス紡績業における生産過剰も商業恐慌もアメリカの國民經濟に反映し、變動を惹起せしめた。商品としての棉花の産業界への登場は、アメリカ従來の米や砂糖や煙草の重要な地位を凌駕し、廣漠たるアメリカの原野は棉花の栽培に代へられた。殊にワイトネイの綿繰機械が發明されるまでは、南部諸州のイギリスへの輸出は全部で二十萬ポンドであつたが一八〇〇年には二十萬ポンド、一八二四年には一億七千萬ポンド、一八四四年には四億ポンドに達し、一八六一年即ち南北戦争の直前には一五億ポンドの多額に上つた。

棉花の輸出量が増大すると共に、全合衆國の對外貿易における棉花の地位は益々重要なものとなり、一八〇二年—四年に總輸出額は三千六百萬弗で煙草、砂糖と並んで約六百

萬弗臺の第二流に位してゐたが、一八六〇年には輸出總額三億七百萬弗のうち、一億九千一百萬弗、即ち約三分の二を占め、他のすべての輸出品も二倍乃至八倍に増加したが、棉花の如き三十倍の急激な増加を見たのである。ポクロフスキーによれば「棉花は眞に南部諸州の黄金となつた」のみでなく、「棉花は王となり」アメリカ國民經濟において中心的な商品として世界經濟に乗り出したのである。(上掲、六六頁、六七頁)。棉花には南北三十萬人の資本家と、三十萬人の植民地地主とが結びつき、北部多數の商船も棉花の運搬に多忙であり、ニューヨーク取引所は棉花に支配されるに至つた。同時に棉花栽培は益々擴張され、それに適した新しい領域を探し廻る冒險を伴ひ、南部三州の人口の如き二十年間に殆んど六倍に増加した。

棉花が黄金となり、また王なりと考へられるに至つた蔭には、十九世紀前半における南部植民地農業の急速の發展、同時に奴隷所有の増大化があつた。「ヨリ澤山の棉花を得るにはヨリ澤山のニグロが必要だ、ヨリ澤山のニグロを買ふにはヨリ澤山の棉花を栽培する必要がある」と奴隷所有者は語つた(「世界史教程」第五分冊、二三頁)。ニグロを捕

獲してアメリカ港へ輸入する専門の商人が、毎年アフリカへ遠征を企て、ニグロイ狩りをやつてはこれを賣拂つた。ヴァージニアとメリーランドは「奴隷を飼ふ」州として新しい富源を發見し、奴隷を他の州へ供給したが「この經濟部門も立派な資本主義的原則に基づいてゐた」(ボクロフスキー、上掲、六九頁)。奴隷市場はニューオルレアンス、チャールストンその他南部諸州の諸都市であつた。かくて十九世紀の奴隷制度は中世紀の單なる遺物でなく近世資本主義の産物であり、運用者は文明開化の資本家であり、近世的商品であり、取引所の投機物であり、大量輸出入の對象物であつた。ニグロイの飼育と賣買には莫大な資本が投下され、老人や病人や勞働力を使ひ果したニグロイは植民地から屑物として排泄した。南部諸州における當時のニグロイ勞働者の數は次の如くであつた。

一八〇〇年	八九三、〇四一人
一八一〇年	一、一九一、三六四
一八二〇年	一、五四三、六八八
一八三〇年	二、〇〇九、〇五三
一八四〇年	二、四八七、三五五

一八五〇年
一八五一年

三、一七九、五〇九
三、二〇〇、〇〇〇

(ボクロフスキー、上掲、七一頁)

奴隷収益も奴隷需要も増加したことは言ふまでもなく、それに伴つて奴隷の價格も上騰し十九世紀の初葉、ニグロイ百五十弗の價格が、中葉には二千五百弗から三千五百弗、一八六一年南北戦争直前に四千弗にも上つた。そして奴隷を廢止することは南部における經濟的・社會的狀態への非常な打撃であり、大地主土地所有の運命に關するものであつた。「かやうに世界で最も民主的な憲法といふ蔭に隠れて、自由の理想郷と思はれてゐた國では、その領土の半ば以上が、慘酷な奴隷主の支配下にあつたのである。地主は自分の所有地内では専ら專制君主であつた(中略)。合衆國の南大半には腕力と暴力の政治が行はれ、それはニコライ一世時代の農奴制ロシアの支配よりも殘忍で亂暴なものであつた。(ボクロフスキー、上掲、七三頁)

南北兩部の衝突の原因

奴隷所有それ自身としては、北部のブルジョアジの側より何

等抗議を受けなかつたのみか、却つて北部の商人はニグロの取引で多大の利益さへ得て居つたのである。しかし北部においては南部とは関係のない獨立の工業、鐵道運輸、穀物農業の發達といふ現象が起ると共に始めて利害の衝突が認められた。南部諸州は對ヨーロッパの關係上自由貿易を利益とした。工業的に發展し始めた北部は、自分より先進的なイギリスの工業から自己を防衛するために保護政策と關稅とを主張した。北部の産業は十九世紀中葉には本格的に資本主義的産業となり、紡績業の如き一八〇五年に僅か四個の工場が一八四〇年には一千二百四〇工場が運轉して居り、作業中の紡錘は一八四〇年に二百萬個であつたものが、一八六〇年には五百萬個を越えた。労働者の數も一八四〇年の七萬二千が、一八六〇年に十二萬を數へられた。蒸汽機關の發達と鐵道網の延長とは特に重要な發展の契機となり、事實上、合衆國に第二のアメリカ發見を齎らしたと言はれてゐるほどであつた。北部においては國立銀行、エリー運河の開鑿、これと太平洋との連絡、對外貿易等々、すべて保護政策による利益を蒙つたのである。

南北の利害の衝突は他の領域においても惹起された。南部棉花生産者は棉花の栽培土地

の領域擴大のために西部へと發展したが、同時に北部の農業企業者も之と競争しつつ西部自由の天地へ殺到し、南部植民地地主と國境で衝突した。「農民の先頭部隊は、一人一人家族をひき連れ、手に鶴嘴を持ち、馬車には見すばらしい世帯道具を積み込んで前進して行くうちに、多くは鎖に繋がれて、背中には鞭傷のあるニグロの群れを、まるで家畜のやうに追ひ立ててくる地主や監視人と衝突した」(ボクロフスキー、上掲、七九頁―八〇頁)。

南部の地主・奴隷所有者は合衆國の成立以來、文化と文明の代表者と見られ、大多數の大統領は彼等の中より選ばれ、南部の人々が指導的中心であつた民主黨は五十年代に至るまで國家權力を掌中に握つてゐた。従つて合衆國の政治的全機構は奴隷所有者の手にあつたと言へるのである。しかしこの社會的・經濟的構造は利害を異にする南部諸州と北部諸州との鬭争の舞臺となつた。即ち、北部の國權による保護政策(同時にこれは共和的中央集權制への主張と結合)、に對する南部の自由貿易の主張(同時にこれは民主的共和政治の實行)、北部の工業資本家、農業企業者、手工業者、労働者の大部分は南部奴隷所有者の政權への僭望とその經濟的獨立と優位に和解し得なかつたのである。南部諸州は北方と分

離獨立することによつてのみ經濟的發展の途が開かれると信じた。かかる間にも東北及び西部の農業企業者や労働者、中部諸州の急進民主主義的諸團體、都市小ブルジョア等の間には奴隸解放運動が急速に成長し、革命的なロシアのナロードニキ運動に似た英雄的な勇氣と意志力を示した。そして主家を逃亡するニグローを助けるために非常手段として謂ゆる「地下鐵道」を組織し、カナダまでの途上、奴隸廢止運動者たちの「ステーション」といふ非合法的な組織網を張り、數千の農民は「道案内者」となつた。南部から奴隸を知らぬカナダまで全國土を経る危険な長途の逃亡旅行者は隠れ家を與へられたが、一八三〇年から一八五〇年までの間に、五萬人以上のニグローを巧みに逃亡せしめた。

一八二〇年聯邦内に二十二州があり、十一州は奴隸所有州であつたが、新しくミズリー州が合州國に合併せらるゝ際、政治家ヘンリ・クレイの動議に基き北緯三十六度以北の諸州は永久に奴隸使用を禁止することを規定した。この法律は「ミズリー・コムプロミス」と名づけられた。一八三二年に排奴隸會が創立され、奴隸廢止運動に氣勢を擧げたが一八五四年には議會において「ミズリー協定」の廢棄が決議されてしまつた（上院十四票對三

十七票、下院百票對百十三票）。しかし農民間における奴隸解放運動、ニグローを指導した叛亂は毎年惹起し、中でも一八三一年ヴァージニア州におけるナート・ターナーの叛亂、一八五九年老農夫ジョン・ブラウンの叛亂は世界の耳目を惹いた。

ジョン・ブラウン父子の刑死 ジョン・ブラウンは小部隊を率ひて兵器庫を占領し、ニグローに叛亂を起させようとして失敗し、一八五九年十二月二日息子と共に刑死した。

當時マルクスはエンゲルスに書き送つた「私の考へでは、現在世界において起りつつある大事件はジョン・ブラウンの死によつて世に知られたアメリカの奴隸解放運動であり、他は、ロシアにおける農奴解放運動であると思ふ」（一八六〇年一月十一日書簡、「マル・エン全集」改造社版、第十八卷、三〇九頁）。

一八六〇年十一月六日、大統領改選に際して共和黨のアブラハム・リンカーンは、民主黨の候補者・極端な奴隸所有國家主義者ブレッキンリッチを壓倒して大統領に當選した。リンカーンの得票は百八十五萬七千六百十票、ブレッキンリッチは八十五萬百九十二票、この外、北部の妥協的・現状維持の資本家の候補者ダグラスが百二十九萬一千五百七十四

票を得てゐる。一八六一年四月から南北の頑強な闘争は開始された。北部の軍隊は南部に向つて進撃を開始したが、兵士達は遠征の途次かく歌ひつつ進んだと云ふ。――

ジョン・ブラウンの屍は墓場に朽つるとも

彼の魂こそは生きて吾々と戦場に進む

一八六二年九月二十二日、リンカーンは奴隷解放令を發布し、南部諸州は既に四月聯邦脱退を宣言すると共に南北兩軍は戦火を切つてゐた。海陸各地における猛烈なる戦闘はつづいたが一八六五年南軍の總督リー將軍も、北方のグラント將軍によつて撃破せられ、戦争は終熄し、合衆國の統一は回復せられた。四ヶ年に亘るこの戦争における南軍の動員兵は二百七十七萬八千五百四人、北軍二百八十五萬九千三百三十二人、約百萬人の人命を失ひ、數十億弗（北部だけでも四十億弗）の失費となつた。一八六〇年度の國債六千六百弗であつたものが、一八六六年度には三十億弗の巨額に達し、一年の利子のみ、一億三千三百弗を支辨せねばならぬ窮境に陥つたと言はれてゐる。

一八六五年四月十四日、リンカーンは國民的祭日になつた開戦記念日に、ワシントンの

フォード劇場で暗殺された。暗殺者はジョン・ウィルキス・ブースといふ俳優で、その出身は南部人であつたことより、この暗殺は南部人の陰謀だとされた。「しかし、リンカーンに怨を報じたのは、南部人といふよりも資本家の政黨であつた。サイモンスの言葉に依れば、少なからぬ事實が、リンカーンを射つた弾丸は、リッチモンドからではなく、ウォール街（ニューヨーク取引所）の方から差し向けられたといふことを證明して居る」（ポクロフスキー、上掲、三〇八頁）。事實、北方の勝利後も資本家地主は最も絶望的の抵抗を續けたのであつた。

南北戦争の社會的意義

一八六〇年十一月リンカーンが大統領に選ばれたとき、チェルニシエフスキーは「サブプレメーニク」（現代人）の中で次の如く批評した。「一八六〇年十一月六日、この日はリンカーンを候補者とする政黨の方に勝利の歸した日である。この偉大なる日は、合衆國史上における新時代の初めであり、この日と共に、偉大なる北アメリカの國民史上に大轉換が始まる。これまでアメリカ人の政治を支配してゐたのは、南部の植民者たち、即ち自己の高貴を誇る名望家たちであつた。彼等の政黨は民主黨と稱してゐ

たが實は寡頭支配者の政黨であつた。今や、北部と西部の農民——文字通りの農民、自分の手で土地を耕す人々——は、南部の寡頭政治の力をかりずに、聯邦を政治する力を初めて自覺するに至つた」(ボクロフスキー、上掲、一七〇頁—一七一頁)。

ボクロフスキーはチェルニシエフスキーのこのアメリカ批評の正當性を一應承認し、リンカーンの當選の歴史的意義を正しく評價したものであると述べてゐるが、しかし、チェルニシエフスキーが、少なくとも最初の間、農民を率ひ、彼等の名で活動してゐたのは、ブルジョアジーであつたといふ事實を充分に評價してゐないと附加してゐる(同上、一七一頁)。それは兎も角として、戦争によつて一時的な混亂に陥つた國內の經濟生活は間もなく整理せられた、奴隸制度廢止は、國內の經濟的發展に強力な刺戟を與へ、無限の自然的富源、無数のそして文化的な住民、廣汎な國內市場を有する合衆國は、急速なる技術的進歩と經濟的發展の道を進み、そして十九世紀の終りには大西洋の對岸の共和國は世界の最も強大な資本主義國となつた。

「合衆國の建國と發展、並びに近代的社會階級の鬭争の歴史は、その大部分が、奴隸所

有制とその遺物とに對する鬭争の歴史である(中略)。アメリカでは主として小中ブルジョアジーが南北戦争を指導した。南北戦争の結果は、資本主義がそれを拘束してゐた障害から解放されたことであつた」(デー・オー・ザフラスキーのボクロフスキー上掲書への序文)。

資本主義の躍進と内在的矛盾 四年間に亘る内亂の犠牲は甚大ではあつたが、産業資本は、奴隸所有地主に對する勝利によつて展開された有利な狀勢を限りなく利用し、資本の力を伸張した。一八六一年開戦と共に、政府は直ちに關稅率を高め、一八六五年に至るまで國會の開かれる毎に輸入關稅を引き上げた。戦争の時期を利用しつつ資本家たちは高率の利率を確保することに努めた。一八六四年の法律によつて輸入商品に對する平均稅率は四十七パーセントにまで引き上げ、しかも、この戦時關稅率を戦後二十有餘年の間、何らの變更を加へなかつた。

南部に對する勝利は資本の利潤追求への地域的障害を除き、鐵道は大西太平洋兩洋を結合し、この幹線の周圍も鐵道網が急激に張り廻はされると共に、資本支配の圈内に引き込まれ、鐵道敷設の利權は莫大な致富の源泉となつた。鐵道總延長は一八六〇年に三萬六百四

十五哩であつたが、一八八〇年には九萬三千三百六〇哩、十九世紀の最後の時期において十九萬三千三百四十五哩に達し、全ヨーロッパの鐵道網を遙かに凌駕するに至つた。(ボクロフスキー、上掲、三二三頁)。

鐵道の敷設は鑄鐵および鋼鐵等の需要を呼び起し重工業の發達を刺戟し、豊富な鑛脈や石炭層と結びついて産業は愈々飛躍的發展を遂げた。十九世紀後半における石炭、鐵鑛、鑄鐵、鋼鐵の産額を示せば次の如くである(同上)。

年 度	石 炭	鐵 鑛	鑄 鐵	鋼 鐵	單位百萬噸
一八六〇	一四	二、八	〇、九	〇、〇〇九	
一八八〇	八一	六、三	四、二	一、三	
一九〇〇	二六九	二七、五	一四、五	一〇、一	

石油の採掘は一八六二年に三百萬バレルが一九〇〇年には六千四百萬バレルに上り、スタンダード石油トラストの有力なる組織が出来た。かかる工業の發達と共に、工業の集中が行はれ、數百の個人會社が二三の大企業に溶け込み、一切の産業部門を吸収し始めた。

南北戦争後最初の十年間に千三百萬弗の資本を有するトラストは合衆國に二つしか無かつたが、次の十年間には四つとなり、その總資本一億三千五百萬弗となり、十九世紀最後の十年間に三十億以上の資本を擁したトラストは百五十七を算した。スタンダード石油をはじめ、鋼鐵、鐵道等々各トラストの發展を伴つてアメリカ資本主義は凱歌を奏しつつ進行した。エンゲルスは一八九〇年に「資本論」第一卷の註解二三四でマルクスが「アメリカ合衆國の經濟的發達はヨーロッパ殊にイギリスにおける大工業の一産物である。現在(一八六六年)の形では合衆國は依然としてヨーロッパの植民地と見做されねばならぬ」と書いたのに附加して「爾來同國はその植民地的性質を失ふことなくして、世界第二の産業國に發達した」と述べたが(改造社版、第一卷、四三六頁)、一九一四年にカウツキーは「資本論」の新版で更に註解して曰く「この註解も古びてきた。合衆國は世界第一等の工業國となり、自ら植民地擴張政策を行ふほどに植民地的性質を喪失した」と。

かくてアメリカ合衆國は世界一の工業國となつたが、ニグロノ奴隷の代りに白色奴隷が資本主義的奴隷制度として出現した。數百萬の大衆の零落と貧困と飢餓と死と繰返される

恐慌とは、膨張しようとする資本を足下から脅威せしめた。六十年代の終りから七十年代にかけての労働運動の昂進と引きつづく階級闘争とは、この新天地にも避け難い資本主義の内在的矛盾を暴露し始めた。その後における情勢をレーニンが批判して述べた。

「アメリカ国民の中には革命的傳統があるが、この傳統を、我々ボルシェヴィキに對して充分なる同情の意を一再ならず表明したところの、アメリカ・プロレタリアートの最良の代表者たちが再び取り上げた。この傳統とは十八世紀にイギリス人に抗した解放戦と、次には十九世紀における南北戦争とである。一八七〇年には、アメリカは産業と國民經濟の若干部門の破壊のみを取り上げるならば、或る點では一八六〇年に劣つて來た。だがこれを理由として、一八六一年から一八六五年に至るアメリカ南北戦争の極めて大きな世界史的・進歩的・革命的意義を否定し去らうとする人々は、何んといふ術學者何んといふタケ者だ！」（「アメリカ労働者に與ふる書簡」、廣島氏譯文による）。

第三章 フランス

この章で扱はれるのは、フランス近代社會の發生——具體的には一七八九年——九九年に亘る「フランス大革命」の諸前提及び政治的諸過程である。

エンゲルスは、西歐ブルジョアジーの封建制度に對する三大決戦として、十六世紀ドイツの宗教改革、一六四八年のイギリス大革命及びフランス大革命を擧げてゐる。ドイツ及びイギリスの改革は宗教的假裝の下に行はれたが、フランスに於ては、赤裸々なる政治的地盤で、俗世的要求を掲げて革命が行はれた。

革命は、フランスに於ては、他の如何なる國の場合よりも決定的であつた。イギリスに於ては、大土地所有者と資本家の妥協によつて、封建的法律形態はブルジョア社會に適應しつつ保存された。だがフランスでは、封建制度は最後の痕跡に至るまでも掃蕩され、近代資本主義に最も適應した國家形態——民主々義的共和國が打樹てられたのであつた。

フランスに於ける技術革命は、イギリスよりも遅れて始まり、その発展のテンポも同國に比し、甚だ遅々としてゐた。では、何故フランスのテンポが遅れたのか。既にイギリスの資本主義は、自己の発展を阻害してゐた舊秩序を克服し、近代的經濟社會にこれを適應せしめた處の新しい國家形態——立憲君主制を確立してゐた。

だが、十八世紀のフランスにあつては、未だ斯くの如き社會的變革は成し遂げられて居なかつた。此處では、フランス全土を蔽ふ舊制度の網の目によつて、伸び行く資本主義は甚しくその發展を阻害された。

既に十五世紀以來益々増大する海外市場の需要は、大工業——マニユファクチュア（工場制手工業）をフランスの各地に發生せしめた。だが、同時に並存した同業組合的（ツンフト）手工業や、農村の小生産は、自由労働者の供給を妨げ、マニユファクチュアの發展を阻害してゐた。

商業——とくに海外取引は飛躍的に増大した、だが一方國內には國內關稅や、各地方の封建的制規が商品の自由な流通を妨げ、種々の特許商人の存在が商業に於ける機會の均等、

自由競争を妨げてゐた。

農村には依然として貴族が古い特權を保持し、農業の資本主義的經營を阻んでゐた。

これを要するに經濟的生活の方面では、フランスは日々資本主義の方向へと發展してゐたのに、これに對應する社會の秩序は依然として封建的であつた。——此處に當代のフランス資本主義が直面した最大の矛盾があつた。

フランスにおける資本主義の自由な發達を保證する爲には、かくの如き舊制度の凡ゆる殘滓を全フランスから徹底的に一掃し、個人の自由、自由競争及び商品所有者相互間の權利の平等を保證するが如き、近代的社會制度を打樹てる必要があつた。

十八世紀の末葉から十九世紀の末葉にかけて、斷え間なき社會的激動を経て、フランス資本主義は、かかる舊制度の殘滓を一掃し、自己の生産方法に最も適應した國家形態——民主主義共和國を打樹てた。かくの如きが「フランス大革命」と呼ばれてゐる一大史劇の眞實の姿である。

第一節 十八世紀末葉に於けるフランスの經濟狀態

フランス資本主義發達の諸前提 フランスに於ける工業（嚴密に言へば工場制手工業）の發展を促進した有力な原因の一つは、他のヨーロッパ諸國の場合と同じく、「アメリカの發見（一四九二）」と、その貴金屬の流入とに依つて促進されたところの資本の蓄積であつた。」（マルクス）

十五世紀末に於ける、西ヨーロッパは、商業の發達——都市貨幣經濟の發達のために鑄貨の不足に悩んでゐた。

當時西歐における銀の全貯藏量は、銀製品を合しても七百萬キログラム、金の貯藏は五百キログラムに過ぎなかつた。然るに新大陸の發見以後、メキシコ、特にペルーの鑛山は、夥しい産額の金銀をヨーロッパに浴せかけた。エンゲルスの形容を借りれば、「アメリカの金銀はヨーロッパに氾濫し、破壊的の要素の如く、封建社會のあらゆる罅隙、裂け目及び竅に入り込んだ。」（「反デューリング論」邦譯、改造社版、二八五頁。）

金銀の大洪水は「歐州における金銀の價値を従前の約三分ノ一に低落せしめた。」（アダム・スミス）

P・ラボールによれば、十五世紀後半から十六世紀の後半まで、約百年の間に、フランスのリーブル價格は、約四分ノ一に減じてしまつた。

○リーブル價格の下落（單位フラン）

年度	價格
1483	55
1515	50
1543	32
1572	20
1595	10
1603	13
1630	12

同時に新大陸への既成商品（諸種の布、羊毛、加工した革）及び穀物の輸出が急激に増大し、メキシコ銀貨は益々フランスの市場に氾濫した。フランスの生産能力はこの海外の新たな需要に應じ切れずして商品の不足を招き物價は一般に騰貴し、リーブルの購買力の低下は更にそれを促進した。（註）

（註）穀物の價格は、他の何よりも甚しく騰貴した。フランスに於て一五五〇—一五九〇年まで

の間に二〇〇パーセント方の騰貴を見てゐる。

輸出の増大、物價の著しい騰勢によつて、フランスの商人（とくに貿易業者）や企業家は大に利潤をせしめたが、勤勞住民は生活費の高騰による勞賃の相對的低下によつて甚しい打撃をうけた。（註）

（註） フランスに於ては、石工及び大工は、十六世紀の最初の二十五ヶ年間に、現在の貨幣にして日に約六十コペック宛を稼いだ、その後の二十五年間には九十コペック宛を稼いだ。換言すれば、勞賃は五十パーセント方騰貴した。然るにこの最初の期間に勞働者は六十コペックで十四リツトルの小麥を買ひ得た。だが後の期間には九十コペックで漸く四リツトルの小麥を買ひ得たに過ぎなかつた。

又、封建貴族は、この物價騰貴に當面して、生活費の暴騰と、己が收入の大部分をなすリーブルの購買力の絶えざる下落により爲す所を知らず、没落の憂目に會つたものは少くなかつた。此財政的危機を切り抜けるため、領主は頻りと借金を始めた。そして、さうでなくとも急激な取引の増加で富有になつた商人達は、今度は領主への金貸で又一儲けした。領地や、城が次々と貴族の手から、商人の手へと移つて行き、かかる傾向が十六世紀を通

じて行はれた。

「換言すれば——」とマルクスは言ふ。「地主階級と勞働階級、封建諸侯と民衆が、落ちぶれて行けば行くだけ、資本家階級即ちブルジョアジーは、それだけ擡頭して行つたのである。」（マルクス「哲學の貧困」邦譯、岩波版二〇二頁）

新大陸の發見に次いで、一四九八年には、喜望峯を經由し東インドに達する新航路が拓かれ、ヨーロッパの海外市場は更に擴大された。従來、地中海を中心としてゐたヨーロッパの海上貿易は、その中心を大西洋沿岸に移動したため、フランス商人の立場は地の利を占めて彌々有利となつた。

だが、新市場の擴大と共に益々増加して來る商品の需要を充すには、舊來の都市のツンフト手工業による生産は、餘りにも微力であつた。かくて工場制手工業が出現した。この制度は、従來の家内手工業者を場處的に一つの工場に集めて、従來よりも、より計畫的に、より合目的に、より専門的に、生産を行はせる制度である。富有なる商人は自ら工場の經營者として、或は分散せる農村家内工業の小生産を統制し、組織することによつて、マニ

ユファクチュアの主人、資本家となつた。

同時に貴族の没落に際して、解雇された多くの家來や、土地を失つた農民*、苛酷な封建的諸税の誅求に農民たることを止めて逃亡した多くの浮浪人**は、その工場に働く使用人——プロレタリアートとなつた。

*農奴制は十六世紀のフランスに於て一應は廢止され（私有地に於て）、農民の人格的緊縛は稀になつてゐた。

**一七七九年の公表によればフランスにおける乞食の數は百十萬人に上つてゐる。ルイ十六世は浮浪人を取締る法律を作つた。

フランスに於ける近代的工業（ここではマニユファクチュア）を發達せしめた、今一つの有力な要素は、國家權力による保護助成である。フランスの絶對王政は、マルクスの形容を借りれば「新たなる一社會を孕める總べての舊社會に對する産婆」であつた。ルイ十一世、アンリー四世、ルイ十四世等、累代の國王は、國家富源の一たる對外貿易の發展、製造工業の保護育成に力を盡した。

都市ツンフト、地方の封建的諸關係の壓迫から新工業（マニユファクチュア）を保護するため、王は自らマニユファクチュアの設立者となり、又企業家に多くの特許や、年金を與へた。（王立マニユファクチュアと呼ばれてゐるものがそれである。）

ルイ十四世朝には宰相コルベールがいはゆる重商主義マイカンテイリスムの國策を實行した。

各種工藝學校の設立、外國よりの熟練工の招致。王立マニユファクチュア及び特權マニユファクチュアの創設及び振興、工業獎勵金、補助金の下附、特權の賦與。

關稅保護政策（直接には輸出プレミアム、間接には、外國商品への差別關稅、自國商品への保護關稅）。商船隊の建造。殖民地建設、殖民地貿易特許會社の設立。等々の一連の資本家保護政策がそれである。

就中、極端な關稅保護は、各國の關稅競争を増し、それは結局暴力の行使——商業戦争を惹起した。ルイ十四世の在世五十四年の内、三十三年を費した商業戦争（フランスは、商業國オランダ、スペイン、オーストリー、ドイツ等と戦つた。）はこの極端なる重商政策資本家保護の歸結であつた。

以上の様な諸條件の下に、フランスの資本主義的工業は發生し、國家によつて温室的にその發達を助成された。

商業 十八世紀末のフランス商業、とくに對外貿易は、凡ゆる經濟部門の中、最も著しい發展を遂げてゐた。

今、フランス對外貿易の當時の盛況を語る二つの數字を上げよう。左の數字は各々、外國貿易の差額を示してゐる。即ち

一七二〇年	二一、四八〇萬リール
一七二七—一七三〇年	
一七三〇—一七三三年	一〇一、一六〇
一七三三—一七三六年	
一七三六—一七三九年	
一七三九—一七四二年	
一七四二—一七四五年	
一七四五—一七四八年	
一七四八—一七五一年	
一七五一年—一七五四年	
一七五四年—一七五七年	
一七五七—一七六〇年	

兩年度を比較すれば約五倍の増加である。

當時にあつては、なほ輸出品の首位を占むるものは農産物であつた。一七八七年の輸出總額、五億二千四百萬リールの中、三億一千一百萬リールが農産物、残りの二億一千三百萬リールが工業品であつた。

だが工業品の輸出に就てのみ觀れば、一七一六—一七八九年の間に四千五百萬リール

ルから一億三千三百萬リールに騰つた。それは市場の擴大が、手工業のマニユファクチュアへの轉化を促進した結果による。

吾々は前項に於て、當時のフランス國家が極力、海外貿易及び殖民地商業を保護育成したことを述べた。

世紀の初頭（一七一六年）より世紀の末葉に至る迄の間、フランスの殖民地取引（アジア、アフリカ、アメリカにおける殖民地との）は、三千六百二十四萬五千リールから、三億二千八百九十一萬三千リールに増大した。（地中海沿岸ではマルセイユが、大西洋沿岸ではボルドー、ナントが、フランス商業の中心地をなしてゐた。）

市場の擴大に伴ふ國內産業の發達は、何よりも先づ、統一され、商品流通の自由を保證された自國市場を必要とする。だが、革命前までのフランスは未だ單一の經濟組織としては存在しなかつた。國は謂はば幾つかの獨立的な部分に分れて居り、その一部分が「五郡フランス」と呼ばれた。「五郡フランス」の内部では、商業は自由に行はれ、關稅壁はなく郡から郡へ商品を出入させる事が出來た。フランスの他の部分は「外國の狀態にあるプ

ロバンス」と呼ばれ、第三の地方は「準外國プロバンス」と呼ばれた。「五郡のプロバンス」から「外國と見做されたプロバンス」へ商品に移入する場合には國內に於てさへ、關稅を支拂はねばならなかつた。

當時オルレアンの住民からボルドーに輸送せられた一定量の葡萄酒は、かくの如き途上の關稅のために、少くとも二十倍の値段に上つた。フランスにおける商業の自由な發展は、何よりもまづ此國內關稅壁によつて阻害せられてゐた。その他特許商人（たとへばパリーの葡萄酒商人）なるものが、王朝によつて特別の權利を賦與されて居り、甚しく商人の自由な競争を妨げた。

かくて、これらの舊制度を一掃し、フランスの國內市場を統一することによつてのみ、フランス商業の今後の發展は保證されたのであつた。

工業 商業の發達、市場の擴大と共に、工業は全フランスに互つて躍進を遂げつつあつた。

ジャン・ジョレスによれば、その地方分布状態は次の如くである。

ランドツク、セゼーヌ溪谷業	羅紗工業
ノルマンディ、及び東部地方	織物、羊毛及び木綿工業
ピカルディ、シヤンパーニユ	帽子製造、羅紗製造
ドオフィネ、アングモリア	壁紙製造
ロアール河の溪谷、ローヌ河の	絹工業
中部溪谷、ツール、ロアーヌ、	
リオン	金屬工業、鑄物工業
アルデーヌ、ソーム	
アルザス、ロレーヌ	鑛山業
アルトワ	石炭業

（ジャン・ジョレス「佛蘭西大革命史」第一卷、邦譯第一章第七節）

十八世紀末に於けるフランス工業の水準は如何なる程度に達してゐたか。ミラボーは、一七八八年の著書に於て、當時のフランスには、「幾百の人々が一人の指揮者の下に勞働する處の聯合のマニユファクチュア」と「小農業と結合した個別的分散的マニユファクチュア」とが並存した事實を指示してゐる。

若干の資料は、當時のフランス工業が、手工技術を基礎とし、都市の手工業及び農村の家庭的副工業をその宏大な背景とするマニユファクチュア（工場制手工業）の時代にあつた事を示してゐる。吾々は當時のフランス工業における三主要形態に就て簡単な説明を與へよう。

- 1 都市手工業者同業組合 (Métiers) の手工業
- 2 問屋制家内工業
- 3 工場制手工業 (Manufactures)

1 同業組合的手工業 (Métiers)

十八世紀末葉のフランス工業における、都市手工業の地位は尙相當大である。

一七二一年のパリーには、人口五十萬に對し七百五十七人（六百六十人につき一人）のピン製造業者があつた。一八九〇年には此割合は人口二百四十四萬七千九百五十七人に對する、千五百二十二人（千六百八十人につき一人）となつてゐる。十八世紀に於ける手工

業者のパーセントは、一世紀後とは比較にならぬ程大きな地位を占めてゐた事が分る。

これらの手工業者の大部分は同業組合に組織されてゐた。

同業組合といふのは、十五、六世紀のヨーロッパに廣汎に普及してゐた手工業者の組合である。（ドイツでは Zunft 英國では Craft gild と呼ばれた。）

同業組合は、狭い封建制度の枠内にあつて、無制限な競争、技術の甚しい改革によつて、自己を滅亡させない様手工業者同志が相互に生産を統制する組織であつた。

同業組合の組合員は、親方 (Maitre) と呼ばれ、各親方の下には、二つの階級——職人 (Compagnon) と、徒弟 (Apprenti) があつた。徒弟は六ヶ月乃至十年の間、親方の下で修業し、一定の期間を終ると「勞作」(Materspiece) をなして、職人の階級に上る。職人は一定の年限、親方の下で勞働して、始めて獨立した親方になり得るのであつた。だが、親方となるためには、親方の組合が行ふ試験を受けねばならず、時には莫大な金を納めねばならなかつた。か様な制限の爲に、メティエは段々と硬化し、後には職人が親方に昇進するのは殆んど困難な事になつてしまつた。

同業組合には、それぞれ厳格な規定があつて、親方の有する職人及び徒弟の數、製品の種類、販路、販賣價格等が制限されており、企業者の創意といふものは全然壓服された。メティエは舊の如く父祖傳來の方法を以て生産を続け、技術上の新發明を力めて排除した。かくの如き制限は、其後、市場の擴大に伴ふ工場制手工業、機械工業の發展に際し、甚しい障害となつた。かくてメティエとマニユファクチュアとの間に葛藤が激しくなつた。又同業組合相互間にも、親方と職人との間にもそれぞれ利害の對立から鬭争が起り、同業組合は漸次崩壞の途を辿りつつあつた。

2 問屋制家内工業

この制度は、商人の生産への侵入によつて作られた一つの産業組織である。

農民の自然經濟の必然的附屬物として發生した、農家庭手工業は、商品經濟の發展と共に、地主や高利貸への支拂のために、益々市場向の生産を行ふ様になり、農民と市場との間に立つ仲買人——買占商人を發生せしめた。

最初、商人は出來上つた製品を買占めるだけであつたが、後にはその財政的な優越を利

用し、農民に貨幣、材料、或ひは勞働器具まで前貸する様になり、農民は單に出來高拂ひで加工する勞働者の様になつてしまつた。商人はかくて、生産の方針、範圍等を漸次決定するに至つた。

「此の新組織は未だ種々の勞働力を空間的に集めはしないが、この組織の主なる特徴は次ぎの點にある。即ち、個々の供給者の生産は商人じみた前貸人に依つて、次第に擴大する所の統制と統一に従はしめられるのである。したがつて上述の事實に依り、先づ、第一に生産の速度は速められ、第二に前貸人は『彼の』勞働者達に對し種々の改善を教へ（見本及び手本等を用意する）、第三に原料の大量的購入は、從來の小規模經營に於いて實行し得たるより以上合理的な生産と有効な分配とを許すのである。けれども、最後に第一の事實に依つて生産の専門化（及び同時に改良）は、たとへ僅少なりと雖も、問屋の計畫的な侵入を達せしめる——例へば針はその生産に當り、大部分が家庭で働いてゐる所の七十二の手を通り、時計も亦それより少くない手を通るのである。」（ウイットフォード「市民社會史」邦譯、下卷第七章五四一頁）

フランスにあつては、十八世紀末に於いて、マニユファクチュア（工場制手工業）とならんで、夥しい數に上る問屋制家内工業が、農村地方（とくにブレンタン地方、フンダールヌ、ピカルジー地方）に散在した。

ジャン・ジョレスは、ピカルジー地方の問屋制家内工業を次の様に描いてゐる。

「糸挽車は廻つてゐる。機械は職工或は百姓の憐れな家の中で動いてゐる。さうして工業は尙農業的生活と相混じてゐた。」（ジャン・ジョレス前掲書第一卷、第一章、一二一頁）

「ピカルジーに於ては、羊毛織物、ピロード、麻織、莫大小類が生産された。二萬五千の機械が此の縣で動いてゐたが、その中で六千五百臺丈が都市の中にあつたに過ぎなかつた。……都市の機械の一部及び田舎の殆ど全ての機械は收穫の時に休まされた。稜刈入れ、材木の伐採、種蒔き、その他の農村の仕事は、多くの村に於て甚だしく仕事を止めしめた。全てを含んでそれらの機械は、一年の中八ヶ月しか働いてゐない様に考へられた。」

「此等小製造家は廣大な、遠隔な市場の爲に生産することが出来なかつた。故に富める有産者は機織者に織るべき材料を供給する。さうして此の機織者達はその村の貧しい家の

四壁の中で仕事を終つた時、さうして日に日を繼いで梭を押しやり、ただ田舎の必要な時にだけそれを止めた時に、大企業家に製造したものを持つて行つたのである。此の家族的性質の産業型に於いては、婦人が大きな位置を占めてゐ、子供も亦さうであるといふ事は明である。」

農民は、自家用の生活資料の生産から、益々市場向の生産に移つて行くと同時に、生活資料を自家生産からでなく、商品として市場から購入せねばならなくなつて行く。

かくして漸次に國內市場が造り出されて行くのである。

3 工場制手工業 (Manufactures)

此制度は從來の家内手工業者を場所的に一つの工場に集めて、從來よりも、より計畫的に、より合目的に、より専門的に生産を行はせる制度である。

「從來の封建的又はギルドによる工場の經營方法は、最早新らしき市場と共に増加し来る需要を充すに十分ではなくなつた。工場制手工業はそれに代つて起つたのである。ギルドの親方は、工業的中産階級によつて壓迫せられた。種々の同業組合間に於ける分

業は、個々の工場内に於ける分業の前に解消したのである。」(マニフェスト)

工場制手工業が、機械工業と異なる點は、工場制手工業の作用は、依然として手工技術が基礎であり、労働者の熟練や、迅速や、確實性が大きな意義を持つてゐるが、機械工業では労働者は「死んだ機構」の「生きた附屬物」に轉化して了ふ事である。だが「賃労働の搾取」と「廣汎な分業」といふ點で、工場制手工業は、手工業とも區別される。工場制手工業は、手工業及び農村家内工業と、機械的大工業との中間の環である。

フランスに於ける工場制手工業は、最初、重商主義者たる諸王の保護助成の下に發達した。王はツンフト制度(メティエ)や、地方の封建的諸制規から、此新工業を保護するため、諸種の特許を與へ、又年金や奨励金を下附した。王によつて設立された工場は「王立マニユファクチュア」(Manufactures loyales)と呼ばれ、特許のみを與へられた工場は「特權マニユファクチュア」(Manufactures privilégiées)と呼ばれた。

次表は織物工業に於ける「王立マニユファクチュア」の生産額と、他の手工業のそれとの比較であり、マニユファクチュアの生産額が壓倒的である事を示してゐる。(一七〇三

—一七一三)

王立マニユファクチュア 三二、七三五反

手工業者同業組合その他 一七、七一〇反

既に、十六世紀末に於て、リヨンには職人二千人を使用する綿入麻布製造のマニユファクチュアがあり、十七世紀中には織機百臺職工一千六百九十二人を數へたアヴェル町のロベール經營羅紗製造マニユファクチュアがあつた。十八世紀末にはランス、ルーヴィエ等に數多の毛織物製造マニユファクチュアが現はれ、アミアン、ルウアン等の諸企業には、千二百乃至二千三百人の職人が同一工場内で働くマニユファクチュアが起つた。

マニユファクチュアの發達は一定の時期に於て、その技術の達し得る限度に突き當つた。人間の手力労働に基礎を置いてゐるマニユファクチュアは、同時に使用し得る労働要具の數に一定の制限を受けてゐた。この制限を克服するため「同一又は類似の多數道具を同時に操作し……單一の原動力」によつて動かされる「機械」が移入され始める。

例へば、綿織工業の領域には、英國から多軸紡績機、廻轉紡績機、走錘精紡機が輸入さ

れ、若干の壁紙製造の手仕事は機械工業に代り、冶金工業では、木材燃料による鑄鐵が、コークスによる鑄鐵に代り、炭坑に於ては、科學的採掘（地質調査、通風、蒸氣機關の使用）が始まつた。一七八七年、ルウヴィエーの一大マニユファクチュアには、十八臺の繰出し機械と三臺の紡織機が移入され、オルレアンには、勞働者、六千人が働く一大機械工場が出現した等々。

資本主義以前の生産方法（農民の自然經濟、メティエの手工業生産等）は、従前の規模を些かも變へない生産の反覆であつた、従つてその市場も隣接小市場の範圍を超えることなくして、存続する事が出來た。これに反し資本主義生産の法則は、生産方法の不斷の改造と生産規模の無制限の擴大であり、従つてその市場は、村落の、地方市場の、そして最後に國家の境界を超える。かくてフランスに於ける資本主義生産の發達は、舊經濟制度の封鎖性を破壊し、フランスの國內市場を統一することを不可避的に迫られたのであつた。

農業 フランス人口の基本的大衆（總人口略九十二%）は農業に従事してゐたが、此處までは封建的搾取と商品經濟の發展による自然經濟の崩壊とが二重に農民を苦しめてゐた。

フランスの土地の最大部分は貴族がこれを所有し、司法權と徵稅權はなほその手に保持されてゐた。

農民は完全なる土地所有の自由を持たなかつた。諸侯が土地を農民に譲り渡した後にも、彼は尙、その土地の上に領主權と所有權を保つた。譲り受け人は、完全なる土地所有者ではなく、年々一定の年貢を納める事によつて永代、土地の保有者となり得たに過ぎなかつた。

國稅は措いて、年貢、僧侶への十分の一稅をはじめ、いかに多くの封建的諸稅が農民にのしかかつてゐた事か！ 領内財産賣買稅（土地の賣買の際に課す）、現物稅、耕作用の動物の上に課する稅、川を渡る爲、領主の渡船を用ゐる稅、川に於ける漁稅、泉を掘り池をつくる稅、戸別賦課金、穀物稅、麥稅、埃りを立てる旅中の家畜の群に課する稅……列擧するだけでも際限のない程の煩瑣、複雑な封建的諸稅が農民に課せられてゐたのである。

フランスにおける農奴制は既に久しい以前から廢止され、ルイ十六世が一七七九年に王領内の農奴を全廢したので、農奴の數はフランス全土を通じせいぜい百五十萬（全農民人

口の約一割)に過ぎなかつたとは言へ、他の農民と雖もただ、言葉の上だけでの自由農にすぎなかつた。

當時のフランスの土地所有關係を大別すると、次の様な四つの基本的グループに分たれる。

(一) 封建的大地主の下に働く折半小作人。

地主の土地を一人當り十ヘクタール乃至十五ヘクタール宛に分つて、收穫の半分を收めることによつて借地耕作する小作人、小作料と並んで苛酷な賦役を負はされてをり、土地革命に直接最も多くの利益を得る農民である。

(二) 自由小農民。

いはゆる永代借地人である。一定の領主への年貢と、土地を賣る際に税を支拂ふべき義務を持つてゐた。

(三) 資本家的借地農業者。

多くの土地を、領主に金を拂つて借地した資本家、あるひは富農が、直接開墾又は、

農民への土地の又貸し等を行ふもの。

(四) 封建的大地主。

全フランスの最大部分の土地を所有し、農民よりの封建的搾取によつて最大の收入を得てゐる大土地所有者。

當時、土地は如何に農民の間に配分されてあつたか。
フリードリヤンドによれば、それは次の如くである。

家族數	平均所有面積(ヘクタール)
二一、四五六	八八〇
一六八、六四三	六二
二一七、八一七	二二
二五六、五八三	一二
二五八、四五二	八
三六一、七一一	五
三六七、六八七	三

八五一、二八〇
一、〇〇一、四二一

一・六六
〇・五〇

(フリードリヤンド「近世西洋史」邦譯、上卷、第三講、五五頁)

右によれば最少数の家族グループ(二一、四五六)が一家族當り、最大の土地(平均八八〇ヘクタール)を有するに反し、最大多数の家族グループ(一、〇〇一、四二一)は、一家族當り僅々〇・五ヘクタールの猫額の土地を有するのみである。かくの如きが、フランス大革命に於ける土地獲得闘争の経済的基礎であつた。

農家經濟の補充部分をなした家内工業(製糸・機織等)は、商品經濟の發達、市場の擴大と共に益々普及し、買占商人の出現は、除々に農家々内工業を農業より分離し「資本」に隷屬せしめつつあつた。

嘗ては、多くの土地——牧場・森林・休耕地・開墾地等は、農村共同體の共有財産であつた。然るに漸次領主達は、彼等の有してゐる兵馬の權と、忠實な僧侶達と、彼等の裁判所に抱へられてゐるローマ法に精通した法律家の力を借りて、莫大な面積の土地を自分の

個人的財産として農民から收奪して行つた。此の收奪事業は極めて徐々に行はれ、それが完成迄には數世紀——殆ど中世紀の全部——を要した。然し十六世紀にはそれは非常な發展を示してゐた。一六六九年、ルイ十四世は勅令を發して農村共同體に屬する共有地の三分の一は領主の占有することを許した。(所謂、三一法 *Le triage*)

領主達は早速此勅令を武器として、最良の土地——就中、農民が家畜の飼育に使用してゐた牧場を收奪した。

ルイ十四世、及びルイ十五世治下に於て、貴族・僧院・教會等は、幾多の口實の下に、農村の共有地を奪掠した。ある地方では領主は共有地の一部分を勝手に垣で圍つた上、自らその所有者であると宣言し、これらの圍繞地の所有權に對する國王若しくはパールの裁可を要求した。しかも裁判所は完全に領主の味方であるから、若し農民が頑強に抗爭すれば、直ちに反逆行爲として處斷した。

共有地の收奪、加ふるに補充經濟たる家内工業の商人資本への隷屬——封建制度の内部に於て農民が自己生存上の保證として享有してゐた條件は完全に奪ひ去られた。そしてた

だ高い年貢と封建的諸税の重壓とのみが農民に残されてゐたのである。かくて農民は遂に耕地を捨てて放浪者の群に加り、ある者は自分自身の労働力の販賣者——プロレタリア——トとなつた。

ジベル教授は當時の荒廢したフランス農業に就て曰ふ、

「その農業は勤勉もなく、科學もなく、就中資本のない農業であつた。當時イギリスに於ては、既に一ヘクタールに付き用ひられたる費用が、平均二四〇リールに達してゐたのに、此時代のフランスの小作地では四〇乃至六〇リールに過ぎなかつた……イギリスでは播いた種子の十二倍の收穫を擧げたのに、フランスでは一ヘクタールにつき七乃至八ヘクトリテの收穫で、即ち播種の五乃至六倍の收穫に過ぎなかつたのである……十ヘクタールの收穫物では殆んどその家族を養ふにも足りなかつた。従つてそれを賣つて儲け様などとは考へる事も出来なかつた。」*と。當時、田園は疲弊のどん底にあり、耕地の三分の一（九百萬ヘクタール）は耕作されることもなく荒れ果てたままになつてゐた。

* ウイルヘルム・リープクネヒト著「土地問題論」邦譯、改造社版、四四頁參照。

第二節 十八世紀末のフランスにおける階級關係

國家組織——アブソルウト・モナーキー—— 十八世紀のフランスは「舊封建身分が沒落し、中世紀的市民身分が近代ブルジョア階級にまで成長し、しかも、なほ、この闘争に於ける一方が他方を克服し了へてゐないといふ過渡的な時期」(マルクス)にあつた。

十二世紀には、フランスは尙純然たる封建主義の時代にあつた。フランスの領土は數十の侯伯の領地に分たれ、その各々が事實上の獨立國となつてゐた。其領主は帝王であり、裁判官であり、地主であつた。封建主義は自然經濟の時代に照應する。當時にあつては、封建諸侯のそれぞれの領内は、自領の必要とするものは殆んど自領に於て賄ふ自給自足の状態にあり、従つて其處に諸侯が政治的獨立を保ち得る根據があつた。だが商品生産と商品流通は、かくの如き小地方割據の限界を超えて發達する。かくてルイ十一世以來のブルボン王朝の封建大諸侯征伐は、何よりも國內市場の統一を要望する都市市民身分の支持によつて成功し、一六四八——一七八九年のフランスは、頭に一人の國王を戴くアブソルウト

モナーキーの國家にまで發展をとげてゐた。國家行政は著しく集權化され、侯伯の政治的支配は、中世に比すれば遙に縮小され、王權は絶對最高のものとなつてゐた。ブルジョアジーは、尙自らの政治的支配を行ふ程強力ではなかつたので、アブソルウト・モナーキーを支持することによつて、多くの特權と保護を國王より與へられて、侯伯の勢力圏内に自らの勢力を植ゑつつあつた。

一方諸侯は、集中的國家行政機關の最高の官職を得、莫大な年金を國王から支給されることにより、商品生産の發達によつて益々窮しつあつた自家の經濟（彼らは農民の年貢のみに寄生してゐた。）を維持することを得たのであつた。

絶對君主制はかくの如き二つの階級——即ち經濟的には無力化しつつも尙多くの政治的特權を保持する貴族と、經濟的には益々有力となりつつあつたが政治的特權を有さないブルジョアジーとの二者の一時的均勢の上に、双方を相互に對立せしめつつ一見獨立的な存在を維持してゐた。

相矛盾した二つの階級に依存したアブソルウト・モナーキーの政策は、資本主義の生み

の親としてのブルジョアの側面と、侯伯の首長、最大の地主としての封建的な側面とを有した。

互ひに利害相反する二階級の要求を、同時に國家が代表することは絶對不可能なことがある。此處にアブソルウト・モナーキーの政策のはてしなき動搖があつた。

國家は、老大な官吏群や軍隊（高級官吏、高級指揮官は皆貴族であつた。）を養ふために、莫大な費用を要した。そこで國庫収入を増加するためブルジョアジーに多くの特權と保護を與へて、國家富源の開發に力を盡した。（所謂重商主義政策の實施。）國家の直接の目的とする所は収入の増加であつた。だがこの事は結局ブルジョアジーの保護育成に外ならなかつた。（工業に對する特許、助成金。自國商品への保護關稅等々。）

併し乍ら、ブルジョアジーへの特權の賦與は、地方領主の特權の一部侵害を伴ふ。兩者の利害の調和は實に至難の事であつた。

國家の庇護によつて勢力を増大したブルジョアジーは、益々多くの權利を要求する——例へば稅制の平等を要求する。國家はむろん特權身分に味方して之を許さなかつたが、此

場合貴族や僧侶の満足は、ブルジョアジーにとつては全く不満足の種類であつた。

國家は、ブルジョアジーを害ふ事なくして貴族を満足させる事は出來ず、又反對に貴族を害ふ事なくしてブルジョアジーを満足させる事は出來なかつた。

その幼年時代に於ては、ブルジョアジーはアヴソルウト・モナーキーの支持者であり、その庇護の下に自らの階級的地歩を固めた。だが、ブルジョアジーの成長は、彼を何時々々までも温順なモナーキーの支持者では置かなかつた。ブルジョアジーは、最後に自らの政治支配を要求した。そしてモナーキーは、その封建的な地盤（フランス最大の封建的大地主は國王であり、彼は貴族の第一人者、特權の權化であつた。）の故に、自らを近代的國家に適應せしめることが出來ずして、遂に舊制度と共に没落したのであつた。

階級諸關係（舊勢の衰微・新勢力の壓力）貴族と僧侶 過去の諸勢力は貴族と僧侶の周圍に結集した。古い封建制度は本質的に、土地所有權の上に立つ。土地所有權の大部分を掌握してゐるのは此二階級である。

一、十四萬人の貴族は、土地の最大部分（西部では半分以上、北部及び東部では約三分

ノ一）を所有し、領主權を握つてゐる。然し、屢々五百乃至三千ヘクタールに及ぶ廣大な貴族の領地は、上層貴族——宮廷貴族、高等法院裁判官、財政官ら——の少數の家々にのみ屬して居た。此の上層貴族が宮廷の官職や地方政廳の高職を獨占し、宮廷に綾羅を競ひ、莫大な年金や、軍事豫算の半ばさへもを分取つた。何故なら一七八一年以來、軍隊の高級官職は家系の古い貴族の手に殘されてあつたからである。

然し乍ら彼らは新しい生産方法に適應する道を知らず、ただ奢侈な消費生活をのみ續けてゐたので、商業—高利貸資本へ依存し同時に自領領民への搾取を強化した。

國家は貴族に對して此處では借金生活から彼を救ふため、彼處では高貴な紳士淑女の氣まぐれを満足させるため法外の支出を逼られることが屢々あつた。一七七四年から一七八九年に至る間だけで、恩給や賞與による方法又は似かよつた方法で二億二千八百萬リールが國庫から支出され、そのうち八千萬が王の家族のために支出された。王の二人の兄弟は各々かくの如き方法で千四萬リールを儲け、マリー・アントアネットの特別の寵を蒙つてゐたポリニヤック家は恩給だけで七十萬リールを得、その上終身年金十二萬リール

ル、土地を買ふために一時金百二十萬リールを贈られるといふ風であつた。

次にこれとは全く違つた地方の田舎貴族たる小貴族があつた。彼らは尙夫々の自分の古巢に住んで居り、農民と共に生活した。彼らの暮しは、屢々從屬的地位にある農民とあまり異なる場合があつた。併し彼等は自分の出身を誇り、周圍の住民と融合せず、どんな仕事でも仕事をすることを卑しいことだと考へた。同時に彼らは羨望や忿懣の眼を以て、奢侈に耽る宮廷貴族を眺めてゐた。田舎貴族は國家の租税をその利益の分前には與かることなしに納めねばならなかつた。かくて彼らは騒然と國家財政の節約、財政制度の改革、身分代表によるその監視とを叫んだ。此事は彼らがブルジョアの改革論者であつたことを意味するものではない。彼らは過去を懐古しても、前方を見る事はなかつた。

「田紳的ユンケルはブルジョアに對して、百姓が都會人に對する自然經濟人が貨幣人に對する、無教養な者が教養ある者に對する、遺産に坐食する者が闖入的成り上り者に對する憎惡を抱いてゐた。」(カウツキー「フランス革命時代に於ける階級對立」宗道太譯 二四—二五頁)

二、僧侶、その數は凡そ十三萬人、その富は王國の五分ノ一といふ相當なものである、(特に北部と東部。)貴族と同じく人頭税を免じられた僧侶は、農民から十分ノ一税を、教會領地の住民からは封建的租税を徴収した。彼らはその階級構成に於て色々の種類に分れてゐたが經濟的に權力の強かつたのは僧侶階級の上層にある司教や修道院長達であつて、年一萬乃至十萬リールの収入を持つてゐた。莊大な宮殿を持ち、破廉耻にも贅澤な暮しや、淫樂に耽り、説教もしなければ、田舎の訪問もしない——といふのが彼ら上層僧侶の生活であつた。これに反して司祭(田舎牧師)は僅かな年金に甘んじなければならず、上長には輕蔑され、その地位は寧ろ農民に近かつた。だから彼らの不平は特に激しく「此の時代の書物を読み、彼らの上長が豪華な宮殿で送つてゐる醜い生活を知り、そして昔のやうに教區民に諦觀を説く代りに、その年金でがつがつ暮してゐる司祭らは、その心に満ち充ちてゐる憤慨苦惱を少し許りその心に傳へさせる。」(マティエ)

官僚貴族 初めの兩身分と第三身分との間の特殊な中間地位を國家行政の機關が占めた。十五世紀以來、官僚政治の諸機構は複雑となり、職務は増加した。近代國家の發達はこ

の擴張を説明するが、同時に絶えざる王朝の財政的要求が之に與つて力があつた。司法官や財務官、組合の指導者委員會員、市町村の要職、その他例へばルイ十四世の晩年には次の如き『官職』が新設された、鑿検査人、豚と仔豚の検査者、枯草計算人、木材積上検査人、新鮮バタの検査者、鹽づけバタの試食者等々。一七〇一年から一七一五年までに王はこれらの新官職を販賣することによつて五億四千二百リールを儲けた。

官職を買つた官吏は、それ自身の中から新しい貴族を發生せしめた。それは世襲となり、貴族の位を與へられた、彼らは舊封建貴族の帶劍貴族に對して、官服貴族を構成した。官僚貴族の一番上にパルラメントがあつた。この貴族グループは國會及び十五のパルラメント（地方の最高裁判所）に出席する最高の官吏であつた。

新たに勃興しつつある資本主義的生産方法は法曹階級を特に重要不可缺のものとした。個々の商品所有者間の契約は益々複雑多岐を極め、法曹階級——裁判官や辯護士は急速に増加し、そして必要であつただけにそれだけ又尊敬された。

彼ら官僚貴族は、規則的な収入や手数料に満足せず、機會さへあれば彼らの職權を濫用

することによつて不當な収入を得ることを考へた。

ブルジョアジー 増大しつつあるフランスのブルジョアジーの間にも色々の集團があつた。

金融貴族は、最も重要な國家の債權者として、國家の破産を防ぎその収入を高め、その支出を減少するための改革を迫るべき十分の理由を持つてゐた。

「だが然しこの改革は、『俺の毛皮を洗へ、そしてそれを濡らすな、』といふ有名な原則に従つて行はるべきであつた。げに金持連中は根本的實質的な財政改革、まして況んや社會改革に對しては、敵對的に出るべき十分の理由を持つてゐたのである。」（カウツキー、前掲書邦譯四七頁）、何故なら——

「彼等の大多數は自ら大きな封建的財産を所有して居り又貴族の稱號を所有してゐた、そしてそれについた特權や収入をあきらめざる事を好まなかつた。彼等は貴族の特權の維持についても亦、債權者が彼の債務者が没落しないことについて持つと同じかの好意的な利益を持つてゐた。彼等は單に王の債權者である許りでなく又借金貴族の債權者であつた。」

(カウツキー、前掲書)

さらに地方の商工業ブルジョアジーがあつた、一般的に云へば、彼等は舊秩序が極度に國內の資本主義的發達を抑壓するので舊秩序を嫌つてゐた。陸海軍の高級指揮官が、道德的にも肉體的にも墮落し切つた貴族に留保された事のために、フランスの武力は益々無力となり、十八世紀全體を通じてフランスにとつて不利益な通商條約や、價值多き殖民地の喪失を以つて局を結ばない戦争は一つもなかつた——ウトレヒト(一七一八)アーヘン(一七四八)パリ(一七六三)ヴェルサイユ(一七八三)の平和條約の如き特に一七八六年に結ばれたイギリスとの通商條約は、自由貿易を原則とし、従つてそれによつて安價なイギリス商品に對して關稅が徴されなかつたので、主として手工勞働によつてつくられるフランスの商品はイギリス商品との競争に於て大打撃を蒙つた。

又、内に於ては舊封建的障壁が商業を妨げた、此章の最初に於ても叙べた様に、幾千かの地方はそれ自身一國家をなしてをり、種々の關係に於て固有の法律、固有の行政を持ち關稅障壁によつてその他の部分と切り離されてゐた。その上に橋梁關稅、道路關稅等があ

つて其等は國內取引を殆んど窒息させてゐた。商業が強力な發展を遂げんためには、貴族の特權は倒されねばならず、陸軍と海軍とは改革されねばならず、地方の割據主義は破られねばならず、そして王や封建諸侯が國內に於て徵發した關稅は撤廢されねばならなかつた、商業の自由取引、特權廢止、機會の「平等」、これが商人の合言葉となつた。併しすべての商人がこの合言葉に服した譯でなかつた。例へばパリーの葡萄商組合の如く、王朝によつて特別の權利を賦與され、保護を與へられた商人はたとへ彼等が第三身分に屬してゐたにせよ舊特權國家に執着した。

商業と同じく工業も亦舊制度によつて束縛せられた。

舊制度は工業を破壊しようとしたのではない、反對にそれは工業に一〇〇%の好意を示してゐた。(此事に就ては已に度々叙べた。)だが十八世紀の六十年代以降マニユファクチュア工場に取つて代るべき近代的大工業の移入——技術革命がフランスに於ても始まると共に、ツンフト的制限、官僚的規定は益々資本主義的工業にとつて障壁となつた。だが、工業資本家のある部分は、特權國家の支持に傾いた。何となれば、未だ國內市場を缺いて

ゐた時代の一部工業資本家の顧客は、宮廷であり、貴族等であつた。フランスの最も主要なマニユファクチュアは、絹織物、ピロード、レース、毛氈、陶器の如き奢侈品の製造に携つて居り、その需要者は農民でなくて、宮廷・貴族の如き特権者達であつた。一七九三年に反革命が武装して起つた時、その先頭にはフランスの後れた地方の一たるヴァンデー地方の農民と並んで、同國の工業都市、絹工業と刺繍とで名高いリヨンのブルジョアジーが立つてゐたといふ一事はかうした點で、注目に價する。

インテリゲンチヤ 資本主義的生産方法は手工業においては結合せられてゐた諸機能を分裂せしめ「文字ある職長」の階級——インテリゲンチヤを作り出した。法律家・辯護士・學校教師・醫師・ジャーナリスト及び工業の發達につれて技師等々が出現した。此階級の中からは思想家が擡頭した。

個々の或ひは一時的な利害によつては動かされず、當時の經濟的發展と一致したブルジョアジーの恒常的利害を洞察したのは彼らインテリゲンチヤであつた。

フランス革命に於ける彼等の顯著な役割はいふまでもなくこれを認めねばならぬ。だが

注意すべきは、カウツキーも正しく指摘してゐる様に、ただ革命が全部大臣の布告や、議會の決議や、某の著作や、某の演説だけで作られたと信じてはならぬ事である。

「まさに最も重大なる瞬間に於ては、發案も斷案も、民衆、とくにパリーの城外市民及び農民の蹶起によつてなされたのだ。」（カウツキー、前掲書、六六頁）

手工業者と勞働者 ツンフト組織は既にすつと以前から硬化してしまつて、手工業的生産を一部少数者のために獨占し、親方の權利を一つの特権として固定する手段になつてゐた。職人が親方になる事は、彼が親方の子或ひは婿でない限り、乃至は親方の寡婦と結婚しない限り、不可能なことであつた。職人の身分はもはや親方の身分に至る過渡段階ではなかつた。職人は親方と最も對立した特殊の利害を持つてゐた、だが、尙暫くは彼らは親方に出世する日の淡い夢を抱き乍ら酷使されてゐた。

特權國家に於ては多くの都市の中の種々の地區が、ツンフト的強制的支配を受けない特權を享有してをり、又ツンフトは一般に都市にのみ存して農村にはなかつた。大きな急速に増大しつつある都市の近くにある城外市も亦、ツンフトの桎梏から免れてゐた。